

平成 27 年度

研 究 集 録



秋田県立大曲農業高等学校

巻頭言「本校教育のさらなる充実と発展を目指して」

校長 伊東 金一

”校舎改築を契機としての取組”

平成27年度内に校舎改築の本体工事の第一弾が終了し、新年度からは新校舎での学びが始まる。実に半世紀ぶりの改築でもあり、約三万人余りの卒業生や、地域社会からの本校への期待もますます高まるばかりである。「仏造って、魂入れず」という言葉もあるように、形や外見（新校舎）ばかりが新しくなっても、肝心の中身（教育の質）が伴わなければ地域社会からの評価が高まらないことは自明の理である。また地域社会からの評価が得られなければ、本校の未来は誠に危ういものになるかもしれない、ということを考えると校舎改築を契機にして本校教育の在るべき方向性（中期ビジョン）を示して関係教職員が同じ方向を目指して明確に進むことが今まさに求められているのである。

”SPH事業を起爆剤にして、全国に誇れる農業高校にする”

「全国に誇れる農業高校」というのはどのような高校を言うのだろうか。本校は農業高校である前に高等学校である。高等学校であるからには、授業や特別活動、課外活動等のあらゆる教育活動を通して大前提である教育の目的を達成することが求められる。本校のような農業高校は、普通教科ばかりではなく農業教科をも併せ学習させながら、教育の目的を達成しようとしている。現在の学習指導要領によれば、教科「農業」において育成する人材は「地域農業をはじめ地域産業の健全で持続的な発展を担う職業人」と記されており、さらには、将来の地域農業を担う人材（農業後継者など）や人間性豊かな職業人の育成であると謳われている。こうした定義等から具体的に考えてみれば、本校においては農業に関する学習を通してこれらの目的を達成するのだが、高等学校としては特別活動や部活動、農業クラブ活動等の充実を図る必要があること。特に、部活動を含めた特別活動の部分は、授業だけでは達成できない生徒一人ひとりに関係する大切な活動の機会でもあり、その趣旨に沿ってしっかりと充実させることで生徒指導面を含めて学校の活性化につながる波を起こすことは間違いないと思われる。現に、本校の生徒諸君の活躍によって進路実現への波及効果も生まれており、正に小さな波から大きな波のうねりへと始まっていることはたぶん誰もが感じつつあることと思われる。

また、農業クラブ活動には多彩な競技があり、研究発表や意見発表、農業鑑定や測量競技、家畜審査や農業情報処理競技などが毎年全国大会で競われているが、「全国に誇れる農業高校」となるためには研究発表や意見発表等に加えて、農業鑑定競技を基礎に据え毎年優秀賞を獲得できるような適切な指導が望まれると思う。

そして現在、文部科学省のSPH（スーパープロフェッショナルハイスクール）事業の採択に向けて小委員会を組織して取り組んでもらっているが、採択になれば本校農業教育の質的向上に大きく寄与できるものと期待しており、今後の起爆剤にしたいと考えているところである。

さらに、生徒一人ひとりの進路実現においては、数字ありきの指導ではなく生徒の第一希望進路を確実に叶えてやれるよう、より一層組織的に、効果的に、そして実際的に取り組む必要がある。

”確実な「学力保証」が求められている”

農業高校である本校にはそれぞれの目的や目標を持った生徒が入学してきている。先頃、中央教育審議会は今後「高校基礎学力テスト（仮称）」を2019年度から実施するという方向性を示した。

いわゆる、小中学生対象の全国学力・学習状況調査の高校版である。教科は国語、数学、英語の三教科の各必修科目で実施し、その結果については基礎的な学力を保証する資料として、専門学校や難易度の高くない大学では選考資料の一つとして活用されることがある。つまり、農業高校などの専門高校生が専門学校等へ進学する際には活用されるということである。そのため本県においても、平成28年度に、高校二年生を対象にして試行的に「高校学力・学習状況調査」が実施される予定である。その実施科目は「国語総合」、「数学Ⅰ」、「英語コミュニケーションⅠ」の三科目である。

農業高校は農業教科も学習するのだから、普通教科の学力保証はこれ位で良いなどという安易な教科指導ではこれからの時代の流れに逆行することになる。生徒に必要な学力を学校全体で保証する確かな体制と具体的取組が求められていることを胸に刻み、「研修」に取り組んでほしいと思います。

平成27年度 研究集録 目次

【巻頭言】「本校教育のさらなる充実と発展を目指して」・・・	校長 伊 東 金 一	1
目次		2
【1 校内互見授業】		
第1回校内研修「互見授業」実施要項・・・	研 修 部	4
第2回校内研修「互見授業」実施要項・・・	研 修 部	5
実施報告（参観シートを集約したもの）・・・	研 修 部	6
【2 校内研修会】		
(1) 心肺蘇生について	研 修 部	12
(2) 生徒理解を深めるために	研 修 部	13
(3) PTA研修会	研 修 部	15
【3 経験年次別研修】		
(1) 初任者研修		
高等学校初任者研修を終えるにあたって	風 登 友 美	17
高等学校初任者研修を終えるにあたって	佐 藤 潤之介	19
(2) 10年経験者研修		
選択研修 発光性きのこ「ヤコウタケ」の栽培にチャレンジ	大 坂 淳	20
教職10年経験者研修を終えて	加 藤 雅 隆	22
10年目経験者研修を振り返って	高 階 市太郎	24
(3) 5年経験者研修		
平成27年度高等学校5年経験者研修を受講して	大 沼 克 彦	26
【4 校外研修】		
(1) 第45回学校運営等研究協議会	佐々木 惇	27
(2) 第54回東北地区高等学校農業教育研究大会		
第13回全国高等学校農場協会東北支部大会	和 泉 有 紗	33
【5 実践報告】		
(1) 各学年部		
1年部の取り組みについて	古 瀬 利 彦	40
2年部の取り組みについて	高 橋 寿 宏	42
3年部の取り組みについて	伊 藤 寿 人	43
(2) 第25回全国産業教育フェア		
フラワーアレンジメントコンテスト（三重大会）に参加して	平 塚 祥 広	45

(3) 農業クラブ東北大会・全国大会

第66回日本学校農業クラブ東北連盟宮城大会 家畜審査協議会に参加して	田口健一	46
農業クラブ東北大会を終えて ～「大曲はなびピザ」でつながる地域との絆～	高橋由美子	47
農業クラブ東北連盟大会に出場して感じたこと	大沼克彦	49
農業情報処理競技大会に参加して	高階市太郎	50
第66回日本学校農業クラブ 全国大会を終えて	照井豊和	51

(4) 全国商業高等学校英語スピーチコンテストを終えて

	古戸毅	53
--	-----	----

(5) 産業・情報技術等指導者養成研修 研修成果報告書

	照内之尋	57
--	------	----

(6) 岩手大学大学院農学研究科修士論文要旨

山村の現局面と森林を活用した地域振興への移行に関する研究	照内之尋	73
------------------------------	------	----

(7) 部活動全国大会

[自転車競技部] インターハイ・国体を終えて	藤井亨	78
[柔道部] 成長の跡	石戸将太	79
[女子ハンドボール部] 平成27年度全国高等学校総合体育大会に出場して	山本力	80
[相撲部] 近畿インターハイを振り返って	小林和成	81
[なぎなた部] インターハイ・国体を終えて	古瀬利彦	83
[陸上競技部] 全国高校総体に出場して	齋藤羽純	84

【学習指導案】

1年S組 家庭基礎 (H27.6.2)	風登友美	85
1年H組 家庭総合 (H27.9.29)	風登友美	88
2年H組 家庭総合 (H27.11.16)	風登友美	93
1年S組 家庭基礎 (H28.2.23)	風登友美	96
3年S組 動物バイオテクノロジー (H27.10.13)	大沼克彦	99

【研修部報】

第1号～第5号	研修部	101
---------	-----	-----

【編集後記】	研修部	111
--------	-----	-----

1 校内互見授業

第 1 回校内研修「互見授業」実施要項

研修部

1 目 的 教員同士が、教科の枠を超えてお互いの授業を見合い、評価し合うことで授業の改善、授業力の向上を図る。

2 実施期間 平成 27 年 11 月 16 日（月）～11 月 20 日（金）

3 手 順

(1)授業者 授業者は事前に、「互見授業時間割」（中央白板に掲示）に、自習や演習のみなど参観に適さないコマに朱で斜線を入れる。

(2)参観者 ①「授業時間割」を確認、参観予定を立てる。

②事前に授業者に参観する旨を伝える。

③期間内に 1 回は参観する。

④参観後、11 月 30 日(月)までに教頭先生に「※授業参観シート」を提出。その後、授業者へお渡しします。

※ H27 年度職員共有→研修部→ 07H27 互見授業

→ H27 第 1 回互見授業参観シート

第 2 回校内研修「互見授業」実施要項

研修部

1 目 的 教員同士が、教科の枠を超えてお互いの授業を見合い、評価し合うことで授業の改善、授業力の向上を図る。

2 実施期間 平成 28 年 1 月 22 日（金）～ 1 月 28 日（木）

3 手 順

(1)授業者 授業者は事前に、「互見授業時間割」（中央白板に掲示）に、自習や演習のみなど参観に適さないコマに朱で斜線を入れる。

(2)参観者 ①「授業時間割」を確認し、参観予定を立てる。

②事前に授業者に参観する旨を伝える。

③期間内に 1 回は参観する。

④参観後、2 月 5 日(金)までに教頭先生に「※授業参観シート」を提出。その後、授業者へお渡しします。

※ H27 年度職員共有→研修部→ 07H27 互見授業

→ H27 第 2 回互見授業参観シート

平成27年度 第1回互見授業 実施報告

月日	校時	クラス	参観者	授業者	教科	科目	(1) 良い点	(2) 改善すべき点	(3) その他
11月24日	5	1S	高久 育宏	石戸 将太	保健体育	保健	本時の目標が提示されている。生徒の返事や発表の態度が良かった。板書が工夫されている。適切な発問がなされている。	積極的でない生徒への接し方、生徒が身近な話題と感じるための指導の工夫、知識の定着を図るための工夫。	
26日	4	3AC	高橋 華子	山本力 高久育宏 齋藤羽純	保健体育	体育	生徒が自分が次に何をすべきかわかっていて、自主的に行動している。バドミントンで、ワンプレイの中で良いパフォーマンスができれば評価するなどの工夫があり、生徒のモチベーション向上につながっていると感じた。	普段、教室の授業で落ち着いて話を聞けない制度は体育館に行っても同じだと感じた。	自分が担任しているクラスなので、運動や集団行動が苦手な生徒がちゃんと授業に参加できているか不安なところもありました。しかし、得点係を当たり前のようにやっている様子を見て、体育の授業の中での居場所を作っていただいているのだと感じました。ありがとうございます。
19日	2	2CS	石垣 ルリ子	猿橋薫 高久育宏 齋藤羽純	保健体育	体育	生徒はやるべきことをすでにわかっていて、全体で準備体操をした後、特に指示なくとも自主的に自分の担当の先生の前に集合していました。日頃の躰が行き届いているのだと感じました。 準備体操の後、種目別のミーティングにおいて、3名の先生がそれぞれの持ち味を生かしながら競技前の指導をしておられたので興味深く拝見しました。体育日誌の内容を踏まえ、振り返りや本時の課題を確認しているところは参考になりました。 猿橋教頭先生がBGMを流しながら練習させていました。音楽の効果は生徒の動きに好影響を与えますし、何よりも楽しさが増すと思います。私もBGMを使用することを前から考えていたので参考になりました。	私も2Sを受け持っているのですが、英語の時間に落ち着きのない生徒は体育の時間も落ち着きがないということがわかりました。英語の時間に見せる人間関係は他の授業ではどうなるのだろうかと思っていましたが、そんなに差がないこともわかりました。 授業規律を保つ上で、先生が生徒にどこまで許せるか(妥協するか)は難しいところだと思いますので、差額の授業よりも躰が大変なのではないでしょうか。	体育の授業の冒頭でどのような指導を行うのか、以前から関心があり、今回参観させていただきまし。他強化の、特に体を動かす授業の様子はいろいろと参考になります。2Sの生徒には「今度一緒に体育をやる」と約束してしまったので、近々参加させてください。どうもありがとうございました。
17日	2	2H	石戸 将太	高久 育宏	保健体育	保健	生徒同士で話し合う場を設定し、発表ではいろいろな考えが出ていた。生徒の返事や発表する態度が良かった。板書が工夫され、見やすかった。	話し合いに積極的でない生徒への指導の工夫。	なし
17日	1	2S	山本 力	高久 育宏	保健体育	保健	水質汚濁の具体的な例を提示し、生徒にとってわかりやすく説明できていた。	生徒に意見を発表させる場面を増やすと良かったと思う。	なし
19日	3	3C	鈴木 絢平	加藤 雅隆	地歴公民	現代社会	黒板に図示しながら説明することで視覚に訴え、一目で全体像がつかめる復習内容であった。生徒の思考が促されるような、そして答えのない発問により、個々でじっくり考える時間が与えられている。プリントの内容、構成が生徒の活動および思考を見据えたものである。机間指導で生徒の活動を把握している。間のつなぎ方が上手い！生徒の発言の活かし方が上手い。例えば、様々な方面に考えが巡るように配慮されている。話しながら進めているのに、時が丁寧である。	示したプリントが後方からではわかりにくかった。もう少し大きければ。	話を聞ける生徒と聞くことができない生徒がいる。生徒の実態を把握しながら授業を進める難しさを痛感した。
19日	3	3C	永井 元	加藤 雅隆	地歴公民	現代社会	授業規律、メリハリのある要点整理、板書が白と黄色。生徒がよくついてきている。さすが3年生！	なし	ノート作りとプリント整理はどのように指導していますか。居眠り生徒への関わりはどうしていますか。生徒の発言内容をいかにしてノート、メモさせてますか。
13日	5・6	3年農科	藤井 亨	高橋 寿徳	農業	課題研究	生徒を自主的に活動させるために綿密な計画が組まれていると思いました。生徒が自ら課題を設定し、グループ内で話し合いをしながら解決しようと取り組んでいました。	特にありませんが、火気の使用について細心の注意を払う必要があると思いました。	大がかりな準備もあり、大変お疲れ様でした。
18日	1	2H	永井 元	佐々木 惇	農業	農業と環境	生徒とのやりとりをよく引き出している。何気ない生徒の発言を次の展開に活かしている。中核(単元の中心)はしっかりおさえている。「三大穀物」の意義をおさえている。ニュージーランドの現状をよく伝えている。生徒の反応も良い。	発言する生徒が決まっているように感じた。個々の発言を全体に広げるにはどうするか。私も苦慮しています。	生徒の脳がよく動いている。活性化している。最近の体験(修学旅行)を素材にしている。最近の話題(TPP)を提供している。NIE good

16日	6	3B	鈴木 絢平	佐々木 俊友	地歴公民	日本史A	プリント形式の授業にICTを導入することでスムーズに展開でき、生徒の視覚に訴えることで大変わかりやすい授業であった。他クラスの意見をプロジェクターで共有する。クラスの良い意見もプロジェクターで共有していた。互いの意見を尊重し合う姿勢が養われるのではないかと。楽しそうに授業を受ける様子が見られた。想像力が豊かになる授業であった。	投影機が縦長であったため、文全体を写すことができなかった。	コメントの内容について、恥かしく手書き辛そうな生徒が見られた。内容は受けを狙うものではなく、時代背景に絡めた内容を予想して答えさせるのも良いと思った。(考えつかない生徒、真面目な女子生徒などには)
19日	4	1H	永井 元	古瀬 利彦	英語	コミ I	おおむねよく取り組んでいたが一人でやっている生徒もいた。指示に従っているように見える。ペアワーク中に個々の生徒の質問に対応していた。	本時の目標が示されていませんでした。	Answer in English 80は全学年でやっているのですか。
19日	3	1S	大釜 美佳子	古瀬 利彦	英語	コミ I	和やかな良い雰囲気の中で生徒を発言させる「仕掛け」がたくさんありました。	発言する生徒の声が小さいと後ろの生徒が聞こえないので、やや消極的になると感じました。	ありがとうございました。
18日	3	3年農科	佐々木 惇	照内 之尋	農業	森林経営	本時の目標設定、向けたアプローチ(質問)を通して生徒が確実に目標を理解することができていた。意欲的な生徒だけでなく、多くの生徒の意見や考えを導くよう誘導していた。生徒の理解を深めるよう数値を上手に活用している。		
19日	3	2年農科	照井 豊和	照内 之尋	農業	林業	皆しっかり目的意識をもって作業に取り組んでいた。ヘルメットの着用が徹底されており、安全面へ配慮された授業であった。	先生もヘルメットをかぶってみては？似合いそうです。	
20日	1	2年農科	齋藤 羽純	伊藤 寿人	農業	食品化学	コミュニケーションがしっかりと取られており、会話のキャッチボールがたくさんあった。生徒が発問に答える際の助言(ヒント)があり、生徒が答えやすいように工夫されていた。どんどん生徒に発問を投げかけ、生徒の発言の機会が多かった。言語活動と講義のメリハリがしっかりとしていた。		話したい生徒ばかりで大変ご迷惑おかけしております。その生徒たちをしっかりと学習に向かわせていてすばらしいと感じました。実習などになったらすごく大変だろうなと思いましたので、今度ぜひ参観させていただきたいと思いました。ありがとうございました。
19日	1	3年農科	古戸 毅	高階 市太郎	農業	農業経営	教師と生徒が自由に意見を出し合える、ゆとりとアットホームな雰囲気を先生自らが作り出しています。そのため生徒に笑顔や安心感が伝わります。教師が発問に答えた生徒をその都度褒めています。板書は丁寧で見やすいです。生徒が記入しやすい資料(プリント)を精選し、活用しています。	生徒の私語に対する(指導ではなく)対応が少しあっても良いと感じます。生徒一人一人の学習の進捗状況を把握できるようにするため後方にも机間指導があっても良いと思います。たくさんある帳簿の中でいくつかの実物を生徒に転じ・回覧できればさらに記帳への理解が深まるのではないかと考えます。チョークも赤色があるとさらに理解しやすいところがあると感じます。	生徒との信頼関係が確立されているからこそ授業だと感じました。取り入れていきたいです。ご協力ありがとうございました。
18日	4	1S	石垣 ルリ子	菊地 綾子	理科	科学と人間生活	配付プリントが充実していると思いました。板書とプリントが明確にリンクしていたので、生徒もメモが取りやすいと思いました。ただ説明するだけでなく、生徒に問いかけながら話を進めていたところが良かったと思います。生徒も、指名されなくともその問いに対して答えを言っていました。が、そういったやりとりは大切だと思いました。指名した生徒が簡単に「わかりません」と言ったのに対し、「一緒にやりましょう」と声をかけ、答えを導き出したところは素晴らしいです。単位の換算の問題では小数点をどちらに動かすのかが分かっていない生徒がいましたが、黒板の数字に波型の矢印を書き込んで説明していたので、視覚に訴える形で分かりやすかったと思います。	学習意欲が低い生徒が少なくないようで、先生の御苦労がうかがえました。授業中まったく手を動かさない生徒、前に配付したプリントを用いて問題を解かなければならないのに、そのプリントの使い方がわからないでいる生徒等いろんな生徒がいたので、そのような生徒にどのように対処するかはやはり課題だと思います。私も担当する1年の他クラスで同じような状況で、他の先生からも同じような話をよく聞くので、皆同じなのだと少し励まされました。プリントが素晴らしいことの弊害として、生徒が顔を上げなくなることがあると思います。どこで黒板に目を向けさせたいか、その時どのように指示するのかということは一つの考えどころかもしれません。発酵と腐敗の違いについては本時の大切な部分だと思いますが、先生が生徒個人の意見を聞く前に、生徒達が周囲の生徒たちと意見交換をする場面を設けてはいかがでしょうか。また、どんな発酵食品があるかを書かせる場面でも、教科書を見せずにペアやグループで考えさせてもいいと思いました。話題が食べ物なので、生徒も話しやすいと思います。	授業の最初の方でやった、「ウィルスはどちらにも入らない」ということに、個人的に知的好奇心がぐすぐられました。これも個人的な疑問ですが、牛肉をねかせて熟成させるのは今回の授業テーマと全く関係がないのでしょうか。他教科の授業はいろいろと参考になります。ありがとうございました。
19日	6	1C	鈴木 絢平	菊地 綾子	理科	科学と人間生活	生徒と一緒に考えながら授業を進めている。生徒の状況を見つづ、つまづきポイントを解説しながら進めている。導入で確認した微生物の大きさの目安が展開時の演習部分に活用されている。進め方が速すぎないため、着実に理解しながら進められる。発酵と腐敗という、農業にも絡んだ身近な内容について取り上げている。発問内容が生徒が答えられる範囲のものである。ただ説明するのではない、生徒に答えさせることで授業をつくっていく。生徒のレベルに合わせた授業を行っている。	単位変換の表などの表を途中で消さないほうが良かったのではないかと感じた。	

16日	3	2H	佐藤 香	風登 友美	家庭	発達と保育	時間を決めてタイマーを使いながら移動することは集中して見ることにつながったように思う。事故の種類を色のシールで分けて貼らせたのはわかりやすかった。時間を決めながらも生徒の反応を見ながら進めていた。発声が悪くて言葉がはっきりしてわかりやすかった。	グループ学習で最初の先生の説明のとき、後ろ向きになっている生徒がいた。机を少しずらすなどして、黒板がみえるようにしたらどうか。「せば」「なので」などの言葉違い、字の書き順が少し気になった。グループでやることと個人でやることの区別と効果を今後一層考えていける必要があると思う。	参観させていただきとても勉強になりました。ありがとうございました。
16日	3	2H	高階 市太郎	風登 友美	家庭	発達と保育	動きのある授業で、個で考える時間と協議する時間があり、考えを深めさせるにはとてもいい授業だった。視覚で考えやすいもの(絵・グラフ・シールなど)が多く、準備がきちんとなされていたのが伝わってきた。1時間の授業が終わったときに黒板を見て、授業の振り返りができる板書だった。指示が徹底されていた。	生徒を動かす、作業をさせるというのが授業のメインになってしまいがちだが、後半の部分(安全対策を考える、発表する、先生の補足説明)のところにきちんと時間をかけられると、もっと生徒の思考が深まると感じた。作業のところの時間をもう少し短くしても大丈夫だと思った。意見発表した後に先生が話している内容にも生徒に考えさせる教材がいくつかあったと思った。	準備もしっかりされていて、声のトーンもきちんとしていて立派な授業で頭が下がる思いです。何よりも丁寧に1つ1つの内容を進めているのが印象的でした。もっと初任研のときにしっかりと授業を組み立てる力をつける必要があったと考えさせられました。ありがとうございました。
16日	3	2H	石垣 ルリ子	風登 友美	家庭	発達と保育	絵を効果的に使用しているところが興味深いと思いました。柱に貼った絵を見て危険に気付かせる活動は、生徒に考えさせることができる機会だと思います。また、グループ討議の際、危険を分類ごとに色分けしたシールを用いて絵に貼らせる活動は、自分がしていることを視覚化できるので、生徒は考えを整理しやすく効果的だと思います。プリントの一番下に自己評価の欄がありましたが、生徒に自分の活動を振り返る機会を与えることは大切だと思います。私も「Can-Doリスト」を用いて生徒に自己評価させることを考えているので、参考にさせていただきます。	柱に貼った絵を見ている時について。先生がいろいろな注意を大きな声で呼びかけていましたが、生徒は集中して絵を見ているので耳に入っていないと思います。指示はすべて活動の前に行った方がよいと思いました。また、絵を見回っている時は友人同士で話をさせない方がいいのではないかと思います。どんな目線で子どもの危険について考えさせるかを生徒に意識させてみてはどうでしょうか。「子どもの周りには危険がたくさん→子どもは危険を認識できないので、保育者はその危険を取り除く役割を担う必要がある→保育者が危険に気付くことや安全対策を考えることは大切だ」というような保育者としての目線を生徒に明確に持たせると、危険を探す活動の動機付けになると思いました。机間指導の際は、考えが浅いグループには少しヒントを与え、深く考えさせると良いと思います。「もし万が一ベランダに出てしまったらどうする？」とヒントを与えたのは、実は私でした。)発表の時、班の全員を前に出したのはどういう意図があったのでしょうか。(発表者が心細いから?)せっかく全員が出て行くならば、発表者にも何か役を与えてもよかったかもしれません。プリント(2)、(3)は先生の板書をメモすればよかったのでしょうか。(3)には自分の考えを書けばよかったのでしょうか。2通りの生徒がいたので、指示が明確に通っていないかったかもしれません。先生が説明や話をする時はクラス全体に問いかけをしながら話すコール&レスポンスのようなものもあっていいと思います。(大曲養護学校高等部の授業のような雰囲気です。)それができるクラスの雰囲気だと思います。	視覚に訴える授業は準備が大変ですが、今の生徒達には効果的だと思います。私も手間暇惜しまず準備をしなければ、と改めて感じました。生徒も楽しんで授業に取り組んでいましたし、先生も楽しそうでした。それが一番大事なことだと思います。ありがとうございました。
16日	3	2H	杉山 裕子	風登 友美	家庭	発達と保育	声が大きく生徒への指示が聞き取りやすい。グループにすることにより、自分にはない考えに触れる機会が増え、考えるきっかけになる。板書がとても分かりやすく整理されていた。考える時間をタイマーで決めていたのでだらだらしないので良かった。	グループごとの発表の際、役割を分担すると良かったと思う。(発表する人、掲示する人、指す人など)	最後のまとめで発達の様子との関連に触れていたのも、あとは視聴覚教材などで再度取り扱うと効果的だった。すごく内容がわかりやすく、とても勉強になりました。ありがとうございました。
20日	1	2H	千葉 裕子	風登 友美	家庭	フードデザイン	一人一人メニューが違うため、準備段階で様々な質問が出ていましたが、それぞれにしっかりと答えており、目が行き届いていると感じました。指示もわかりやすかったです。		

18日	5	1A	古瀬 利彦	大釜 美佳子	英語	コミ I	ペアで活動する場面が多く、眠くならず授業を受けられる。多くの指示を英語で出しており、生徒も慣れている。音読練習で生徒の声がよく出ている。フラッシュカードを使って英語の読みと日本語の英訳を行っており、率先して答えようとする生徒が多かった。和訳の空欄穴埋め問題に答えるときもペアにしているため、協力して答えられる分、プレッシャーが少なく良かったと感じた。和訳穴埋め問題の左側に英語の本文がついており、英語を見て和訳を考える習慣が付きやすいと感じた。単語テストの満点者を張り出していて、励みになるし、担任にもわかる点でも良いと感じた。整然とし着席した状態で授業を受けており、不必要に動くような生徒がいなかった。	パートナーが欠席している生徒に対して特に指示がなかったが、日頃から指示してある状態なのか。	単語テストの平均点が15点台と比較的高かったが、緩り指導として何かさせていることがあるのか。いろいろと参考になる点があり、有意義でした。参観させていただきありがとうございました。
12月1日	5	3H	風登 友美	高橋 由美子	家庭	介護福祉基礎	クリスマス会のお菓子作りは数種類あって楽しそう。生徒一人一人が役割をもって取り組んでいる。(その中でも教え合いや話し合いが生まれ、いい雰囲気)生徒の反応をよく見ており、机間指導が丁寧(手順を間違えそうだったり、危険なときはすぐにかけつける)理論的に説明しているのだから分かりやすい。事前に練習していて、失敗の理由を考えさせて本番に活かすことができる。		前時までの事前指導や普段の丁寧な指導の様子がうかがえました。生徒が目的を持って作業し、ふれあいでの交流の集大成として、交流相手のことを考えながら試作している様子が見られました。急な参観の申し込みでしたがありがとうございました。
18日	2	1A	伊藤 寿人	藤井 亨	情報	農業情報処理	本時の目標がよく生徒に伝わっている。生徒と良くコミュニケーションが取られていた。PCの技術面での指導が適切である。	ホワイトボードのマジックが薄い。	PCが古く、レンタルだから新しくしてはどうか？
17日	2	2S	佐々木 俊友	佐藤 俊	数学	数A	授業内での発問や生徒の答えの導きの助言、アドバイスの的確で理解がスムーズに進んだ。生徒理解もあり、つまづきそうな問題でもできる生徒でなく、解けそうな生徒と計算の過程を確認しつつ、正当へ導いている指導が見られた。	問題演習が中心だったため、あまり動きや意見の広がりが見られなかった。教科特性でもあると思うが。	
19日	4	1S	永井 元	菅原 久美子	数学	数 I	生徒の発言を全体に伝えようとしている。声が後ろまで通る。生徒の考えを全体に広げ、方針を決めた。黒板の使い方。居眠り生徒への対応(アラタさん:アラタさんに回答させていた)クラス全員で解答に導こうとしていた。		習熟度の差が大きいように思える。どう対処していますか。グラフの形状、二次関数の解など複数の情報を結びつけるための工夫はどうされていますか。
17日	1	3年選C	永井 元	羽川 尚	音楽	音楽 II	9人を3グループに分けて練習させていた。リコーダーアンサンブルに意欲を持たせていた。なじみのある楽曲に取り組ませていた。単元シートへの記録が反省と課題の解決の糸口になっている。生徒一人ひとりの習熟度に応じて指導していた。		

平成27年度 第2回互見授業 実施報告

1月	校時	クラス	参観者	授業者	教科	科目	(1) 良い点	(2) 改善すべき点	(3) その他
27日	4	2A	佐々木俊友	鈴木絢平	理科	生物基礎	授業の流れ(目標・課題など)が明確に示されており、生徒も迷いなく取り組む様子が見られた。授業内で定着度合いの確認、評価といった見下ろしがちなところも押さえている。生徒が自ら意欲的に相互に学び合う姿勢が見られる。	提示する資料を身近な所から集めても良いかと(股間があれば)、プリント配布しているようなので、その重要なところにマーカーなどの指示があれば丁寧かと。	よく作り込まれたパワーポイントだと思います。シンプルながらも教科書の内容を押さえていて教材研究をよくしているようでした。
27日	4	2A	佐藤俊	鈴木絢平	理科	化学基礎	話し方のテンポがよく、スラスラと説明が進んでいると思いました。板書の代わりにスライドとプリントを用いることでよりスムーズに感じました。生徒どうしが互いに相談する、教え合う環境が作られており、一部の生徒が取り残されにくいと思います。	物質の量を計算する際、比例の関係を利用していたので、それ自体がもっと詳しく説明されていたので、それ自体がもっと詳しく説明されていたのと分かりやすいと思いました。例)aとbが比例→aが2倍、3倍…となるとbが2倍、3倍…・abが一定になる。 どちらか1つでも明確に提示すれば計算の一步目が踏み出しやすいと思います。	大変参考になりました。ありがとうございました。
27日	1	2年系選	齋藤羽純	和泉有紗	農業	野菜	コミュニケーションがしっかりとれている。生徒は何をやすべきかしっかり把握しており、自主的な活動がなされている。今まで習ったことを質問してみたりして、知識の定着を図っている。		よく言えば明るい生徒たちをあたたかく見守り、育ててくれてありがとうございます。実習となると騒がしくなるため、指示や指導が大変かと思います。最初にしっかり指導したからこそ、今日のように動けるのだと思いました。これからよろしく願います。
28日	1	3年系選	加藤雅隆	照内之尋	農業	林産物利用	授業を行うための教科書、ノート、筆記用具などの学習環境と準備もしっかり行われており普段からの指導が定着していることが感じられる。3年生にとっては学年末考査直前ということで「考査対策学習」であったが、1年間の授業を振り返っての内容で生徒たちも記憶をたどりながら丁寧に取り組んでいた。既習事項の確認であるが、例示やエピソードなどを説明に加えることで学びが深まっている。少人数の授業の利点である生徒同士の「やりとり」に指導者が適切に対応することで自然な形でアクティブラーニングが実現した。	既習事項ということと進度が早めであったが、重要語句については教科書記載ページなどとも合わせて共有すると生徒の振り返り学習に役立つのではないかなと思う。	農業高校の特徴的な授業で大変参考になりました。また突然の申し出にも関わらず、快く引き受けてくださりありがとうございます。
28日	1	1S	照井豊和	守屋拓	農業	農業と環境	本時の目標が明示されていた。生徒の活動がしっかり指示されていた。(書く・聞く・考える)初期対応が早い(騒がしくなりそうな所で注意していた)次学年の専門科目とのつながりに触れながら授業を展開していた。	光合成の反応式は既習事項ですが、正しい式を示したほうがよかったと思います。(間違っている生徒や書けない生徒がいました)	授業規律が保たれており、優しさの中にも厳しきありという照井先生の人柄が出ていた授業だと感じました。突然の申し出でしたが、快く引き受けてくださりありがとうございます。今後の授業で活かしていきたいと思います。
27日	1	2S	鈴木絢平	石垣ルリ子	英語	英表Ⅰ	ITならではの導入方法であった。(英会話の内容からキーワードの意味を気づかせる)表情が豊かで印象が良い。「笑う」=laughをただ教えるのではなく、体を使って表現することでヒントを与えていた。周囲の友達と話し合いながら考えを深められる時間が与えられている(活動的な時間)導入、展開1の内容が展開2の「手紙を書く」という目的につながっている。普段伝えることのできない感謝の気持ちを伝える機会を設け、交友関係が深まるチャンスを与えている。	途中で手紙を書けることが今日の目的だと気づいたこと。善し悪しはあると思うが、最初に目的・目標を示すことで授業内容のつながりを把握しやすいのではないかと感じました。	英語の授業における表現力は他教科にも応用できることで必要だと感じた。参考になりました。

25日	6	1C	古戸毅	石垣ルリ子	英語	コミ I	ALTと息の合った授業を展開しています。ALTが黒板の前で説明している間に教師が机間指導をすることで生徒一人一人の学習状況を把握し、各自に適切なアドバイスができています。 ・小型プロジェクターを利用し、黒板に模造紙を貼ってスクリーンにし、生徒に静止画でなく、臨場感のある動画を見て貰って英語を学ばせています。時間のロスとなる大がかりな設営は不用であるため、すぐに授業を始められます。 ・教材は生徒の好きなテレビや映画のアニメーションです。そのためどんな生徒でも楽しく学べていると感じました。スクリーンに映る映像も美しく鮮明であるためストーリーを理解しやすいです。 ・生徒の学習資料(プリント)はアニメのキャラクターが載っており、動画を見て、ALTや教師のヒントから解けるものです。また、この時期に因んだタイムリーな話題(節分)を取り上げています。教材の精選にもよい工夫が見られます	生徒の私語に対する(指導ではなく)対応が少しあってもよいと感じます。問いかけに答えてる生徒はほぼ固定している(男子)ようなので、女子や他の男子に指名をして、立って答えてもらう機会があってもよいと思います。授業にほどよい緊張感が生まれます。黄、赤等のチョークも使うと生徒が大切な箇所を認識しやすくなると感じます。	簡単な小さなスクリーンでも美しい動画と精選された教材により大きな教育効果が得られることを学びました。目からうろこが落ちました。御協力大変ありがとうございました。
27日	2	3S	石垣ルリ子	加藤雅隆	地歴公民	現社	整容を整えてから授業に入るなど、授業規律がしっかりとしていました。高校生には遠く感じられる政治を「自分事化」という視点は、これから選挙に参加する若者には特に大切だと思います。また、自分事化することによって授業内容が自分の日常生活とリンクするので、勉強が単なる勉強で終わらず、生徒が知識を自分の血肉にできるようになると思いました。自分事化はどの教科にも大切な方法だと感じました。 ・政治の話ではありますが、自分の価値観についてじっくり考える良い機会でした。 ・憲法など6つの項目がすべて連動していることなど、視点を明確にして作業に取り組ませていたので、それは大切なことだと思いました。 ・政党のマニフェストを読ませて自分の考えを明確にする作業は興味深かったです。政党や政策については取り扱い注意を強調されていましたが、そういう配慮は大切な部分だと思います。 ・政治的判断基準の話で矢印が出てきましたが、あれはおもしろい発想でした。例として既習事項を当てはめていったところは更に良かったと思います。	意識すべきことや諸注意が授業内にいくつかでてきたので、それを黒板にまとめておけば、考えをまとめているときに振り返りやすいのではないかと思います。	個々での活動が多い時は、手が止まっている生徒への対応もきめ細やかにできるので、社会の授業であってもITが効果的かもしれないと思いました。 ・他教科の授業はいろいろと参考になります。ありがとうございました。
26日	5	3ABC	伊藤寿人	佐々木俊友	地歴公民		プリントが準備され本時の授業の流れが示されていた。発問カードが準備され、全員に発問する機会が与えられていた。小丹生にケーションが良くとられ、動きのある授業であった。生徒のプリント記入が良くなされていた。発問に答えることのできない生徒に他の生徒がヒントを教える場面があり、生徒が主体となっていた。本時の目標、取り組みが十分に理解されていた。	起立して返答すると注目度が上がると思われそうです。プリントをノートに貼ったり、ファイルに綴じると授業の一貫性が保たれると思います。発問に対する返答の順番を生徒に決めさせるのも時には有効だと考えます。	
27日	1	1AB	和泉有紗	齋藤羽純	保体	体育	体育館をまわりながら生徒に対して指導助言や注意点等の声かけがされていた。事故のないようしっかりと全体に目が配られていた。生徒たちは楽しそうに取り組んでおり、全員で頑張ろうとする意識の高さが感じられた。生徒に語りかける口調が丁寧で、生徒を尊重しようとする姿勢が伝わってきた。また明るい雰囲気でも和やかかつメリハリのある授業だった。		参観させていただきありがとうございました。

2 校内研修会

- (1) 心肺蘇生について
- (2) 生徒理解を深めるために
- (3) P T A研修会

校内職員研修会

研修部 石垣 ルリ子

第1回	研修項目	心肺蘇生について	期 日	平成27年5月14日(木) 13:30～14:30
	会 場	格技場	参加者数	30名
	講 師	日本赤十字社秋田県支部 指導員		



校長先生あいさつ



心肺蘇生の重要性について講義



指導員による手本



絢平先生・俊友先生・守屋先生がチャレンジ



一人にひとつずつ練習器具が渡され、実際にやってみる

湯澤先生によるエピペン講座

冒頭で校長先生が話されたように、本校では十数年前、運動部員が練習中に亡くなるという悲しい事故が起こった。本校は体育の授業や農業実習のほか部活動なども活発に行われており、心肺蘇生をしなければならないような事態は身近にあるのだという認識を、すべての職員が持たなければならない。そういった本校の実態を考えると、今回の研修は非常に重要なものであった。定期考査期間中に計画したので週休等で不在の方が多いことが予想され、参加人数に不安をもっていたのだが、幸い、思いの外多くの方々に参加いただいた。

講師の方から説明を受け、頭で理解はしたものの、実際にやってみるとなかなかうまくいかないものだった。お借りした練習器具は児童生徒向けに作られ、マッサージを行うと可愛らしい音が鳴るものであったが、本気を出さないと正確に心肺蘇生が行えなかった。一連の動作を終えた後、事故等に実際に遭遇したら自分はこの通りにできるのだろうか、この研修は年1回では不十分なのではないかと思った。また、本校の AED 設置場所をすべて正確に把握している人が少なかった。

本校にはエピペンが必要な生徒がおり、私たち職員がエピペンについて知っておく必要があるため、講座の時間を設けた。AED でもエピペンでも、生徒(時には職員)の命を救うものである。他人事と捉えず、いつ自分に使用の機会が生じてもいいように心がけておかなければならないと強く感じた。

第2回	研修項目	生徒理解	期 日	平成27年5月14日（木）16:00～16:50		
	会 場	大会議室	参加者数	38名	講 師	養護教諭 湯澤美千代先生
	目 的	本校の生徒が抱える、教師の目に見えないような心の問題をいち早く察知し、生徒の問題解決の一助となるべく、生徒理解を深めるための方法を学ぶ。				



この研修は年間計画に入れていなかったが、本校生徒の動向に合わせ急遽開催を決めたものである。計画当初、外部から講師を招くことも考えたが、出来る限り本校生徒の実情に迫りたいということで、本校養護教諭の湯澤先生に講師を引き受けていただいた。

内容は学習障害や自閉症など配慮が必要な生徒についてであるが、具体的なものにしたいと考え、湯澤先生が過去に受けた研修内容をベースに本校生徒の実例を出しながら講義をしていただいた。いろいろな生徒に対し、どのような配慮が必要なのかについて情報を共有することができた。研修の最後に Hyper-QU についての話があったが、本校でも来年度それを導入する方向で話が進んでいる。

【当日配布資料】

問題を抱えた生徒の現状と、その向き合い方について

H27年度 職員研修

内容

- 1 本校の相談の現状
- 2 学校で出会う諸問題の対応
- 3 QUについて

1 本校の相談の現状

○保健室の利用状況（1月末まで）
来室件数819件（心的要因156件）

【保健室での相談内容】

○スクールカウンセラーへの相談（1月末まで）
・総時間29時間（県費22時間、PTA費7時間）
・広域カウンセラー緊急支援 6時間

【スクールカウンセラーへの相談内容】

相談の対応

- ・座る位置、声のトーン、話す速度、相手が使った言葉を使い、姿勢を合わせる。
- ・相手の非言語に注意しながら、自分も非言語できちんと聞いている姿勢を見せる。
- ・「治そうとするな、解ろうとせよ」
- ・本人の中にある解決
- ・相談＝「聴く」 言える＝「癒える」

2 学校で出会う諸問題の対応

発達障害

- ・何らかの脳機能障害のために、認知、言語、社会性及び運動などにおいて、年齢に期待される発達課題が達成できない。
- ・発達障害支援法（2005年4月施行）

○発達障害の子どもの様々な困難

①学習への無力感
②人への極端な依存
③セルフエスティームの低下
④努力の拒否 問題行動
⑤失敗体験の繰り返し
⑥注意・叱責
やる気の低下
二次障害の出現

不登校、引きこもり、非社会的、反社会的、うつ病や精神障害への発展

知的障害 (MR)
自閉症スペクトラム障害 (ASD)
注意欠損・多動性障害 (ADHD)
学習障害 (LD)

混同しており障害名がつけられない。
→個人に合わせた対応を学校側が考えていかなければならない。

“学習障害” (LD)

聞く・話す・読む・書く・計算・推論のうち特定のものの習得と使用に課題。

“自閉症スペクトラム障害” (ASD)

社会性の障害 (他人との関係づくりが苦手)、コミュニケーションの障害 (他人に意思を伝えるのが苦手)、想像性の障害 (こだわり)、その他 (様々な感覚異常)

“注意欠陥・多動性障害” (ADHD)

不注意、多動、衝動性。

LDの特性(見え方)

①あ ッ d v お し b i
②<L>
③
④ +609 74
⑤

形や色・音・匂い・目と手の関係・空間認知・視覚的配座等の認識

対応

- ・一時一事の指示。30秒以内の短い言葉で。しっかり確認。
- ・指示は紙に書いたり絵に表すと効果的。複数の指示が必要な時も書いて示す。
- ・マイナス行動は理由を説明し、代わりに何をしたらいいのか教える。プラス行動を褒めて増やし、マイナスを減らす。
- ・ルールや予定を予め示し、予定に従って行動することを意識させる。

本校の対応の事例

- ・中学校からの情報収集
- ・スクールカウンセラーによる面談
- ・県の緊急カウンセラーによる面談 (保護者も)
 - ルールの明文化、周りへの告知、SCによる定期的なガス抜き等のアドバイス
- ・精神科受診
- ・特別支援委員会
- ・教育専門監 (高校支援隊) からのアドバイス

他校の対応の事例

<小坂高校>

- ・学習生活サポーターが配置。
- ・教育専門監や特別支援教育アドバイザーからのアドバイス。
- ・4月にSENチェックリスト (13名)。絞ってWISC-III (2名) の実施。
- ・ハローワーク、障害者就業・生活支援センター等の機関と就労支援で連携。
- ・特別支援学校と連携し、専門家を招いて職員の校内研修を実施。

他校の対応の事例

<和洋高校>

- ・保護者を含めて、早い段階でウェルビューいずみ障害者支援センターから、手帳の取得についてアドバイスをもらう。
- ・ハローワーク秋田で就職の相談や企業との橋渡しを行っている。
- ・スクールカウンセラーからWISC-IIIの実施。
- ・専門家を招いて、職員の校内研修を実施。

不登校 ひきこもり

- ・精神的なエネルギーの低下。対人恐怖や社会恐怖。
- ・主体的に選択する力や自ら動く力が備わっておらず、その力が必要となる思春期になると動きが取れなくなってひきこもる。
- ・ひきこもり事例の半数の背景に障害や疾病。
 - ①統合失調症、不安障害など
 - ②発達障害圏のもの
 - ③適応障害など

対応

☆心のエネルギーの回復。恐怖や不安の軽減。

- ☆心のエネルギーが低いとき
 - ・観察、寄り添い、信頼関係の構築。
 - ・子どもの方から動き始めるのを待つ。
- ☆心のエネルギーが高いとき
 - ・好きな活動を通し、対人関係を広げる。
 - ・役割を与える。
 - ・過ごし方の計画を本人に決めさせる。

☆先を急がず繰り返し支援を積み重ねる。
☆学校に安心できる場所があること。

依存症 リストカット

- ・切ったのは皮膚だけでなく、心の中の嫌なことを切り離している。身体の痛みで心の痛みをフラッシュする。
- ・自傷する子は、あらゆる自分を大切にしない問題を抱えている。
- ・親に内緒に！という子は親に問題がある。

対応

☆1番の問題は切ることでなく、相談する人がいないということ。援助関係が続くことが大事。
☆行動の背景にある困難に目を向ける。

場面緘黙

- ・家では普通に話せるが、学校などの社会的場面で話すことができない状態。
- ・不安になりやすい性質、発達障害、言葉の問題等複合的な要因がある。

対応

☆専門家に繋げる。
☆指示は具体的に。視覚的な手がかり。
☆目的は発話ではなく、楽しくコミュニケーションができたという経験を増やすこと、達成感や自信を得る体験を増やしていくこと。

虐待

- ・身体的虐待、ネグレクト、心理的虐待、性的虐待。
- ・背景にひとり親家庭と貧困。
- ・虐待を疑うための3つの「変」
 - 子どもが変
 - 保護者変
 - 状況が変

対応

☆速やかに警察又は市町村の児童福祉担当部署や児童相談所へ通告する。
☆専門家に繋げて心のケア。

全国の児童相談所における児童虐待相談対応の内容

2023年 88,931件

児童虐待防止法

2000年11月施行

○「虐待の事実が必ずしも明らかでなくとも、一般の人の目から見れば主観的に児童虐待があったと思うであろう場合であれば、通告義務が生じること」

○「こうした通告については、それが結果として誤りであったとしても、そのことによって刑事上、民事上の責任を問われることは基本的には想定されない」

3 QUIについて

学校生活における意欲や満足感、及び学級集団の状況を質問紙によって測定。(20分程度)

得られる情報

- ・生徒個々の学級生活における満足感や意欲。
- ・生徒の満足感や意欲の分布状況による学級集団の雰囲気や成熟状態。
- ・満足感や意欲に関する、生徒の学級内での相対的位置。

QUの活用

○全体的な結果については…

- ・活用法について専門家による研修
- ・「関係性」か「スキル」の低い方を高める

○要支援生徒については…

- ・SCと面談
- ・特別支援委員会で対応の検討
- ・全体で共有

早期にケア、チームアプローチで負担の負担を軽減！

P T A 研 修 会	研修項目	農場見学・イチゴジャム作り・大曲はなびピザ試食		
	期 日	平成27年11月14日（土）8:30～12:30		
	会 場	農場・食品加工室・介護実習室	参加者数	24名（保護者・職員）
	目 的	本校の施設・設備を見学し、日ごろ生徒たちが行っている活動を体験することにより本校の教育活動についての理解を深める。		
	日 程	～8:25 大嶋農場に集合 8:30～8:40 開会行事 8:40～9:40 農場を見学後、校舎に移動し、温室・果樹園・畑を見学 10:00～12:00 実習棟加工室にてジャム作りを体験 12:00～12:30 介護実習室にてジャムと大曲はなびピザを試食 片付け後、解散		



これは総務部の行事であるが、保護者と職員向けに研修部が企画したものであるため、ここに掲載した。

P T A 研修会と言えば、バスで県内の観光スポット巡りをするような内容をイメージするが、本校では生徒達が日々農業に関する素晴らしい取り組みを行っており、保護者がそれに直接触れる機会がほとんどないことから、今年度は生徒の取り組みを体験することを目的に計画した。

参加した保護者からは、子供達の取り組みを目の当たりにすることができて良かったと好評をいただいた。以下に、全参加者の感想を掲載する。

（原文のまま。丸数字は子どもの学年。）

- ①今回出来なかったはなびピザ、来年は挑戦してみたいと思います。農場見学とても楽しかったです。子供の頑張り、良くわかりました。
- ①実習場所が見学できて良かったと思います。ジャム作りが体験できるのは、今回初めてで楽しかったです。子供と一緒に野菜の収穫をしたりしてみたいです。また楽しい企画をよろしくお願いします。
- ①日頃体験出来ないような貴重な時間を過ごすことができました。そして、普段どのような勉強をさせて頂いているかということもわかり、今日参加して良かったと思います。ありがとうございました。
- ①今までの研修会（小・中）は“どこかに視察”という研修がほとんどだったため、なかなか参加するには至りませんでした。今回はとても楽しめた企画だったと思います。来年もまた同様+αの企画を楽しみにしております。（新校舎での実習、できたらいいなあ！と思います。）
- ①普段実習している場所を見学できてとても良かったです。生きものの棟も清潔で（建物は古いようですが）、思ったよりも臭いもなく、先生達の指導の賜という感じがしました。次回はもう少し早い季節、野菜や果物が実っている時期に見学をしてみたいです。

①お天気がまいちでしたが、普段見ることが出来ない農場やハウスの中を見れて楽しかったです。はなびピザを作ってみたかったのは残念ですが、とてもおいしかったです。果樹のもぎ取り体験もいいかと思いますが、参加者多数になるでしょうね。大変お世話になりました。

①今日は子供たちの実習を体験できて楽しかったです。ジャム作りでは、収穫から加工、殺菌など手際よく指導してくれる子供たちが頼もしかったです。手作りジャムは温かく、とてもおいしかったです。

①大嶋農場は子供達が難儀して動物を育てているのだなと感心しました。管理してくださっている方々がいてこそなのだとも思いました。学校の農園も大変すばらしくて、お花を見ているだけで幸せになりました。ジャム作りもとても勉強になりました。子供から少しずつは聞いていた学校生活でしたが、自分の目で見て、また内容がよくわかり、とてもよい活動でした。ありがとうございました。

①子供達が学んでいる所を見学出来て良かったです。大農の「販売」がどの様にしているかを知りました。まだ知らない事が沢山あると思うので、親も経験出来たらうれしいです。お土産を色々頂きありがとうございました。初めて、にわとり・ぶた・牛を近くで拝見しました。子供の話だけでは分からない事も見て体験する事が出来ました。

②子供達が普段頑張っている事を体験できて、楽しい時間を過ごす事ができました。自宅に戻り、早速ジャムを作りたいと思います。貴重なお時間を作ってください、ありがとうございました。

②とっても楽しかったです。広い農場や実習棟など見学でき、これを管理・維持し、子供たちに教育することの大切さを感じました。また、おいしいジャム作り・試食までさせていただき、大満足です。来年もまた参加したいと思います。

②なかなか見られない農場の家畜には感動しました。ジャム、ピザとてもおいしかったです。今日はどうもありがとうございました。

②企画された先生方、ご苦労様でした。とても楽しかったです。この企画に参加したことで、息子が日頃どんな勉強をしているのか・・・ということを実感できました。ジャム作り、農場内の見学・・・こういう時でないかと思い参加してみたけど、大変良かったしおもしろかったです。また参加してみたいです。

②おいしいジャムにはなびピザ、おなかいっぱいで大満足でした。やっぱり子供達が日頃がんばっている場所を見られる研修が一番！！ありがとうございました。

②（生徒の妹）たのしかったです。

②（生徒の弟）もっといろいろなジャムを作ってほしいです。ピザもおいしかったです。^o^

③今日は楽しい時間を過ごさせていただきましてありがとうございました。子供の通っている校内の様子を知る事が出来、良かったです。次年度も引き続き、このような体験が出来ればと思います。今回できなかったピザ、期待しております。ありがとうございました。

③今日は農場や施設の見学ができたうえに、はなびピザとジャムの試食まであり、とても楽しい研修でした。ごちそうさまでした。以前から広い大農の敷地内にどんな施設があるのか興味があり、見学会などがあったらいいのに、と思っていたので、今回の研修は願いがかなった感じです。農場日より等で拝見していた、大嶋農場も大変興味深く有意義な時間となりました。ありがとうございます。

3 経験年次別研修

- (1) 初任者研修
- (2) 10年経験者研修
- (3) 5年経験者研修

高等学校初任者研修を終えるにあたって

家庭科 風登 友美

I はじめに

4月1日、辞令交付式において、新規採用者として氏名点呼を受け、改めて秋田県教育公務員として採用されたのだという実感が湧き上がった。それとともに、この職業の責任を感じ、身の引き締まる思いがした。そして、この先始まる初任者研修では主体的に励み、そこで得たものをこれからの教員生活に役立てていきたい。そして自らを高めていくことを怠らず日々の仕事を大事にしたいと心に誓った。

この1年で得たものは、教員としての土台になるものであり、よりよい教育活動を行っていくために今後活用していきたいと思っている。以下、1年間の研修について報告する。

II 校内研修

校内研修では、校務分掌に関する研修、また教科指導に関する研修などを通して様々な内容について、伊東校長先生をはじめ多くの先生方に丁寧にご指導いただいた。

A 一般研修

学校管理、総務部、教務部、生徒指導部、特別活動部、キャリア教育部、保健部、図書部、教育情報部、研修部、学年部

B 教科研修

担当教科の年間目標と年間指導計画、授業参観と研究協議、考査問題の作成と検討、学習指導案の作成、研究授業と研究協議、授業評価と授業改善、1学期の評価と2学期指導計画の検討、教材の精選と活用、コンピュータを活用した授業の工夫、導入の工夫と授業構成、生徒の活動と学習形態の工夫、視聴覚機器と視聴覚教材の活用、個に応じた学習指導の工夫と課題、2学期の評価と3学期指導計画の検討、生徒理解と学習指導の工夫、年間の教科研修の成果と課題

III 校外研修

研修名	研 修 内 容
授業研修A	他教科模擬授業参観、教科別模擬授業と研究協議
授業研修B	全国高等学校定時制通信制生徒生活体験発表会秋田県大会への参加、定時制課程の授業参観 於：秋田明德館高等学校
授業研修C	他校での授業実践と研究協議（題材 親として共に育つ） 於：五城目高等学校
特別支援学校訪問	特別支援学校での授業参観と授業参加 於：大曲養護学校
PA研修	PA（プロジェクトアドベンチャー）の理論と体験、アイスブレイク・イニシアティブ・フルバリューコントラクト・体験学習サイクル等の実践 於：岩城少年自然の家
講座I	教育公務員の服務、授業づくりの基本、情報活用能力の育成、学校組織の一員としてI－社会人の基礎－

講座Ⅱ	教科指導の現状と課題、学習指導要領の要点、教科指導計画の作成
講座Ⅲ	教科における基本的な指導技術と授業展開、教科における評価の内容と方法、キャリア教育の推進
講座Ⅳ	安全教育と応急手当、教育相談と保護者との連携、問題行動の理解と人間関係づくり
講座Ⅴ	中学校との関連を踏まえた授業づくり（授業実践・協議）
講座Ⅵ	授業展開の方法と実際Ⅰ（講義・協議・演習）
講座Ⅶ	家庭科・理科（物理）授業参観、教科の全体の視点に基づく協議 於：秋田高等学校
講座Ⅷ	a 特別な支援を要する児童生徒の理解と支援Ⅰ 於：天王みどり学園 特別な支援を要する児童生徒の理解と支援Ⅱ 授業展開の方法と実際Ⅱ b 教員とメンタルヘルス、「生きる力」を育む総合的な学習の時間、豊かな自己形成に資する道徳教育の在り方、教育活動全体で取り組む情報教育
講座Ⅸ	いじめや不登校の理解と対応、特別活動の理解とホームルーム経営、学校組織の一員としてⅡ－目標管理Ⅰ、初任者研修を終えるに当たって

Ⅳ 終わりに

秋田県総合教育センターでの初任者研修開講式において、教育センター所長より、初任者として今後目指すべき教師像について話していただいたことを、最近ふと思い出した。「教師としての原点を持つこと、教育の目的は人格の完成でありそのために教師ができることは生き方としての something を残すことであり、物事をなすには何事も徹底して行うことが大切」だと教わった。そして、子ども一人ひとりの学習状況、課題を把握し、指導法を工夫していくことが重要だとし、学び続ける教師像の確立が求められていると話されていた。今まで出会った生徒たち、そしてこれから出会う生徒たちに、自分は何を伝えていけるだろうと考えたときに、その時はまだ明確な答えが出せなかった。今でも正直、答えは見つかってはいない。しかし、自分自身が初任者研修を通して今年一年で大きく成長できたことによって、人は学び続けることができる、生涯にわたり学習することができ、成長し続けることができるのだということを示していくことができるのではないかと感じている。

初任者研修を終えるに当たり、伊東金一校長先生を始め、たくさんの先生方からお話をいただくことができた。研修を通して、生徒にはどのような力をつけさせたいのか、この生徒はどういう課題や得意なことがあるのかなど、具体性を持って生徒と関わるようになった。また、たくさんの授業実践を通して、さまざまな指導方法を学び、改善のための助言をいただくことによって、授業のスキルが大きく上がったように思う。これまでの研修で、浅沼指導主事や所属校の先生方のご指導、助言のもとに成長できたことを大変有り難く、また嬉しく思う。これからも校内外の研修で学んだことを活かしつつ、自らの課題を見つけ、教員としての力量を上げていくことができるよう、創意工夫を図っていきたい。

最後に、この1年間の初任者研修でご指導いただいたすべての先生方に感謝申し上げたい。ありがとうございました。今後も生徒に対していつも真摯に向き合い、必要なときには手を差し伸べ方向を示していける教師になれるよう尽力していきたい。

高等学校初任者研修を終えるにあたって

実習助手 佐藤 潤之介

I はじめに

今年度新規採用者として本校に赴任し、この1年教育公務員としての責任や担当部門での専門技術の習得、向上を目指してきた。初任者研修や、日々の業務の中で様々なことを学び、吸収することができている。今年度学んだことは、実習助手の立場からよりよい教育活動を行っていくための土台にしていきたいと思っている。1年間の研修について報告する。

II 校内研修

校内研修では、校務分掌に関する研修を通して様々な内容について、伊東校長先生をはじめ多くの先生方に丁寧にご指導いただいた。

A 一般研修

学校管理、総務部、教務部、生徒指導部、特別活動部、キャリア教育部、保健部、図書部、教育情報部、研修部、学年部

III 校外研修

研修名	研 修 内 容
講座 I	教育公務員の服務、授業づくりの基本、情報活用能力の育成、学校組織の一員として I ー社会人の基礎ー
講座IV	安全教育と応急手当、教育相談と保護者との連携、問題行動の理解と人間関係づくり

IV 終わりに

この1年の研修を通じて教育公務員の在り方、学校業務、生徒指導等様々な分野において学び、考えさせられる機会を与えていただいた。研修で校長先生より「生徒は先生を選べない」という言葉が強く心に残っている。これから多くの生徒との関わりをもっていく中で、経験不足な面や未熟な面が出てしまう事が多数あると思うが、この1年研修で学んだ事を新たに出てくる課題克服の為のステップとし、実習助手という立場から視野を広く持ち、「プロフェッショナル」「人間的な魅力」といった教育者として大事な力を育んでいけるよう努力しながら、生徒と接していけたらと思う。

最後に、伊東金一校長先生をはじめ、1年間初任者研修でご指導いただいた先生方へ感謝申し上げます。ありがとうございました。

所 属 校	大曲農業高等学校	職・氏名	教 諭 大 坂 淳
研 究 テ ー マ	発光性きのこ「ヤコウタケ」の栽培にチャレンジ		

はじめに

今年度、10年経験者研修としてさまざまな研修や研究授業を行ってきた。その研修の一つ一つが、学校の組織力を高めるためのミドルリーダーの育成を念頭においた内容であり、教員の力量と人間性の向上を図るには有意義な研修となったことは間違いない。

特に印象的だったのが、選択研修でお世話になった3日間の林業研修センターでの研修であった。私自身、生物工学科に所属していることもあり、培養の基礎基本の見直しが出来ただけでなく、今後の授業で活かせるような内容を学ぶことができた。また、施設見学なども行うこともでき、今後の研究の協力体制も築けたように思う。

この研修を機に、学校のミドルリーダーとしての在り方を深く考え、また、教師としての資質を高める努力をしていきたいと考えている。

研修のまとめにあたり、10年経験者研修の総括として、自身が行った実験の内容を記載することとした。

1 研究の概要

選択研修において、キノコ栽培の基礎（菌床栽培と種菌培地での栽培）について学ぶ機会があった。そのなかで、ヤコウタケ栽培実験に興味を示した。インターネット等でヤコウタケの栽培について調べてみると、通常、種菌の上に腐葉土を少量のせる、というのが一般的な栽培方法のようである。しかし、今回の実験はピートモスを主とした培地に種菌を乗せて栽培するという変わった方法で行うものであった。

今回指導していただいた菅原上席研究員の話によると、このような栽培方法で行うのは大変珍しいことで、子実体（キノコ）が発生するかどうか、やってみないと分からない、ということだった。ヤコウタケは緑色に発光する不思議なキノコである。この実験に成功すれば、生徒にとっても興味関心の持てる教材として利用できると考え、早速、下記の要領で実験を試みた。

①培地の作製（ピートモス3に対して米ぬか1の割合で攪拌）

②含水率65%程度になるよう水道水を加え、攪拌。

③攪拌後、調整済み培地を200ml容マヨネーズビン（培養ビン）に50g程度詰め、培地上部を平らにし、軽く押し固める。

④フィルター付きキャップを軽く締め、オートクレーブで121℃で30分間、滅菌。

⑤培地を冷却した後、種菌を接種する。

⑥25℃前後で30日間培養。

⑦25℃前後で、蛍光灯あるいは間接光があたる条件下できのこの発生を確認する。

2 成果と課題

上記の要領で実験を進めた。種菌を接種後、本校にある培養槽にて培養することとした。（培養槽の温度は20℃、光の強さ2,000ルクス）

培養から30日後、ヤコウタケ発生（子実体の発生）を確認することはできなかった。しかし、培地内が白くなっていることを確認した。これは、培地内に菌が広がっている証拠である。実験は順調に進

んでいると考え、さらに培養日数を延ばして観察することとしたが、40日以上経ってもキノコの発生は確認できなかった。その原因を考えたが、25℃以上の温度を必要とするキノコに対し、培養槽の温度は20℃と5℃低かったこと、また、雑菌が入ることを恐れ、水（霧吹き）を与えることをしなかった。そのため、培地が乾燥し、キノコの水分不足と培養ビン内・培地の湿度が保たれなかったため、菌の成長が妨げられたのではないかと推測した。

この推測を踏まえ、再度チャレンジしたものの、どうしてもヤコウタケの発生（子実体）は確認できなかった。2度の失敗から再度、実験の操作手順を振り返ってみたが、菅原上席研究員に教えていただいたとおりに行っているし、培地にもコンタミは発生していない。また、ヤコウタケの栽培とは別に、平行してシメジの栽培実験を行っているが、栽培品目や培地成分が違うとはいえ、実験操作的にはほぼ同じであり、その実験結果から子実体の発生を確認できている。また、ヤコウタケの菌糸が培地全体に広がっていることから、実験の操作手順自体に間違いはないと考えてよい。このことから、今回の実験失敗の原因は、栽培方法ではないかと推測した。そして、1回目の実験の反省と2回目の実験から、栽培方法を振り返ったとき、「光の強さ」と「温度」に問題があったのではないかと考えている。そのなかでも、一番は「光」ではないかと思っている。その理由は次のとおりである。なかった。2度の失敗から再度、実験の操作手順を振り返ってみたが、菅原上席研究員に教えていただいたとおりに行っているし、培地にもコンタミは発生していない。また、ヤコウタケの栽培とは別に、平行してシメジの栽培実験を行っているが、栽培品目や培地成分が違うとはいえ、実験操作的にはほぼ同じであり、その実験結果から子実体の発生を確認できている。また、ヤコウタケの菌糸が培地全体に広がっていることから、実験の操作手順自体に間違いはないと考えてよい。このことから、今回の実験失敗の原因は、栽培方法ではないかと推測した。そして、1回目の実験の反省と2回目の実験から、栽培方法を振り返ったとき、「光の強さ」と「温度」に問題があったのではないかと考えている。そのなかでも、一番は「光」ではないかと思っている。その理由は次のとおりである。

ヤコウタケの栽培と平行してシメジの栽培を行っていたが、この2つの栽培過程を比較した時、決定的に違うところがある。それは、シメジを培養するときに培養ビンを新聞紙で覆ったということである。

選択研修で林業研修センターに行った際、培養室を見学する機会があった。その培養室は暗く、光を与えていなかった。また、横手市のキノコ栽培をしている農家を訪問した際も、培養室は光がない状態であった。両者ともに培養室に人が入る時に初めて電気を点けるような感じだった。その時栽培していたキノコはシイタケやナメコ、シメジといったものであったため、私自身が実験を行う際もそのことを思い出し、培養ビンを新聞紙で覆って培養した。シメジは培養から約35日目に子実体らしいものを確認できていた。

これに対し、ヤコウタケの培養の際は新聞紙で覆うこともなく、培養槽の光を直接浴びせていた。正直、少し光の強さが気になってはいたが、今回教えていただいた実験操作手順には光が必要だと記されていたため、そのとおりに行った。これを新聞紙を覆って栽培すればどうなるのか、再度実験してみたいと考えている。

以上が、今回の実験でヤコウタケの子実体を発生することができなかった要因を「光の強さ」と結論付けた理由である。しかし、引っかかることもある。それは、実験操作手順どおりに行って培地内に菌糸が広がっていたことである。菌糸が広がっていたのに、何故、子実体が発生しなかったのか？今回の推測どおり「光の強さ」なのか、または、別の要因があるのか？現在のところ、見当がつかない。

3回目の実験を行うことができなかったが、来年度、授業で取り上げ、引き続き生徒と一緒に考えていきたいと考えている。

「教職10年経験者研修を終えて」

教諭 加藤雅隆

はじめに

教職10年経験者研修で初任者研修以来これまでの教職生活の課題や弱点とも言うべきポイントを明確にし、これからの教職としてのあり方を考えることのできた有意義な時間であった。その意味でミドルリーダーとしての自覚と実践力を培うために行われた研修であったと強く感じるとともに改めて教育者としての使命感に基づく様々な資質の向上に努めなければならないことに気づくことができた。その気づきについて以下の項目で述べたい。

1 教育センターにおける講座

教育センターで行われた各種の講座では主に教育環境の変化についての分析や見通し、先進的な教育理論の講義、学校組織の一員としての自己分析やキャリア形成などについて研修をすることができた。その中で特に印象的であった内容を三つあげたい。

一つ目は「質の高い授業研究を継続的に進めていくための方略」の講座で「言語活動」や「アクティブ・ラーニング」という考えを中心に大きく見直されつつある「学力」について理解を深めることができたことである。これから求められるであろう「探求型授業」「課題解決型授業」についても教科や校種などの枠組みを越えて「専門職」として高め合うことが必要である。その為にも授業における「本時の目標」や「主たる発問（ゆさぶり）」「振り返り」などが「教えるプロ」として成されているか常に戒めをもって臨み続けたい。

二つ目は「授業づくりと授業研究の実際」「これからの高等学校に求められる教科指導の在り方」の講座において同教科の方々と教科指導上の課題や悩みを共有することができたことである。授業について様々な方法論が提案される中で「分かる授業」を展開するために取り組んでいることや生徒の主体性を引き出すための工夫などが議論され、これまで漠然と向かい合っていたものに対しどのように取り組むかについて方向性が見えたのでさらに研鑽を積みたい。

三つ目は「生徒理解と人間関係づくり」や「教師が使えるカウンセリングの技法」の講座においてSNSの発達に伴う複雑化した社会の中で生徒や保護者、教員同士の人間関係をどのように構築し、問題解決を図るかについて新たな視点を得ることができたことである。一般に問題の原因を明確にしようとするあまり一つのことに答えを求めたがる傾向があるが「円環的思考」をキーワードに複合的な視点で問題やその関係性を捉え、組織的に対応することが必要であることを理解することができたので学年部や関係分掌、学校組織の中で有効に実践したい。

2 授業研修（秋田南高校での授業実践、授業参観、協議）

所属校以外での授業実践は5年研以来であり、会場校の生徒の実態も普段の環境とは異なるため、緊張と不安が大きかった。しかし授業指導案の作成や授業の構成などに際し、高校教育課指導班、林指導主事や同校地歴公民科の教員より多くのご助言を頂き、授業の方向性を明確にすることができた。そのことで「本時の目標」の設定と「主発問（ゆさぶり）」「展開とまとめ」をスムーズに行うことができ、概ね満足のいく授業を行うことができた。また授業において「自分が最も教えたいこと」を学習指導案の中に「見える化」することもできたため、生徒に主体的に考えさせるための「仕掛け」と言語活動を実施することができ、講義型の授業に留まらない探求型の授業を行うことができた。

さらに10年研（教育センター講座）において以前、教科指導上の課題や悩みを共有することができた方々の授業を互いに参観した後、協議し反省点や感想も共有することができた。「分かる授業」のための工夫、生徒の主体性を引き出す仕掛け、指導と評価の一体化をどのように実現するか、などこれからも授業改善に積極的に取り組みたい。

3 選択研修

①企業研修（株式会社安藤醸造でのインターンシップ）

新規開業店舗のオープンスタッフとしてイベントの手伝いをさせていただき、普段は目にすることのできない角度からものごとを体感し「つながり」というテーマで社会的な視野を広げることができた。一つ目が「人とのつながり」である。お客様や社員間、取引先や近隣の方々など様々な関係性が社会の基本であることを実感した。二つ目は「時間的なつながり」である。伝統に裏付けされた技術やその味を時代の変化に対応させながら進化発展を続ける企業魂を目の当たりにし、教育における「流行と不易」を改めて意識した。三つ目は「地元社会とのつながり」である。「蔵」に象徴される地元とのつながりについて店舗や企業説明をしていただいた取締役の安藤雅子様の言葉の端々から地元への誇りや愛情を感じることができた。私自身も秋田の地に生きるものとしてそのことを忘れず学校教育の場で表現していきたい。

②センター研修C講座（「分かる」授業と指導の「見える化」）

「分かることの基本」について「情報処理」という視点で分析し「処理」をするために必要な「情報」＝「素材」をどのように「分かりやすい状態」にするのかに注目することができた。「分かる」とは「分ける」ということと密接に関係しており、実際には「把握」「納得」「再現」の「分かるの3ステップ」が存在している。そのことを踏まえて授業を行う際に「発問」が「分かりやすい状態」になっているかについて検証し授業改善につなげたい。

また「見える化」は「可視化」と「イメージ化」という二つの視点で捉えることが重要であることを理解した。「見える」とは「視覚」だけでなく「認識」や「理解」であるため、授業の「見える化」という場合には、単に表面上の「可視化」というだけでなく教材研究の段階で自分自身の思考が「イメージ化」されている必要があると強く感じた。さらに「学習指導案の見える化」においても「生徒につけたい力」や「目標達成までの過程」「授業における全体と一部の関係性」など「可視化」と「イメージ化」の特徴を踏まえて取り入れることが重要である。しかし「見える化」や「図解化」はそれを行うこと事態は目的ではない。問題点やポイントを整理し相手にとっても「分かりやすい状態」にすることでコミュニケーションを円滑に行うための有効な手段の一つであることを忘れず授業だけでなく様々な場面で適切に活用したい。

おわりに

教職10年経験者研修を通じて意識が高まったことの 하나가「学校組織の一員における自己の位置づけ」である。「教科指導」「生徒指導」「ホームルーム指導」「キャリア教育」それぞれについて個人の視点だけでなく学校組織という俯瞰位置を高めた視点で捉え、自己の得意分野をつくり出すように取り組まなければならないと考えている。

しかし一朝一夕に完成することはなく継続的に研修を重ね、日頃から学校全体で意図的、計画的に戦略性をもって展開されるべきことであると忘れてはならない。その上で教育者として営々たる教育の営みの中で人任せにすることなく主体的に教員としての資質の向上に努めたい。

最後に教職10年経験者研修に際しご指導頂いた方々に心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

教職10年目経験者研修を振り返って

教 諭 高階市太郎

1. はじめに

10年研という節目に新しい学校で教壇に立つことになり、改めて生徒との関わり方であったり、商業教員としての役割を考えさせられた1年となった。当初は研究と修養を通じ、自分自身の力を伸ばすことが目標の達成であると考えていたが、4月13日の連絡協議会では、周囲の教員への指導助言ができること、そして学校運営や諸計画の策定に積極的に関わる立場であることを意識づけられた。

2. 総合教育センター研修

I期に講堂で行われた「質の高い授業研究を継続的に進めていくための方略」では、主に教科指導について考えさせられた。学力に対する見方の切り替えがすでに始まっており、授業で求められる知識や技能というものも変化し続けている。現在、言語活動を充実させる授業やアクティブラーニングが多くの場面で活用されているが、目的なしにその方法だけを活用しても効果は生まれない。教師側がまずどのような方向に生徒を育てていきたいという戦略が存在し、その戦略の基で展開されることが求められるという言葉が印象的であった。時には生徒の意見が異なることもあるが、戦略がしっかりとしていれば問題はなく、生徒たちが主体的に活動をするには返ってよい効果が生まれると考えられる。この研修を通じて生徒の関心意欲を引き出し、どのような意見に対しても臨機応変に対応できる能力を養う必要があると感じた。

今年特に感じたのは生徒との信頼関係ということである。伝える内容および伝え方について深く考えるようになった。III期に行われた小林先生の「教師が使えるカウンセリング」では円環的思考に立ち、問題が起こる原因が1つと決めつけるのではなく、あれこれと原因や仮説を複数考えてみるのが重要であると気づかされた。生徒の話の中でも察することはよくしていたが、動いて、いろいろと想像しながら解決に向けて動くことこそが問題点を見つけるきっかけになることを知ることができた。クラスの生徒でもなかなか自分自身の気持ちをうまく表現することができない生徒も増えていると感じるので、話を聞くときには事実確認を急ぐ中にも傾聴の姿勢を忘れずに、どのように話をしてくれたのかという部分にも留意していきたい。

さらに、IV期に行われた「教育公務員の服務」では10年研のまとめとして教員としての自覚と覚悟について講話していただいたのが強く印象に残っている。私たちが普段行っている活動1つ1つはきちんと法規で定められていることを秋田県教育関係職員必携で改めて理解し、先生という仕事は法律があるから守るというものではなく、自分を先生と思ってくれる多くの生徒や保護者のためにも立場を考え、その人たちのために尽くすことが必要だと再認識できた。

3. 教科研修

・期日及び会場	平成27年9月8日(火)	秋田市立秋田商業高等学校
・指導科目及び学年	ビジネス基礎「ものの生産者」	1年C組35名

秋田県の商業教育は資格取得と販売実習が主とした活動と捉える傾向にあり、商業の目的や意味が薄れてきているように感じている。この単元で生産者の仕事の概要や社会での役割について理解させ、その役割を果たすために商業ができることは何かを考察し合う授業にしたいと思った。授業は大きく2点にポイントを絞り、まず1つ目として県内の製造業者の企業理念やスローガンを見て、企業の社会的責任を理解すること、2つ目はその製造業者の役割を果たすためには商業を学ぶ生徒としてどのようなサポートができるのかを考えさせた。ビジネス基礎は、ビジネスの諸活動に適切に対応する能

力を育てることを目標としており、商業の学習ガイダンスとしての役割もある。今回の授業は、生徒の主体的な活動を盛り込むことができ、高校生活の中で身に着けるべき知識や技術は何かという目標を考えさせることができた。野呂田指導主事からは、1時間の授業が終わった後に生徒がどのような姿になってほしいかというイメージを持って、授業を構成してほしいという指導・助言があった。

ここ10年間で商業の環境は大きく変化し、単独商業高校も秋田商業1校のみとなり、全国的に商業科目の履修者は大きく減少をしている。その中で、商業科教員としてできることは何かを全員で考え、それぞれが使命感をもって今後の商業教育を担っていかなければならないことを痛感した。

4. 選択研修

(1) 企業研修

・期日及び会場	平成27年7月18日(土)～19日(日) 株式会社安藤醸造		
・作業日程	18日	8:00～ 13:00	流しそうめん、13:00～ 17:00 商品の包装
	19日	8:00～ 15:30	流しそうめん、15:30～ 17:00 店舗見学

安藤醸造本店横の「麴くらぶ」の新規オープンのスタッフとして18日、19日の計2日間研修を行った。「麴くらぶ」とは甘酒や寒こうじなど麴関連商品をより多角的に販売するお店である。今回はオープン記念として、流しそうめんや焼き鳥などのイベントを企画し、私たちは主に流しそうめん商品の補充や包装を担当することとなった。この研修を通じて、企業目標を達成するためにさまざまな年齢層の方々が、互いに声をかけあい、表情にもどこか余裕を持って対応・処理している姿が印象的だった。教員の仕事も周りを頼り、チームで対応することの大切さに気づかされることとなった。また、ホスピタリティというおもてなしの精神を温かく感じられた研修でもあった。私たちの研修を担当された蒲生さんは、自らの仕事や責任もある中で、私たちの仕事内容や対応にも常に気配りをしていた。蒲生さんの視野の広さや人間としての懐の大きさを実感させられた2週間であった。教員という仕事もちょっとした不愛想な対応で信頼を失ってしまうこともあるため、今回のホスピタリティという精神を忘れずに対応を心がけていきたいと思う。

(2) 選択研修C

10月1日に総合教育センターにおいて、C講座の「分かる」授業と指導の「見える化」を受講した。午前は総合教育センター支援班主任指導主事の跡部耕一先生から、『授業の「見える化」』というテーマで講義していただき、午後は株式会社朝6時代表取締役 図解化コンサルタントの池田千恵氏から『伝わる図解とプレゼンテーション』という題材で講義していただき演習を行った。

授業を「見える」ようにするためには、「視覚化」というキーワードは欠かせないものである。目、耳、その他の感覚情報から「見える」ことにつながっていくが、ただ視覚情報を提示すればよいというわけではない。流れの中で提示していくことや、妨害情報と考えられてしまう障害を少しでも減らすなど工夫が求められる。「見える」ということは、相手に「像」としてイメージさせ、認識させることが重要である。簡単なことではないが、生徒たちに対してまず何を認識させたいのかということを確認し、そのためにどのような方法があるかを模索し続けることが、教師の力量を高めることにつながると感じた。

5. まとめ

一つ一つの研修がとても有意義なものとなり、協議・演習を通じて考えを深めることができた。10年経験者研修は法定研修であったが、これからは自分から積極的に知識を吸収しようとする姿勢を常に持ち、研鑽と修養に努めていく必要がある。本校に赴任して、多くの先生方の教養の高さと温かさの中で過ごすことができた1年間であった。ミドルリーダーとしての自覚を持ち、多くの先生方との交流を通じて、自分にはない知識や経験を吸収し、生徒に還元していきたいと考えている。

私が高校教員として採用され、5年が経過した。研究畑とは違った環境での、試行錯誤、自問自答の日々が6年目となり、これまでの経験を踏まえての5年経験者研修である。この研修を受けて感じたことをまとめる。

5年研修は2部構成であり、1部は生徒とのかかわりである「不登校・いじめ・問題行動の理解と対応」、2部は「授業研修」である。これまでの担任や生徒指導を見ると、生徒の起こす1部で研修を受けた諸問題は少なからず直面し、その解決を図ってきた。私の経歴にかかわらず、生徒もまたその成長、学習の過程において多くの問題に直面して解決を図らなければならない。しかし、生徒の視野は狭く、また生徒の生活している環境も狭いため、彼らに沿って彼らの考えを聞いて間違ったところを正す人材が少ない。そのほとんどが彼らの生活の大部分を占める学校の大人、つまり教員なのである。しかし教員の業務内容や高校生という生徒の意識からすると、大人は生徒の問題解決のポイントでアドバイスを上げるだけでよいのであるが、そのポイントを見逃さないようにしなければならない。私がこれまで他の先生方にしていただいたように、授業や部活動の中から得られる情報を他の先生や保護者と共有することで、このポイントを見つけることになる。したがって普段から生徒をよく観察していなければならない。生徒との何気ない会話が非常に大切であると改めて感じている。

家庭環境や学校環境などの環境に合わせながら、自分の立ち位置を確立していかなければならない成長している時期の生徒の心境は常に穏やかで安定しているものではなく、不安定な状態にあるため、残念ながら、「不登校・いじめ・問題行動」はなくなることはないと思う。しかし、これらの問題を平和的に解決するための方法として、生徒を理解することが非常に重要である。

2部の「授業研修」では、同じ農業だけでなく、他の科目の先生の授業も参観し、意見交換を行った。私は出前授業もあり、その度毎に違った内容にチャレンジしている。出前授業は、受ける児童、生徒が毎回違う上展開も異なるため、毎回とても勉強になる。それらを本校の授業でも活かしている。研究活動と同様、目的をもって授業に臨む姿勢が大切であり、その積み重ねとして授業テクニックが実につくと考えている。アクティブラーニングの授業活用は多くの場所や成書で記載されているが、教員にも不可欠と考えており、今後も授業展開やその内容について、チャレンジしながらテクニックを身に付けていきたいと考えている。今後も他の先生方に学びつつ、自分のスタイルを探して確立したいと考えている。

4 校外研修

- (1) 学校運営等研究協議会
- (2) 第54回東北地区高等学校農業教育研究大会
第13回全国高等学校農場協会東北支部大会

第45回学校運営等研究協議会

農場経営部 佐々木 惇

開催期日 平成27年7月23日(木)・24日(金)
会場 国立オリンピック記念青少年総合センター
日程

7月23日(木)

10:00～10:15 開講式

主催者挨拶 全国農業高等学校長協会理事長 徳田 安伸

来賓挨拶 文部科学省初等中等教育局 産業教育調査官 尾白 泰次

東京都教育庁指導部 主任指導主事 佐藤 聖一

10:15～10:45 指導講話

文部科学省初等中等教育局 産業教育振興室 教科調査官

国立教育政策研究所 教育課程調査官 田畑 淳一

専門高校の現状と課題

文部科学省初等中等教育局 産業教育調査官 尾白 泰次

11:00～11:55 グループ協議①

13:00～14:40 講演1

講演テーマ「命を整える」

上智大学 神学部 教授 竹内 修一

講演2

講演テーマ「農業高校を通じた地域振興の具体的取組」

前青森県立五所川原農林高等学校長

(株)アグリコミュニケーションズ津軽(AC津軽)

代表取締役社長 佐藤 晋也

14:40～16:55 グループ協議②

17:30～19:30 教育懇談会

7月24日(金)

9:00～10:00 グループ協議(まとめ)

10:00～11:40 全体会(グループ協議発表)

11:40～11:55 指導講評

全国農業高等学校長協会 副理事長 齋藤 俊彰

11:55～12:00 閉講式

【指導講話】要旨

文部科学省初等中等教育局 産業教育振興室 教科調査官

国立教育政策研究所 教育課程調査官 田畑 淳一

私自身、平成17年度学校運営等研究協議会で事例発表を行いました。

今、教育現場で話題に取り上げられているアクティブラーニングは、これまでの農業教育で実践されてきた「課題研究」をさらに推し進めるものである。

われわれ農業教員は、①生徒のため ②地域のため ③農業教育のために行動しなければいけない。

岩崎夏海著「もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら」の中に出てくるドラッカーとは、マネジメントの父と言われるP. F. ドラッカーで、『マネジメント』とは彼の著書です。ドラッカーはの中で、マネジメントとは、①目標設定 ②組織作り・仕事の割当 ③動機付けとコミュニケーション ④評価測定 ⑤人材育成 であると。

これを受けて、われわれ農業教員は、これからの農業教育のマネジメントをしていかなければならない。

「今の子供たちはの65%は、大学卒業後、今は存在しない職業につく」といわれている。そのために必要なものは、①自ら主体的に解決する能力 ②クリエイティブな能力・想像力・企画力 ③人間的な感性・優しさ・いたわり・思いやりの心であり、国民目線で見、目の前の事態にどう対処するかという心を忘れてはならない。

日本の農業教育、農業科教育、農業高校は、これから何を指すのかを明確にし、今後の農業教育に立ち向かって欲しい。

【専門高校の現状と課題】要旨

文部科学省初等中等教育局 産業教育調査官 尾白 泰次

1 産業教育の振興

- ・初等中等局における教育課程の基準等について
- ・まち・ひと・しごと創生総合戦略について
- ・教育再生実行会議第六次提言
- ・農林水産業を学ぶ高校生の就農・就業に向けた人材育成について

2 平成27年度関係予算等

- ・スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール（SPH）
- ・全国産業教育フェア開催状況等
- ・平成27年度 トビタテ！留学JAPAN【高校生コース】選考結果
- ・専門高校パンフレットについて

「自然こそ 我が師なり・・・農場が教室です」



私たちの食料は、植物や動物の命です。その食料生産は、土や水や森など自然環境と共生する形で私たちの地域を築いています。そんな食料生産や地域環境などについて学ぶのが農業学習です。農業学習は、実践や実習を自ら体験し“汗を流して学ぶ”もので、“農場が教室”です。自らの興味・関心や将来の夢にあった学科を選び、3年間で基礎的な知識と技術、地域課題に自ら取り組める力を身につけます。そして、地域活動等を通して多くの人と出会い、地域社会を支える人として生きる道をみいだすことができます。

農業学習は、4分野に分けられます。

- ①植物の栽培、動物の飼育、食品加工などの農業技術と経営、食品に関する学習
- ②森林、土木、造園などの地域環境に関する学習
- ③動物、植物の生物工学に関する学習
- ④フラワーアレンジ、生物活用などのヒューマンサービスに関する学習



【講演1】要旨

講演テーマ「命を整える」

上智大学 神学部 教授 竹内 修一

講演に先立ち、辰巳芳子（料理研究家）から農業教員へのエールを頂く。

病苦に苦しむ父への介護食「いのちのスープ」に代表される家庭料理の大切さを雑誌、著作、テレビなどで伝えている。近年は安全で良質な食材を次世代に残したいと NPO の活動を通して「命に直結した食の大切さ」を訴え続けている。

残念な話ではあるが、農業を教えた人が農業をしない。

農業を学んだ子供が、農業に就いていない。

土と話せる人（子供）、さわやかな風を感じられる人（子供）は命を大事する。

農業を通して、本質を見抜く力を子供たちに教えて欲しい。

1 いのちの尊厳

nature:（自然）は、natura〔ラテン語〕①自然、②本質・本性(essence)からきた言葉。

① 「生命倫理」から「いのちの倫理」

bio(いのち)/ethics(倫理)

② 本質とは：“ありがたさ（あなたの代わりはいない）”と“かけがえのなさ（滅多にない）”

③ 人と人との出会いの確立は、地球上の人口70億人分の1のあなたと私

④ 我々の identity（自己同一性）の根拠は、60兆の細胞である。

「全ての人は幸せを求めている。不幸のために努力する人はいない。」

2 いのちにおける二つの様相

① We are only dust-but beloved dust！（私達はただの塵だ。しかし、（神によって）愛された塵だ）

② 人間の二つの本質とは、儚さとかけがえのなさである

③ 誰かと生きるとは、二人の息遣いを一つにすること。

3 いのちは仕合せを目指す

① “仕合せ”は、“仕え合う”ことによって与えられる。

② 「人間は、なぜ不完全なのだろう。」

不完全とは、弱さ・欠点である。だから、いのちを仕え合う・いのちを支える。

③ 自分のいのちは他のいのちによって生かされている

－ それを忘れるとき、人は傲慢になる。

自分のいのちは他のいのちを生かしている

－ それを忘れるとき、ひとは希望を失う。

自分の良さを認め、生徒の良さを認め、いのちを仕え合いましょう。

【講演2】要旨

講演テーマ「農業高校を通じた地域振興の具体的取組」

前青森県五所川原農林高等学校校長

（株）アグリコミュニケーションズ津軽（AC 津軽）

代表取締役社長 佐藤 晋也

六次産業化には、資本が必要である。イノベーター（変革者）となるためには、勉強と努力が必要である。

「学びを活かす場」の整備と保障を行うのが農業教育に求められている。「私はしっかりと、農業ができる」といわせる農業教育であって欲しい。そんな思いで、五所川原農林高校の挑戦を行い、4月から（株）アグリコミュニケーションズ津軽（AC 津軽）代表取締役社長として地域振興に取り組んでいる。

1 雇用をつくる食料供給産業

単なる産業としての農業から、食糧供給産業としての農業を目指す。

2 五所川原農林高校と食糧供給産業

職業としての農業を実践し、将来の自分をイメージする、キャリア開発が目標。

3 五所川原農林高校は環境健康研究センター

子供から大人まで、地域に期待される五農高環境健康研究センター

4 五所川原農林高校と五所川原六次産業推進協議会

GONO教育モデルは、地域貢献と社会貢献の機能を最大限に獲得する。そのためには、

①農業の六次産業化教育の推進、②担い手の育成、③街作り・街おこしに貢献する。

5 津軽スペシャルG推進委員会設立、そして、株式会社AC津軽構想

【グループ協議】 研究事例

A高校は、M県の南部にあり、今年で創立136周年を迎える伝統校である。学校の規模は学年5クラスで、農業学科（3クラス）と家庭学科（生活教養科1クラス）、福祉学科（1クラス）の併設校である。そのうち、農業学科は生産科学科、食品科学科、流通科学科の3科である。昨年、農業3学科は改編し、学科名を現在のものにした。目的は、学習内容を充実し、農業や関連産業に必要な知識・技術を身に付け、諸課題を合理的に解決する科学的な思考力を高め、様々な進路に対応できる内容とした。ポイントは、2年生のキャリアプラン（1単位）、3年生の総合選択（6単位）である。

また、それに合わせて、生活教養科や福祉科もさらに内容を充実させた。

さらに、昨年度からコアスタディという学力向上と学習習慣の確立、そして進路実現のための時間（15分）を日課表の中に創設した。

生徒の進路は、学校全体では就職5割、進学5割であるが地元志向が強い。M県には農業学科を有する県立高校が5校有り、農業学科の学年クラス数は合計15クラスである。

A高校は目指す学校像として、①生徒の可能性を引き出し、伸ばす学校、②地域から信頼される学校、③生徒に「自立する力」と「共に生きる力」を付ける学校を示している。

【学校の課題】

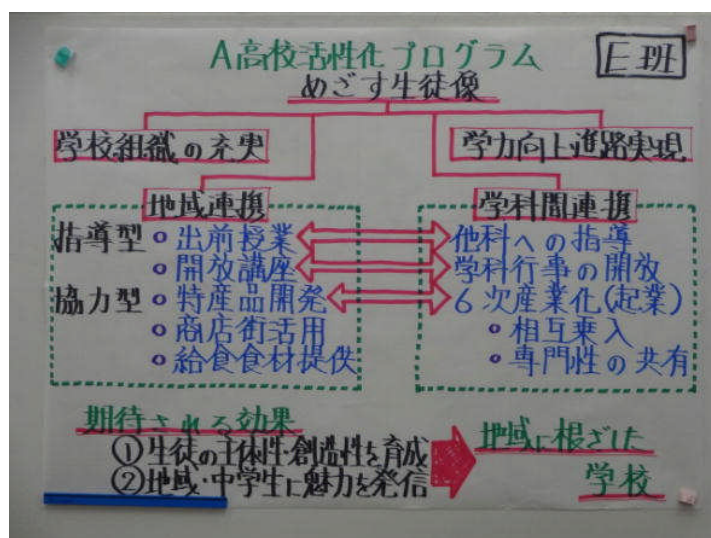
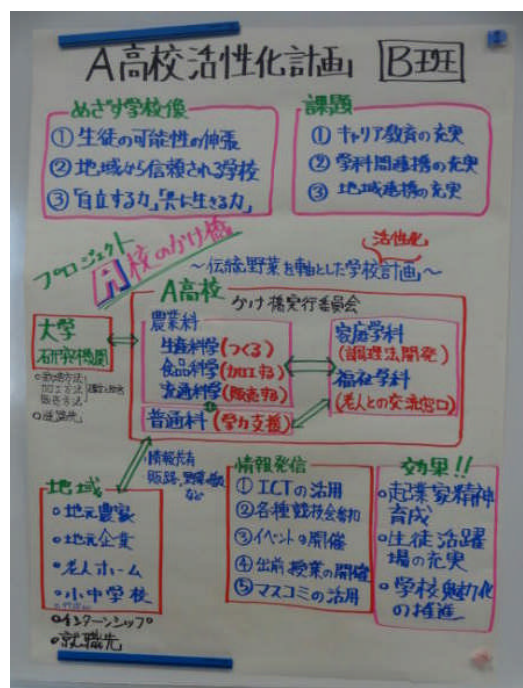
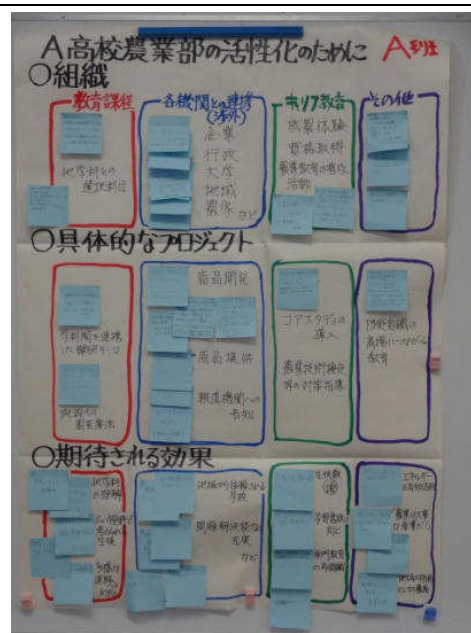
M県の南部地域は人口減少がとまらず、地域の中学校卒業生数が年々減少し、2、3年先には、この地域の全ての学校が、現在の規模で存続することは考えられなくなっている。県教育委員会も今後の方向性を探っている。その中で、A高校が地域から信頼され、選ばれる学校となるために、中学生、保護者、地域にとって魅力ある学校となることが大切である。様々な課題はあるが、重点としては、1点目はキャリア教育の充実、2点目は学科間連携の充実（農業学科だけでなく、家庭科、福祉科も含めて）、3点目は地域連携だと考えている。また、魅力化を推進したい専門学科の教員と普通科教員の間で温度差もある。

【M県高等学校活性化計画で示されるた農業学科の今後の対応策】

農業は、多様な魅力と可能性を持つ産業であることを十分に伝えながら、農業の各分野に関する専門的知識・技術の習得を図るとともに、生産から販売までトータルに考えてグローバルな視点で農業をマネジメントする力を育成します。具体的には、高度な技術研究と資格取得、産業現場等における長期間の実習、農業と第2次・第3次産業との融合による6次産業化を踏まえた新しい農業ビジネスの学習、高付加価値をもつ農産物の開発・生産・加工に関する研究、商品やサービスの企画・提案等の実践的な教育を推進します。こうした取組を、産業界や大学等高等教育機関との連携を一層深めながら進めることにより、食と農業を総合的に考えることができ、経営感覚と起業家精神を持つ人材を育成します。

このような学校や県の状況および全国農業高等学校長協会第2次アクションプランも取り入れながら、より生徒が生き生きと活動し元気のある学校作りを推進するため、農場長であるあなたが年度当初にコース代表者会議を招集し、課題解決に向けた提案をすることとなった。

課題解決に向けた農業部の運営組織作りや具体的なプロジェクト、期待される効果を盛り込んで1枚のポスターを作成してください。



【指導講評】要旨

全国農業高等学校長協会 副理事長 齋藤俊彰

2016年には、全国の1800の自治体から896が消滅されている。

「地域の将来は、農業高校の卒業生にかかっている！」

そのために、これからの農業高校・農業教育は、①地域に埋もれている宝を探し、磨く ②地域とのつながりを強くしっかりとしたもの にしていかなければならない

7つの班の発表に対する講評要旨

- ・取組むべきことを具体的に提示し、キャッチフレーズでわかりやすくまとめている。
- ・課題を明確にし、魅力的なキャッチフレーズを考えた発表。
- ・学科間連携を重視した発表
- ・問題解決に向けた、チーム内のアイデアを重視した発表。
- ・他学科の生徒と、互いに学び合う場면을重要視した発表。
- ・課題解決に向けた、しっかりと校内システムの構築を目指した発表。
- ・みんながまとまるための目標を明示していた。発表に小芝居を設けて、目標をわかりやすく指示した発表。
- ・取組みの所在を具体的に明示（キャリア教育推進委員会など）し、わかりやすいポスター。

【閉講式】要旨

全国農業高等学校長協会副理事長

東京都立園芸高等学校長 徳田 安伸

○D→C→A→Pでプロジェクト学習の可視化

○日本農業技術検定の実技講習の実施会場に向けて

【感想】

学校運営等研究協議会に参加させていただきました。全国の農業教育の中心として活躍されている先生方との情報交換はとても参考になりました。全国各校で、少子化・生徒の多様化に伴い、学校規模・学科改編・キャリア教育推進等はどの学校でも抱えている課題であることを改めて知ることができました。

グループ協議では、目指す学校像として、①生徒の可能性を引き出し、伸ばす学校→ キャリア教育の充実 ②地域から 信頼される学校→ 中学生向けに、農業の魅力をPR ③生徒に「自立する力」と「共に生きる力」を付ける→ 地域との連携という3つの柱を中心に協議しました。初めて顔を合わせた教員同士が信頼し、討議の環境を作り、情熱をもって一つの学校を姿を作り上げることはとても得難い体験でした。

最後にこのような貴重な機会をいただいたことに感謝申し上げます。

第54回東北地区高等学校農業教育研究大会

第13回全国高等学校農場協会東北支部大会

教諭 和泉 有紗

実施日時 平成27年8月18日(火) 全体会(第1～第4分科会)
19日(水) 講演会、指導講評
会場 秋田県秋田市 秋田ビューホテル
大会テーマ 「生徒の『生きる力』を育む活力ある農業教育の創造と実践」
参加者 東北6県166名
感想 第3分科会
【テーマ】豊かな人間性を育み、生徒一人ひとりの個性の伸長を図るキャリア教育推進の農業教育
はどうあればよいのか
発表者 秋田県立大曲農業高等学校(佐々木 孝之)

はじめに

本校は明治26年(1893年)開校、県内で2番目に古く、創立124周年を迎える。卒業生は3万名弱を数え、地域農業のみならず、地域産業を支える人材を輩出してきた。学科構成は農業科学科(1学年3クラス)、生物工学科(同1クラス)、生活科学科(同1クラス)で、農業科学科は2年次以降、生物生産系、アグリビジネス系、環境緑地系に分かれる。生徒の在籍数は517名(男子264名、女子247名 5月1日現在)。平成28年3月に新校舎完成予定である。

1 本校の概要

(1) 沿革

明治26年 秋田県尋常中学校農業専修科設置
明治37年 大曲(現大仙市)に新校舎落成移転
昭和63年 農業科1学級を生物工学科に改編 生活科2学級を生活科学科に改編
平成9年 農業科(2)、林業科(1)、畜産科(1)、園芸科(1)を農業科学科4学級に改編
→農業科学科(4 H17→3)、生物工学科(1)、生活科学科(2 H13→1)
平成23年 1学級定員40名から35名へ
平成24年 創立120周年
平成28年 新校舎落成

(2) 校訓 「質実剛健」「実践躬行」「人格陶冶」「勤労愛農」

(3) 教育目標

憲法、教育基本法に則り、校訓を体し、農業教育を通じて豊かな人間性を育み、時代に即応する職業人を育成する。

- ① 思いやりの心を持ち、人間愛に満ちた人間を育成する。
- ② 苦しさ能耐え抜く、心身ともにたくましい人間を育成する。
- ③ 自ら学ぶ態度を養い、意欲あふれる人間を育成する。
- ④ 望ましい勤労観を育て、郷土の発展に尽くす人間を育成する。

(4) 27年度重点目標

生徒一人ひとりの確かな成長を目指して、自分で考えさせ、自分から実践させてみて、皆で認めて、誉めて育てる

(5) 学科及び在籍生徒数

学 科		農業科学科			生物工学科			生活科学科		
学 年		1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年
生徒数	男	60	65	69	25	23	27	0	0	2
	女	45	38	35	10	9	6	35	35	33
	計	105	103	104	35	32	33	35	35	35
		312 (男194 女118)			100 (男75 女25)			105 (男2 女103)		
総 計		517 (男271 女246)								

(6) 進路状況

進路 卒業年度	進学			就職				卒業者数
	大学 (国公立)	短大	専門等	県内	県外	公務員	自営等	
平成23年度	19 (6)	20	70	57	16	5	1	188
平成24年度	18 (4)	22	68	65	12	4	1	190
平成25年度	19 (1)	20	57	58	10	4	4	172
平成26年度	8 (5)	15	58	43	12	8	4	148

2 平成27年度入学生教育課程について

- (1) 農業科学科(105名)は2年次から農業科学科内の8部門を選択する。3年次は異なる部門を選択する。8つの部門は生物生産系(作物、野菜、果樹、畜産)、アグリビジネス系(食品化学、農業経営)、環境緑地系(グリーンライフ、森林科学)である。2年次の系部門と2、3年の「課題研究」の部門は連動する。農業科学科は3クラス括り募集のため、改編前の4学科の時に生じた定員不足という事態は免れてるが、系の選択時に希望人数の偏りが生じている。(10名以上でなければ科目開設ができない県の方針)生活科学科は2年次からヒューマンサービス系、ライフデザイン系どちらかを選択する。
- (2) 2年次から「総合選択制」を採用しており、2年次2科目4単位(2+2)、3年3科目8単位(2+2+4)である。選択A群(普通3科目、専門6科目)選択B群(普通2科目、専門5科目)選択C群(普通5科目、専門5科目)。

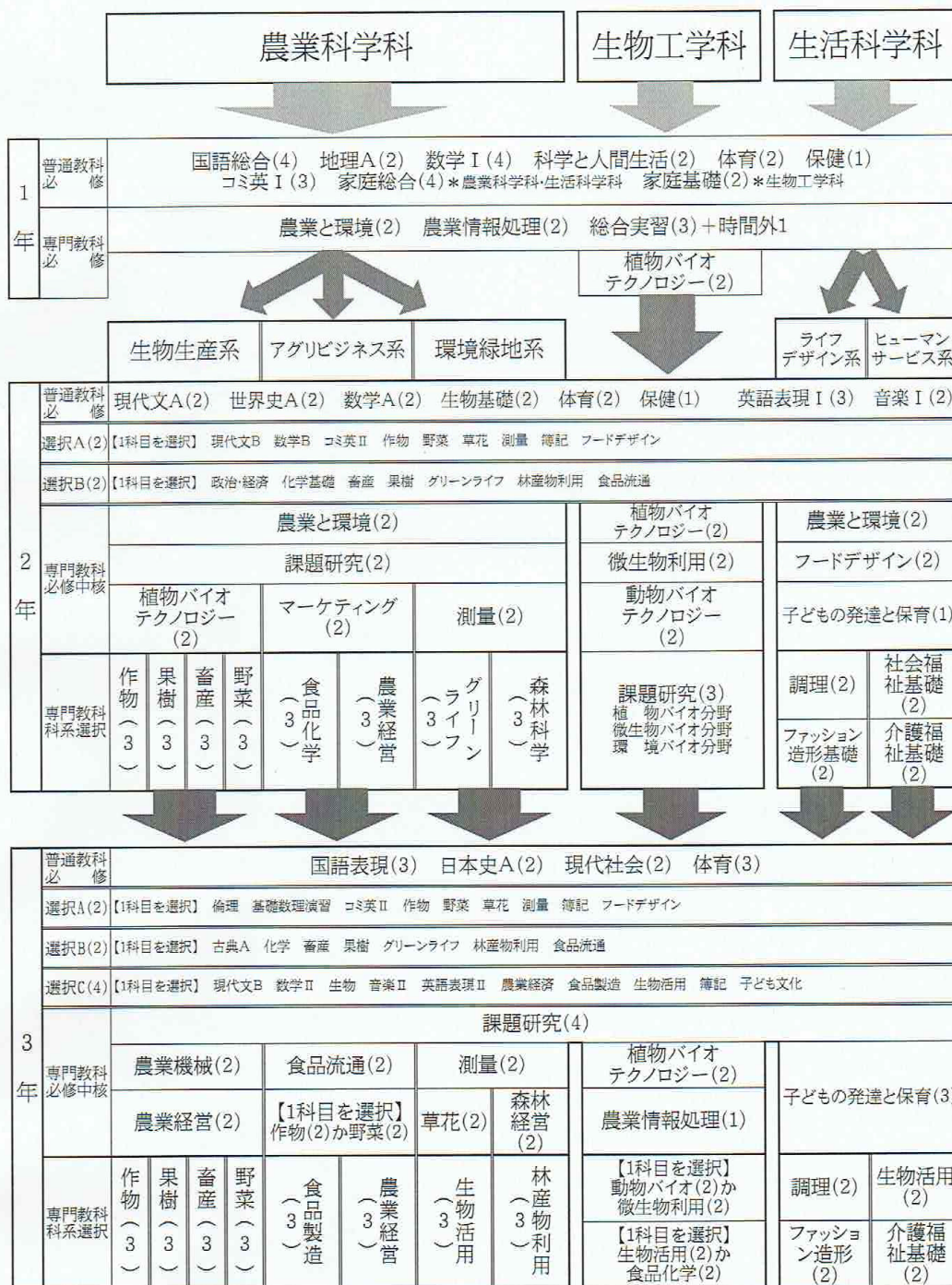
選択の仕方: 選択A・B群の専門科目は2年間、同一科目を履修する。



平成27年入学生(3学科5クラス)	
農業科学科(3クラス) 生物生産系(4部門系選択) アグリビジネス系(2部門系選択) 環境緑地系(2部門系選択)	
	生物工学科(1クラス)
	生活科学科(1クラス)

(3) 本校の教育課程（平成27年度入学生フローチャート）

平成27年度入学生教育課程フローチャート



3 本校の取り組み

(1) 社会の変化に対応し、創意工夫を活かした教育課程の編成

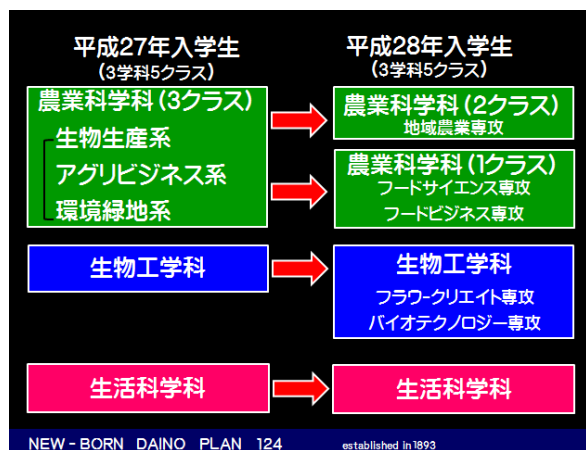
現在の教育課程は平成13年学科再編で編成されたものを概ね継続し、若干の変更を加えてきた。「総合選択制」と謳った選択制は2年次4単位、3年次8単位を生徒の選択に委ねるものだった。この結果、就職者と進学者の割合は逆転し、4対6となっている。

しかし、少子化のため、県内専門高校の定員は35名となり、現教育課程の選択方法では開設できない科目も出ている。(10名以下の科目)

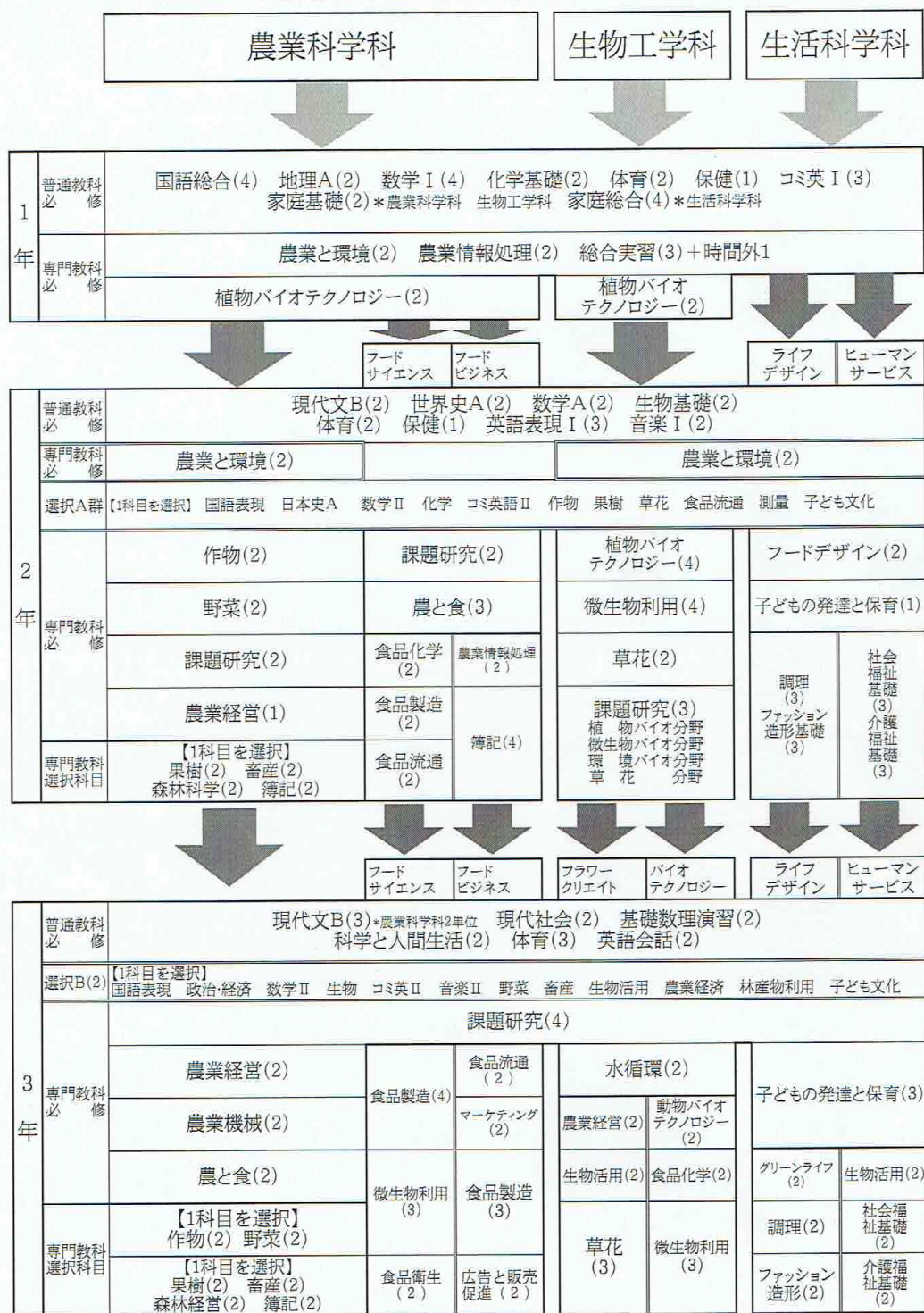
平成28年3月の新校舎完成に合わせ、将来の地域農業のあり方を展望できるような「大農」の存在意義を改めて示すような教育課程編成を行った。

【平成28年度入学生教育課程】

- ① 農業科学科について、従来の3系(生物生産、アグリビジネス、緑地環境)の中で、人気の高かったアグリビジネス系を独立させる形で、食品科学分野を学習するフードサイエンス専攻、食品流通分野や商品販売分野を学習するフードビジネス専攻とした。
- ② 農業科学科の食品に関わる専攻以外を地域農業専攻とし、本校が位置する大仙市が米の産出高が全国上位であるため、「作物」「野菜」は全員履修とし、中核の科目と位置づけた。補完科目として選択制で、2年次「果樹」「畜産」「森林科学」「簿記」。3年次「果樹」「畜産」「森林経営」「簿記」とした。林業系科目は国家公務員及び県職員の林業職希望者対策でもある。
- ③ 農業科学科は「食と農」という学校設定科目を設定している。主な内容は
 - ・地域の郷土料理、伝統野菜などについて、講演や試食する機会
 - ・先進的農家や農業法人代表者から地域農業についての講演
 - ・日本農業をはじめ、秋田県農業や地域農業の実態の学習の場
 - ・6次産業化に関する各産業を結びつけるコーディネーター的人材育成 等を予定している。地域農業分野専攻は3年次2単位、食品科学分野専攻は2年次3単位を予定している。
- ④ 生物工学科は植物・微生物・環境分野のバイオテクノロジーを学習していた。設立当初はバイオテクノロジーが時代背景と相まって、受検生の応募多数だったものの、近年では中学生を始め、保護者にその学習内容がわかりにくいということから、学科名変更を含めた将来構想に基づき、従来のバイオテクノロジー専攻と草花部門を新設し、フラワークリエイト専攻とした。
- ⑤ 生活科学科は平成27年度と変更はなく、2年次より、ヒューマンサービス専攻とライフデザイン専攻となる。ヒューマンサービス専攻は介護施設や幼稚園保育施設での実習が中心。ライフデザイン専攻は調理と被服を中心に学習するが、3年次「生物活用」で自ら栽培したもので調理実習にあたっている。



平成28年度入学生教育課程フローチャート



(2) 地域・産業界と連携したインターンシップの在り方

仙北地域振興局との連携により、農事組合法人や農家への10日から14日間のインターンシップを1年生から3年生の希望者5名に実施する予定である。(平成26年度は8名)。地域振興局とは就農啓発研修の一環として視察研修(平成28年7月10日実施 大仙市清水地区園芸メガ団地(トマトの水耕栽培))、3月のOBを招いての就農啓発講演会を開催する予定である。

※秋田県は高校2年生の時3日間インターンシップかボランティア活動のいずれかを選択して行うことになっている。

(3) 多様な生徒の実態に対応した進路指導及び資格取得指導などにおける工夫と実践

【秋田県立農業科学館との連携 ―農業科学館ナビゲーター取得を目指して―】

秋田県立農業科学館は大仙市内小友地区に平成13年開館、農業県秋田で培われてきた栽培技術、農村の姿を科学的な視点から紹介する科学館である。また、生涯学習の拠点として、園芸・ハーブ・活け花などの各種教室も行われている。

1年生を対象にナビゲーター検定を実施、学芸主事から9月から11月の間に4時間程度の講習を受け、2月に受検した。合格者は1回目76名、2回目71名、計147名が合格した。合格者は農業科学館祭や2年インターンシップ期間中などにナビゲーターとして活動の補助に当たる。講習会(3日)、養成研修(1日)、ナビゲーター活動(3回)を通じて学修Cとして1単位の認定に向けて校内で検討中である。

参 考：秋田県では「学校外における学修の単位認定に関するガイドラインについて」

(平成24年10月12日教高一1179)

校内規定：病院等において1か月につき8時間程度継続的にボランティア活動に従事し、合計80時間程度になった場合、「学修C」として1単位を与える。

農業科学館は小中学校をはじめ、一般の方のセカンドスクールとしての活用が多く、利用者に対してナビゲーターとしての活動を予定している。(7月22日から24日、2年生8名インターンシップ活動として、来館者に対してナビゲーター活動を行った。)

(4) 農業教育の活性化につながる学校農業クラブ活動の工夫と実践(地域との連携)

【田沢湖の水質改善に関する研究】

強酸性水の玉川の水を引き込んだため、田沢湖は酸性度が強くなり魚が棲まない湖となった。国は石灰による中和施設を作り、水質改善を行っている。本校生物工学部は電気分解による中性化を試み、平成25年にはアサヒビール主催「若武者育成塾」に参加、行動計画と地域への広報活動計画を立案し、11月秋田県種苗交換会会場にて、来訪者に対して自分たちの活動を周知した。平成26年度は中性化した田沢湖水でウグイを育て、電気分解による全ての田沢湖水を中性化した場合の試算化を行った。平成27年度は水素が将来のエネルギーとして注目を浴びる中、効率のよい電極の開発に取り組んでいる。田沢湖周辺地域を水素エネルギー生産基地としてアピールできないか検討している。

【高栄養キノコ栽培】

秋田県森林技術センター、県立大学との共同研究で廃棄されることの多かった県産規格外ダイズ、酒粕、中白米ぬかを栄養剤として利用した菌床の開発に取り組み、平成24年ヒラタケ向け栄養剤の開発成功で外国産コムギやダイズが使用されていた市販栄養剤菌床より、低コストで高収量を得ることができた。平成25年には県内で栽培量の多いシイタケへの応用が進められ、この取り組みはイオングループ主催、Eco-1GP 研究・専門部門で最優秀賞、内閣総理大臣賞を受賞した。平成26年には、一般農家への普及を図り、農業クラブ全国大会(沖縄大会)プロジェクト発表、食料・生産部門において優秀賞を受賞した。

【大曲はなびザプロジェクト】

家庭部は地産地消と地域興しのために、地域で生産される米や野菜を利用した特産品作りとして平成22年か

ら取り組み、生地にはあきたこまち、ソースには味噌、トッピングには大仙市内で生産される野菜を使用し、葉・菜・美ピザを開発した。平成25年までに味や、店頭での作りやすさの改良、販売時の責任問題等をクリアし、市内スーパーでの販売にこぎ着けた。平成26年には大曲花火競技会（8月第4週土曜日）に多く訪れる観光客に葉・菜・美ピザの存在を知ってもらうために、レシピを飲食店向けに公開し、普及に努めた。今年は「大曲はなびピザプロジェクト」と銘打って、更なる普及に努めている。この活動を知った東京で飲食店を営む大仙市出身者の方から賛同をいただき、おせち（¥21,600）メニュー開発を協力依頼された。県産食材を多く盛り込み6品が採用された。

【出身小学校との出前授業及び交流学习】

「大曲花火米（あきたこまち）」という特別栽培米田植えと収穫作業を小学生の手伝いという形で参加。収穫した米はブータンへ送られている。（花館小、四ッ屋小、藤木小）

【大農産あきたこま치의首都圏試食販売会（JA秋田おぼこ 東都生協）】

本校大嶋農場において稲作部門のJ-GAP取得を目指し、JA秋田おぼこの指導の下取り組んでいる。同時に「大曲花火米（あきたこまち）」という特別栽培米を作付けし、収穫後、首都圏にて販売会に参加させていただいている。

【これらの活動を通じて】

農業高校のプロジェクト発表、特に校内予選を勝ち抜いたプロジェクトや優れたプロジェクトは発表の場が設けられる。この発表までの自分たちの活動を含め、自分たちに自信を持つことにつながる。田沢湖班には励ましの声、貴重な意見が届き、研究への意欲が一層高まったと言っている。キノコ班の生徒は大学でも研究を継続し、将来は農業の指導にあたりたいと秋田県立大学へ進学した。大曲はなびピザ班は、地域のための取り組みが全国FMラジオで取り上げられたり、大仙市出身者が経営する飲食店でメニューとして提供されたり、自分たちが2万円を超えるおせちのメニュー開発に取り組み、地域や産業界との連携が図られた一端でもある。

本校は「大農（だいのう）」として地域に根ざしてきた。卒業生は地域農業の担い手はもちろん、地域産業の担い手として、地元に残り、地域活性化のため活躍することが期待されている。その期待の表れとして、昨年から大農祭の仮装行列のルートに大仙市「みのりフェア」会場を組み込むと、大勢の市民が集まってくれた。これは自分たちが注目されていることに改めて気づかされた瞬間（とき）だった。

人口減少県である秋田県では少子化の影響で高校の統廃合は避けられず、第7次秋田県高等学校整備計画（平成28年度から平成37年度）（第二次素案）では、3地区で統合校、3地区で地域校（1学年1学級）が計画に上がっている。進学校のように国公立進学者数のように数字として成果が出せる学校ではないので、「見えない学力」をいかに地域に発信、周知していくかという課題もある。

平成27年度から31年度の中期ビジョンとして、
「新大農プラン 郷土の元気をつくる人材の育成 ―3年間を通じたキャリア教育を推進します―」を策定した。

- ・ グローカルな人材育成
- ・ 未来への飛躍を実現するスペシャリストの育成
- ・ 充実した特別活動をととして、社会を生き抜く力を養成



5 実践報告

- (1) 各学年部
- (2) 第 25 回全国産業教育フェア フラワーアレンジメント
コンテスト (三重大会) に参加して
- (3) 農業クラブ東北大会・全国大会
 - ・第 66 回日本学校農業クラブ東北連盟宮城大会
家畜審査協議会に参加して
 - ・農業クラブ東北大会を終えて～
「大曲はなびピザ」でつながる地域との絆～
 - ・農業クラブ東北連盟大会に出場して感じたこと
 - ・農業情報処理競技大会に参加して
 - ・第 66 回日本学校農業クラブ 全国大会を終えて
- (4) 全国商業高等学校英語スピーチコンテストを終えて
- (5) 産業・情報技術等指導者養成研修 研修成果報告書
- (6) 岩手大学大学院農学研究科修士論文要旨
- (7) 部活動全国大会
 - ・自転車競技部
 - ・柔道部
 - ・女子ハンドボール部
 - ・相撲部
 - ・なぎなた部
 - ・陸上競技部

1 年部の取り組みについて

1 年部主任 古瀬 利彦

1 学年の概況

在籍数は175名（農業科学科3クラス（105名）、生物科学科1クラス（35名）、生活科学科1クラス（35名））。男女の人数は、男子85名、女子90名である。主な出身中学は、大曲49名、大曲南4名、大曲西4名、仙北12、美郷27名、平和6名、西仙北10名、南外5名、協和13名、中仙8名、太田5名、角館8名、生保内5名、明峰6名である。また、入学当初の進路希望は、大学・短大30名、専門学校47名、県内就職75名、県外就職約9名、公務員12名、自営1、就農1である。

2 学習・進路面

- （1）朝学習の課題はベネッセのマナトレ（英数国）を使用。課題が切れた1月末から漢字プリントを使用。生徒は8：25までに着席し（ケータイを提出）、3：30から開始することを基本とした。
- （2）長期休業補習は夏季・冬季ともに、平日3日実施。夏季は英国、冬季は英数国を実施した。1年部には数学科職員がいないが、数学科に依頼して可能な限り担当してもらった。対象は大学・短大・看護医療系専門学校進学希望者、または意欲のある者とした。補習の終わりの時間は1，2年で揃えた。夏季には19名いた参加者が、冬季には11名に減り、部活動を優先する生徒が増えたと言える。
- （3）基礎力診断テストを長期休業後の課題テストとして4月、8月、1月に実施。付属のワークは分量が少ないため、各教科で課題を追加するが多かった。
- （4）進路希望調査を4月と11月に実施。進路指導計画では2回目は1月に実施予定となっていたが、12月から三者面談を開始するため前倒しで実施した。

3 特別活動面

年度当初の部活動加入率は、男子82.4％、女子85.6％であり、年度途中での入退部が数人あった。

4 生活・生徒指導面

- （1）ネット使用に関する注意点を入学当初から繰り返し学年集会などで話したが、LineやTwitterに不適切な投稿をした生徒がいた。
- （2）ケータイを提出できない生徒には、用紙に理由を書かせて提出させた。保護者が預かっている場合は保護者から一言書いてもらった。ケータイをほぼ全員提出するようになった。また、ケータイの機種や他の通信可能な機器の所持について、全員に用紙

に書かせて提出させた。ipodを出す生徒はいなくなったが、ダミーの機種を記入して提出する生徒がいた。

5 課題、次年度に向けて

- (1) 1学年会計の集金合計額が入学前に決められており、予算書を4月に作成しようとしても全く融通が利かない。消費税や商品の値上がりに対応するため、集金の案内を作成する前に事務室と連携する必要がある。
- (2) 入学当初にケータイの機種を提出させた方が良い。
- (3) 三者面談を通して、もっと課題を出してほしいという保護者が数名いた。大学進学希望者などに個別指導をするのが効率的だと思う。学年に数学教員がいないが、課題を出したら答えを渡すだけでも学習ペースを作ることができる。

2年部の取り組みについて

2年部主任 高橋寿宏

今年度の2年生は男子86人、女子82人の計168人となっております。運動部には95人、文化・農業部には45人が所属し、部活動加入率は83.3%となっております。進路希望においては、進学80人(47.6%)、就職88人(52.4%)であり、ほとんどのクラスが進学者より就職者が多いのに対し、生物工学科だけ進学者が就職者を大きく上まわる希望となっているのが特徴です。

さて、例年のことではありますが、2年部ではキャリア教育の一環としてインターンシップが実施されました。原則3日間で49の事業所(新規10事業所)にお世話になりました。例年のインターンシップと一番違ったのは実施日です。これまでは1学期期末考査後の授業日に実施していましたが、夏休みの初日から始めることにしました。そうすることによって、考査から2週間ほどの時間的余裕が生まれ、事前指導に十分な時間を確保することがねらいです。事後指導が夏休みになってしまうデメリットも考えられましたが、先生方の協力によってまずまず順調に終わることができました。

できるだけ生徒が希望する職種の事業所で実施するために、苦勞した点もいくつかあります。自動車整備士希望者を受け入れてくださる事業所は少なく、車関連としてガソリンスタンドに回ってもらった生徒が多くいました。また、整骨院を希望する生徒が多く、事業所を探すのに難航しました。

わずかな期間ではありましたが、働くことの厳しさ、大切さを実感し、進路を決める上で良い経験ができました。

生徒にとって待ちに待った行事は修学旅行です。旅行前の班分けの作業、自主研修の計画、旅行中の集団生活、自主研修を通して、友人と協力しあうことや協調性を養うこと、時間を守ること等々貴重な経験をすることができました。行程の目新しさとしては自主研修です。これまでは宿舎を出発して宿舎に帰るのが一般的でした。今回は全員で清水寺を見学し、そこから自主研修に入っていくという行程でした。これは生徒のほとんどがスマートフォンを持っているからこそできたと思われます。

楽しい行事の後は進路に向けて気持ちを入れ替えさせました。進路ガイダンス、冬休み進学補習・公務員セミナー、公務員朝の適性検査練習、国公立大向け放課後補習等々です。

進路ガイダンスはたくさんの専門学校等から来校してもらうのは取り止めました。進学希望者は難易度で2つに分けて模試と基礎力テストを実施し、全体ではベネッセコーポレーションの遠藤氏から「希望進路の実現に向けて」の講演をしていただきました。就職希望者も民間希望者と公務員希望者の2つに分けました。民間希望者は厚生労働省が主催で東京の大原学園より4名の講師に来校していただき、模擬面接を含んだ長時間のガイダンスを実施しました。公務員希望者は公務員模試の過去問を初めて実施し現状の力を理解させた上で、上野法律ビジネス専門学校から阿部氏に来校していただき、公務員の職種・勉強方法・これからの準備などを教えていただきました。阿部氏は冬休み公務員セミナーでもお世話になり、受講する生徒にとっても同一の先生ということで取り組みやすかったと思います。

冬休みから2月にかけて、3者面談を実施しました。生徒と保護者がよく話し合いをしている家庭もあれば、そうでもない家庭があったり、進路より進級がメインになったりと様々でした。しかしながら、「あと1年もない」という危機感と進路に対する意識・意欲の向上に確実につながった面談ができたと思います。

最後になりますが、次年度は後手後手になることなく、もっと計画的に何事にも取り組んでいき、少しでも早く全員の進路を決定できるようにしていきたいと思います。

3年部の取り組みについて

3年部主任 伊藤寿人

”生徒一人ひとりの確かな成長を目指して”

「理想（ゆめ）の実現に向けて～目標を持って、真剣に努力しよう～」の学年部重点目標は3年間変えずにきました。自立した社会人を目指して、単に多くの知識を身につけるだけでなく、課題を見いだして考える力、知識や情報を活用して課題を解決する力を身に付けていただきたい。また、他者との多様で幅広いつながりをもって生きることができるようになってもらいたいと取り組んできました。

2年次より本格的にキャリア教育部と連携し、進路の課題解決に向け、新たな取り組みを模索しました。キャリアは経歴・職業とも言われますが、生徒達の発達段階やその発達課題と深く関わりながら段階を追って発達していくことを踏まえ、生徒達の全人的な成長・発達を促す視点に立った取り組みを積極的の取り入れることです。そのため、自分を知るためのSPIやクレペリン適正検査取り入れた。また、外部団体の無料の職業適性診断を行い、組織や仕事のやり方を学びながら、自己の適正や職業選択について考える契機としました。

3年生に進級し、いよいよ「進路決定」の年度を迎えました。新年度最初の学年集会では「元気な挨拶と笑顔で新年度を迎えることができました、支えくださるすべての方々に感謝しよう」「1学期末考査で「評定」が決まります。幸せになるために真剣に勉強しよう」「念ずれば花が咲くという言葉があります。進路目標をはっきりさせ、頑張れば必ず決定できるという良いイメージを持って努力しよう」と呼びかけました。

”自分で考えさせ、自分から実践させてみて、皆で認めて、誉めて育てる指導”

部活動や学校行事を通して、自他への思いやりの心や社会性、強調性の涵養を図るため。最高学年として頑張る生徒を学年全体で積極的に認めて誉める指導をしてもらいました。コミュニケーションが充実したことにより、生徒の自覚が目覚め、ルールやマナーを守り、責任ある行動ができるようになってきました。特別活動では女子ハンドボール部・相撲部・なぎなた部・陸上競技部・自転車競技部・柔道部の6つ部活で31名がインターハイに出場しました。野球部は夏の選手権大会でベスト8出場を果たしました。農業クラブ秋田県大会では農業情報処理競技1位、プロジェクト発表では文化・生活・環境の2部門が最優秀賞、意見発表では食料・生産、文化・生活の2部門で最優秀賞をしました。特別活動で一生懸命頑張ることからでしょうか、問題行動がなくなり、落ちつて勉強できる雰囲気が出てきました。

”大農らしい進路希望別指導で、郷土の元気をつくる骨太な人間の育成”

はっきりしなかった進路学習を朝学習から変えようと今まで市販の問題集を全員に同じくしていたものを「就職希望者朝学習」「進学希望補習」「公務員適正」の進路別に分けて朝の時間帯を活用することにしました。何となくの朝学習が自分のための学習へととなりました。放課後は部活動や農業クラブ等で活躍することを激励しました。4月より進路別の学習を実施したことにより、生徒の進路に対する意識が高まったように感じられました。

3者面接、担任・副担任面接、全職員による模擬面接、夏季休業中の学年主任面接、大曲ロータリクラブ就職模擬面接、国公立大学進学希望者校長面接と面接回数を多くし、試験日まで模擬面接を繰り返し、徒達の成長・発達を促す取り組みをしました。

夏季休業中の「民間就職対策補習」では履歴書記入や面接、SPI対策の演習、マッチング面談を行い就職内定に向けた取り組みをしました。「公務員対策講座」では専門学校専任講師を招き、判断推理、数的推理のスキルアップを行いました。「公務員専門職（林業職）夏季補習」では7月22日～8月20日の午後1時～4時まで森林経営、森林科学、林産物利用、測量・農環の出題範囲を4

人の専門教員より指導して頂きました。「進学夏季補習」は7月22日～31日の午前8時50分～12時40分まで国語、数学、英語、生物の教科の指導を行い、2学期に入ってから放課後補習を受験日前日まで行って頂きました。

このような取り組みを試みたことにより、県内民間就職62名全員内定、県外民間就職11名全員内定、専門学校56名合格、自衛官8名合格、秋田県庁（林業）2名合格、秋田県警2名合格、国家一般（林業）2名合格、国立4大2名合格、公立4大5名合格、私立4大10名合格、私立短期大学17名合格という結果になりました。

県内農業関連企業就職者7名、栄養系短期大学進学者6名、林業大学校進学者5名、農業大学校進学者4名、農業系国立4大進学者2名、農業系公立4大進学者5名、農業系私立4大進学者2名は将来、農業のスペシャリストとして郷土の元気をつくる人に成長することが期待されます。

今年度、毎週学年部会を開催し連絡を密にしながら、各分掌と連携し、生徒の進路実現に向け取り組んできました。振り返ると公務員は2年次より専門的に取り組まないと成果を出すのが難しい。面接指導は校内職員以外の方をお願いすることにより効果が上がる。補習授業は学力向上につながるので専門教科の支援をいただくことが成果につながったと思われます。

旧校舎最後の学年として、進路別学習朝学習や民間就職対策補習・進学補習・公務員補習・公務員専門職補習に新たに取り組みました。就職、進学の両方で成果を見ることができました。次年度以降の学年のさらなる飛躍に期待します。

第25回 全国産業教育フェア
フラワーアレンジメントコンテスト（三重大会）に参加して

教諭 平塚 祥広

【はじめに】

平成29年度に秋田県で全国産業教育フェアが開催されることになり、今年度より秋田県として産業教育フェアフラワーアレンジメントコンテストに参加することになった。付け焼刃で参加できる大会ではなく、フラワーアレンジメントそのものの基礎も学んでいない本校生徒がどこまで挑戦できるのか不安でした。

【指導と大会まで】

本校でフラワーアレンジメントを取り入れる科目としては「草花」および「生物活用」の2科目であり、これまでの授業では花材や資材などの経費を考えた場合に年間1回実践ができるかどうかであった。今回、大会参加にあたりこれまでの授業でお世話になっていた合資会社栗林生花店に協力と指導を依頼し、学校とアレンジメントの専門家が連携して選手の育成に当たることができた。急な依頼にもかかわらず引き受けていただいた栗林さんには感謝したいと思っている。

指導は週1～2回をベースに様々な花材および花器を利用して行った。ア



県大会作品①



県大会作品②

レンジメントの基本は焦点の取り方であり、見る側に対して何をアピールするのかを明確にする技術と発想力が必要であった。経験が不足している本校生徒には特に発想力を育てる点で苦労した。3年生2名、1年生3名で練習を重ねたが全員が前向きに取り組んでくれたため、短期間で飛躍的に技術を向上させられたことも要因かと思う。

【全国大会に参加して～反省と課題～】

全国大会のレベルは想像をはるかに上回っていた。参加した各県選手の携行品（アレンジメント道具）は専用の道具をそろえており、代替品で参加しているのは秋田県を含め少数であった。大会テーマおよび花材は当日30分前に発表。「ウェルカムフラワー」だったが、その花材は10種類30本以上、それらにグリーン素材を組み合わせ、60分以内で完成させる「サプライズ方式」であった。全国の選手はその短時間に想像力と独自性をいかんなく発揮し、次々に作品を仕上げていた。

生徒はそんな環境に臆することなく、力を発揮していたように感じる。しかし、今後の大会参加を考えたときに高額な花材および練習環境、指導者の力量を向上させる取り組みが必要不可欠であると感じる大会であった。



金賞受賞作品



本校代表選手の作品

第66回日本学校農業クラブ東北連盟宮城大会 家畜審査競技会に参加して



畜産部門 田口 健一

大会日時：平成27年8月26日（水）

大会会場：みやぎ総合家畜市場

出場選手：佐々木優実（2H）、佐藤翔子（3A）

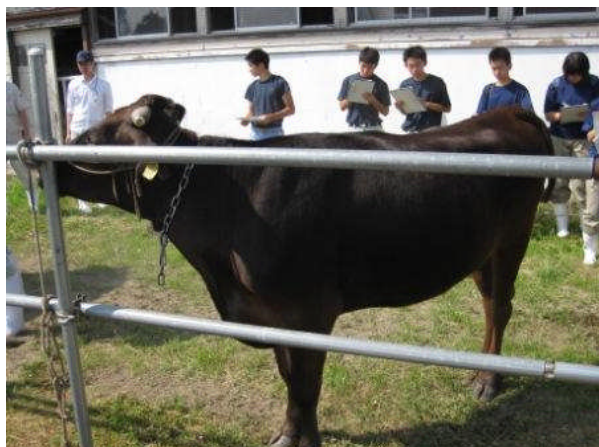
今年度は、農業クラブ全国大会で家畜審査競技会は行われなかったということでしたが、東北大会を目指して選手は頑張りました。

家畜審査競技会の競技力向上を目的として、6月24日（水）に秋田県畜産試験場で行われた家畜審査学習会に参加しました。肉牛・乳牛、それぞれの部門に3名ずつ選手を派遣し、試験場の職員の方から牛をみる上でのポイントを、実物を見ながら丁寧に御指導いただきました。この学習会は、選手にとっても勉強になったと思いますが、私にとっても今後の指導に向けて大変勉強になりました。

その後、7月18日（土）に県連家畜審査競技会が、あきた総合家畜市場を会場に行われました。先に行われた家畜審査学習会に参加した選手が出場しました。全国大会は無いとはいえ、学校を代表して東北大会出場を狙う選手が集まっているために、会場は緊張感に包まれていました。本校の選手も緊張はしていましたが、競技開始のぎりぎりまで私が用意した資料に目を通していました。競技中は選手に近づけないため、離れたところから選手を見守りましたが、どの選手も真剣な表情で競技に臨んでいました。競技を終えた選手に感想を聞くと、「やれることはやりましたが・・・。」と、一様に自信がないような感じでした。しかし、結果は、乳牛の部1位大日向勇人（1A）、3位木元美禪（2C）、肉牛の部1位佐々木、佐藤3位というものでした。この結果から、肉牛の部に出場した佐々木と佐藤が東北大会への出場権を得ました。

東北連盟大会は、みやぎ総合家畜市場を会場に各県の代表19名で競技が行われました。本校の選手2名は、県大会以上に緊張しているのがよく分かりました。県大会同様、競技中は離れたところから見守りました。競技終了後の第一声は、2人とも「難しかった・・・。」というものでした。実際、供試牛のレベルが高く、全体的に成績は良くなかったですが、その中で佐々木が優秀賞を獲得しました。優秀賞受賞はうれしいものですが、同時に東北大会のレベルの高さを痛感しました。

来年度も全国大会では家畜審査競技会は行われませんが、東北大会で行われることがあれば、最優秀賞の獲得を目指して頑張らせたいと思います。また、私自身も指導者としてのレベルアップを図っていききたいと思います。



農業クラブ東北大会を終えて～「大曲はなびピザ」でつながる地域との絆～

家庭部 高橋 由美子

本校が加盟している農業クラブのみならず、全国各地で地域の農畜産物・水産物などの食材を使った名産品作りに奮闘する高校生の姿は、地域おこしに少なからず貢献できる存在となっている。

全国的に有名な「大曲の花火」のアピールと米の消費拡大や地産地消の推進を目指し、本校家庭部が取り組み始めて6年が経とうとしている。本校の部活動には、運動部、文化部の他に農業部があり、農業部の一つに家庭部がある。家庭部は農業クラブ各種発表会プロジェクト発表で毎年発表しており、この「大曲はなびピザ」プロジェクトも農業クラブプロジェクト研究の一環で取り組んでいる。現在の家庭部員は、一～三年の農業科学科と生活科学科の生徒九名で活動している。決して多くはない人数でこのプロジェクトが長く続けてこられた理由には、地域の方々の多大な御支援、御協力があり、助言をいただきながら少しずつ取り組みを発展させていくことができたからである。その成果が形となり、今年度も秋田県大会を突破し東北大会に出場することができた。残念ながら全国の土俵に上がることはできなかったが、“大曲はなびピザ”の地域への定着を少しずつ実感することができ、生徒が感じている地域に貢献しているという実感と達成感が大きい。



大曲はなびピザ

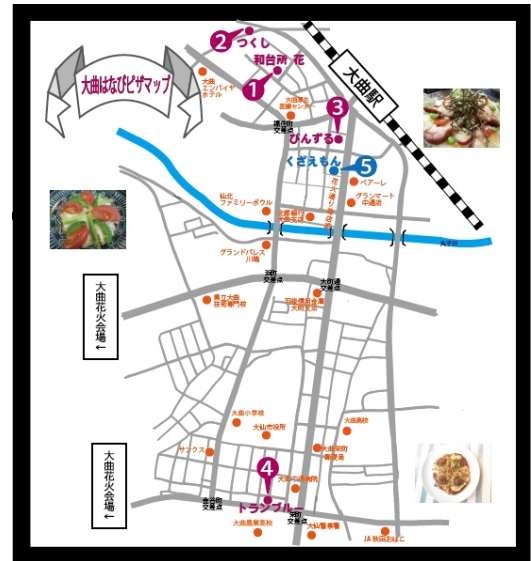
郷土料理「きりたんぽ」にも似た、ご飯を半ごろし（半つき）にした生地と、みそをトマトソースに加えたオリジナルのピザソースが特徴のピザを考案した。そこにトッピングされるのは、大仙市産の彩り豊かな具材で、大曲名物の花火のように放射状に盛りつけられている。ピザは若者に人気のある料理というイメージがあるが、実は幅広い年代から好まれており、好みで好き嫌いが分かれるようなものでもなくピザの消費量は年々増加していることが調査等を通して分かった。

「大曲はなびピザ」のレシピは、試作を重ねて徐々に進化し、現在の新しいレシピのポイントは「生地を使うご飯を昆布だしで炊くことで、風味のあるごはん生地にし、健康面も考え、みそは塩分濃度の低いものに変えた」ことである。

昨年度より「大曲の花火」および一週間前から実施される「花火ウィーク」期間中に、大曲はなびピザをメニューに採用してくれる飲食店を募り、花火大会に訪れた多くの観光客に食べていただけるよう考えた。大曲はなびピザに四つの定義を設け、今年は五店舗で

創意工夫されたはなびピザを提供していただいた。大曲はなびピザの定義は、一、生地はあきたこまちを使用、二、ソースにはみそを使用、三、具は大仙市産の食材を使用、四、大曲の花火のように美しい色合いにすること、である。また、「大曲はなびピザマップ」を作製し、JR大曲駅や近隣の道の駅、ショッピングモールなどで配布し、観光客への案内にも力を入れた。

しかし、手作りピザの工程は手間もかかるため、生地だけでも既製のものがあればメニューに加えたいという飲食店の要望に応えられるよう、生地の工場生産化を今年度の大きな目標としていたところ、これまで協力してくださった方々のつながりから、地元企業による大量生産化の計画が決定し進行中である。



配布した“大曲はなびピザマップ”

活動してきた生徒たちは、このはなびピザプロジェクトだけでなくたくさんの町おこしイベントに参加させていただき、マーケティングや販促について学び実践してきたことを自信につなげている。六次産業化を目指すこれからの農業は、地域にとどまらず全国に仲間をつくり情報交換し協力し合いながら産業に携わっていくことが不可欠であることを活動を通して学んだ。町おこしに熱い思いを抱き、地元の若手を育てたい、協力してあげたい、という地域の方々の思いを支えにこの絆を一層深める活動に取り組んでいきたい。



市民対象の「はなびピザ講習会」を開催

農業クラブ東北連盟大会に出場して感じたこと

教諭 大沼克彦

プロジェクト発表区分「環境」の指導を行い、農業クラブ東北連盟大会に引率した。研究の内容とその問題点等を記載し、上位大会出場の参考資料としたい。

本校プロジェクト発表区分環境の発表を要約すると、田沢湖が酸性になった要因である強酸性水が農業環境に与えた影響を、生物の酸性水への影響を細胞学的な見地から検証し、田沢湖を中性にする意義と方法を模索しながら、水と環境の大切さを考えるという内容であった。農業環境の改善を目的とした研究は、田沢湖の中性化のための方法を試行錯誤によって検討し、主に化学と生物学の基礎に重点を置いて、水が中性になるしくみを考察しながら、田沢湖水という具体的な対照を利用可能な水にする方法の確立を試みる科学的な検証実験が中心であった。発表時間、プレゼンテーションの方法を総合して考えると、本校生徒は、持てる実力を発揮して最高のパフォーマンスで発表を終えたと感じている。しかし、結果として最優秀賞は得られなかった。

農業という「教科」と目的に対する評価法が特性として強く表れているプロジェクト発表の評価方法を分析すると、目的をどこまで達成させられたかが評価の最重要項目であり、本研究が上位大会に出場するためには、田沢湖を中性にすることが必要不可欠である。したがって、水の生物に対する基礎研究が中心である本研究では、あまりにもスケールが大きすぎて上位大会で最優秀賞を獲得することは不可能である。我々の研究では、現在の田沢湖水には石灰石に由来するカルシウムが豊富に含まれることが推察され、中性にするとこの水を使った植物の生育がよくなる傾向がある。このことから、上位大会で最優秀賞を獲得するためには、酸性水にある耐性のある植物を地域住民と栽培・収穫して販売し、田沢湖の水の利用法を確立するという内容に研究内容を収束すればよい。目的は明確、オーソドックスな農業への取り組みからの問題解決、地域連携のアピールができるため、成果は十分に出せると考えられるので、興味もある先生はトライしてみてもよいのではないかな。

本校生徒に限らず、現在の学校における生徒の評価は、どれだけたくさんの正解を導き出せるかが重要であり、生徒は常に正解を求める傾向が高いと感じる。このため、彼ら自身の学習成果の確認は、常に自分の正解の数で実感している。したがって生徒は、目的が正しい社会貢献であっても、その過程における方法の正しさを常に気にしている。しかし、取り組み方法の正解は一つではないため、正しい論理的な思考を積み重ねることを教えなければならない。このような理由で私の実施している田沢湖の水質改善研究には、教育的な意義があると考えている。農業クラブの活動というよりは、科学部的な活動であるが、普段の学習成果を確認する、あるいは、今後の学習意欲を高めるという狙いのもとでは重要な研究としてとらえて研究活動を続けさせたい。

とは言っても、重要なのは生徒が主体的に取り組めるか否かである。私が指導したプロジェクト研究活動に対して生徒がどのように感じたかは、本校生徒の活動報告集「貢河」を参照していただきたいが、彼らの要点は、「大会に出場することで、悔しさや喜びを感じ、目標を達成するために明確な目的と日々の活動の大切さを学習した」という感想をもったようである。指導者としては、彼らが研究活動の結果として生きる力の芽を出したと感じている。昨今、アクティブラーニングによる生徒の主体的な学習法が脚光を浴び、授業での実践が多くの先生によって研究されている。生徒が生徒自身の目標を設定して、1つ1つの課題を解決するプロジェクト学習が、生徒主導のアクティブラーニングでなければならない。そして、課題発見能力、課題解決能力、ディスカッション能力、プレゼンテーション能力を長い時間をかけて育てるプロジェクト学習は、生徒の今後の人生において大きな自信を与えると信じて、今後も指導を行いたい。

農業情報処理競技大会に参加して

教 諭 高階市太郎

昨年3月に大曲農業への異動が決まり、3月下旬に前任者の佐々木優子教諭との引き継ぎが行われた際に「農業情報処理競技大会への指導もあると思うので…」という言葉聞いたとき、初めて農業高校の中にも情報の競技大会があることを知った。商業でも毎年情報競技大会があり、そちらの指導は毎年行っていたが、農業情報処理に関しては実際にどのような種目で競うのか、どういった内容かもわからず返答したのが正直なところであった。

農業情報処理競技会

競技時間 実技60分、筆記15分

競技内容 農業に関するデータを表計算ソフトを活用し、一覧表・グラフ・考察文書を作成する。

上位大会 個人上位3名東北大会

商業高等学校情報処理競技会

競技時間 筆記Ⅰ部・Ⅱ部 各40分

競技内容 Ⅰ部 コンピュータ基本用語
データベース

Ⅱ部 アルゴリズム、表計算関数

上位大会 優勝校、個人上位2名が全国大会

藤井泉水、齊藤琴美の3年生2名が1年次から競技会に出場しており、年度初めから意欲的に活動をしていた。情報処理競技大会は県内大会で大曲農業が13連覇している種目で、彼女たちは優勝や連覇という言葉を目にしながら、プレッシャーとも戦っていたように見えた。佐々木教諭が日々鍛えていたこともあり、彼女たちのタイピング速度は高いレベルにあった。農業情報処理の授業内容がベースにあるため、高度な関数を知っているかどうかは重要ではなく、基本的な関数を指示に従って組み合わせ、生活に使えるかが作業をスムーズに行うポイントであると感じた。秋田県予選には2名のほかに、2年生2名、1年生1名の計5名が参加した。3年生は後輩への指導も丁寧で、入力を簡略化する方法や関数の使い方などを理解するまで根気強く教えていた。1・2年生にとっては、練習期間が短いとその反面学ぶ知識が多く、なかなか定着させることに苦労したと思う。しかし、学び合いを通じて、それぞれの課題をしっかりと克服して大会に臨むことができたように感じている。その結果、秋田県大会は藤井が優勝、齊藤が第2位に輝き、本校14連覇という目標も合わせて達成することができた。1・2年生も入賞まではいかなかったが、良い経験をすることができた。

東北大会は8月下旬に宮城県亘理町にある亘理高等学校で行われた。秋田県大会後はそれぞれの部活動の活動や就職試験の準備などを優先したため、週1回の練習で大会を迎えることとなった。大会問題は『ある地区の水稻の育生と収量について』というテーマであった。県大会は情報処理の技術に重きを置いた問題であったが、東北大会の問題は作物に関する知識が定着しているかどうか、順位に影響を及ぼしたように感じる。競技者最上位に与える最優秀賞には手が届かなかったが、上位6名に与えられる優秀賞を2名とも受賞することができた。今までの経験と思いが結びついた結果であると思う。今後も、情報処理という分野に興味を持ち、自分の設定した目的を達成するために一生懸命に頑張る生徒を応援していきたい。



第 66 回日本学校農業クラブ 全国大会を終えて

農業クラブ顧問 照井 豊和

【 名 称 】	日本学校農業クラブ全国大会群馬大会
【 日 時 】	平成 27 年 10 月 20 日（火）～ 10 月 22 日（木）
【 会 場 】	農業鑑定競技：勢多農林高等学校 クラブ員代表者会議： 大会式典：前橋市 ALSOK ぐんまアリーナ
【 日 程 】	10 月 20 日 移動、会場視察、学習会 10 月 21 日 競技日（農業鑑定競技、クラブ員代表者会議） 10 月 22 日 大会式典、表彰、富岡製糸場視察、帰着
【 出席者 】	農業鑑定競技：千葉葵、佐藤翔子、佐々木穂乃花、佐藤渉、 太田夏鈴、佐藤香奈実 クラブ代表者会議：進藤加鈴
【 結 果 】	農業鑑定競技：生活科学分野 優秀賞（太田夏鈴）

今年度の全国大会には、農業鑑定競技秋田県大会で三位以内に入賞した四人に加え、来年度に向けた経験として二選手を含め、六人の選手が出場しました。また、クラブ員代表者会議には、「地域との交流を通して、より多くの人に農業高校を知ってもらうためには、どうすればよいか。」というテーマのもと、本校農ク役員を代表して、進藤加鈴が出席しました。

農業鑑定競技においては、昨年まで二年連続で入賞無しが続いており、今年度こそしっかり結果を残そうと、指導者および選手は意識を高くもって対策に取り組みました。毎日、放課後にパソコン室で調べ学習を進める一方、古戸先生による実物を用いたレクチャーを定期的に行っていただいたりしました。これまでは実物を観察する機会が少なく、写真を用いた模擬鑑定では高得点をとれていた生徒も本番では思うように解答できず、結果を残すことができなかった要因と考えていました。そのため、こうした実物に触れる機会は貴重で、



生徒の力や自信に繋がったと思われます。大会に向かう新幹線内やホテル内でも写真を見たり、ノートを用いて知識面の復習など、最後の最後まで選手同士切磋琢磨して本番に臨みました。結果としては、太田夏鈴が生活科学分野で優秀賞をとることができ、連続入賞ゼロを脱することができました。しかし、他の分野でも入賞できる選手が揃っていたにも関わらず、一分野のみの入賞と多少不本意な結果というのが本音です。また、来年度に向けた課題を残して大会は終了しました。

クラブ員代表者会議においては、全国から 227 名の参加があり、3つの分科会があり、さらにそれぞれ3部屋に分かれて、計9つの会場で会議が行われました。その中では、よりよい農業高校のあり方や農業クラブ活動の魅力の発信方法、農業高校で学んだ専門的な知識や技術をどのように活用して農業や地域の発展に生かすかなど、熱心に話し合いが行われました。本校から参加した進藤加鈴は、本校での取り組みを積極的にアピールするほか、他校の活動を見聞し、本校も引き続き地域とどのように交流していくべきか、あらためて考える機会となったようです。この会議において事例発表となった青森県三本木農



業高校の取り組み紹介プレゼンテーションは素晴らしく、地域にとどまらず首都圏他、全国との交流を紹介し、農業高校の可能性を見だし、他校の生徒にも考えさせるような内容でした。今後は、その成果を各单位クラブで活用し、農業クラブ活動の活性化に役立てていくことを期待します。

今年度は、群馬県開催ということで、競技終了後には、最近世界遺産に登録された富岡製糸場を見学してきました。生徒においても群馬県に行く機会は今後も少ないと思われますので、良い機会になったと思われますし、日本の技術力の高さをあらためて理解することができました。農業クラブにおいても、こうした競技を通じて知識のみならず実践力も身につきます。将来の農業分野を担う生徒たちですので、こうした競技が日本の農業技術のレベル向上に貢献しているとも言えます。我々、指導者としてもそうした責任を負っていることをあらためて考える機会となりました。



【生徒の感想より】

○農業鑑定競技に出場して 3年A組 佐藤翔子

昨年に続き、今年も全国大会に出場することができました。全国大会に向けては、生徒一人一人が放課後遅くまでパソコンでの調べ学習や実物を用いたレクチャー、計算問題の添削指導など、昨年以上に努力しました。また、出場する仲間同士でも休憩時間には仲を深めることもできました。

そして、全国大会本番、群馬県に向かう途中、ホテル内など、時間を惜しみながら勉強して臨みました。残念ながら私は入賞することができませんでしたが、こうした大会を通じて、身につけた努力する大切さや知識をしっかりと将来に活かしていきたいと思います。

○農業鑑定競技での成果及び来年度への抱負 2年S組 佐藤渉

私は、今年度、念願だった農業クラブ全国大会に出場することができました。出場が決まった瞬間は、うれしさと少しの不安を感じました。

大会に参加し、一番印象に残っているのは、待機室に他校の選手と共に待機しているときの雰囲気です。そこには、ピリピリした空気が張り詰めていて、とても緊張しました。その雰囲気に圧倒されたこともあり、今回は入賞できませんでしたが、来年度の大阪大会では最優秀賞をとれるよう頑張りたいと思います。そのためにも、まずは県大会一位を目指し、勉強したいと思います。

○クラブ員代表者会議に参加して 2年A組 進藤加鈴

十月二十一日、群馬県でクラブ員代表者会議が行われました。会議では、全国から各農業高校の代表者が集まり、情報交換や意見交換をします。私は学校の代表者として参加する緊張感と、様々な意見に出会えることへの期待を胸に群馬へと向かいました。

会議には、多くのクラブ員が参加するため、三つの分科会をそれぞれ三班に分け、九つの会場で行いました。私が参加した第一分科会一班は、「地域との交流を通して、より多くの人に農業高校を知ってもらうためには、どうすればよいか。」というテーマについて、青森県立三本木農業高校の事例発表を聞き、話し合いが進められました。普段は関わることのない学校の活動内容や取り組みを知ることができ、意義のある時間を過ごせました。また、会議の中で感じたことは、大農祭や仮装行列といった豊富な学校行事や販売実習を通して地域の方から愛されており、盛んな部活動により秋田県内ではある程度知名度のある本校ですが、「農業高校生として何を学んでいるのか」「農業学校としてどんな取り組みをしているのか」具体的な内容まではあまり知られていないのではないかと気づかされました。この問題と向き合い、改善していくことが今後の課題になると考えています。

大曲農業高校の魅力を多くの人に知ってもらえるよう、生徒全員が農業高校生である誇りを持って、積極的な姿勢をとりPR活動により一層力を入れていければと思います。そのためにも私たち農業クラブ役員が全校生徒の鑑になれるよう以前にも増して気を引き締めてまいりたいと思います。

平成27年度全国商業高等学校英語スピーチコンテストを終えて

農業科学科 古 戸 毅

<期日>平成28年1月10日(日)

<場所>全商会館(東京都新宿区)

<タイトル、出場者および結果>

「スピーチの部」

「Cultivating Vegetables and Intercultural Communication」

農業科学科3年 鈴木 怜

各都道府県の代表47名が出場し、予選後の1次審査において23名の中には入ったが、2次審査では12名の中には選ばれず、秋田県勢15年ぶりの決勝進出には至らなかった。

<全国大会までの準備および指導>

本人が県南在住の外国人に英語で野菜の栽培指導を行った体験やそれで得た達成感を基に、将来的に消滅の危機にある大仙地域の伝統野菜を人々に知ってもらい、それらを守り継いでいくために自分には何ができるかという内容の原稿を本人に作ってもらい、英文の訂正や発音、アクセントのチェックを英語科の先生方やALTに協力してもらい県予選に出場した。当初、本人は昨年2位となったレシテーション(暗唱)の部に出場したかったようであるが、レシテーションの部には例年校内大会で入賞した1年生を中心に選出され、出場することや私が大館国際情報学院にかなり上手に英語を話す女子生徒がレシテーションの部に出場するだろうということを睨み、本人にはスピーチの部での出場を強く勧めた。実際、予選での彼女の上手さは全出場者(レシテーション・スピーチ部)の中でも秀逸で、ナンバーワンの実力であると感じた。全国大会においても見事に予選を突破し、ベスト12に選ばれている。本人は"全国大会への出場"を考えるとレシテーションの部にエントリーしなくて正解だったと感じている。予選ではアクセントの位置等で少しミスはあったもののジェスチャーを交え、間を取り落ち着いて話せたこと、発音において最も上手な生徒が演壇に手を置いて話したこと(減点となる)などにより幸運にも全国大会への切符を得ることができた。

指導者は審査員が加点、減点をするポイントとなる発音やアクセント、アクションなどを熟知しそれを全て生徒に伝える義務があると考えた。(全て審査基準に明記されているわけではない)

生徒が誤解してそれを言い、それをしてしまい、後で悔しい思いをしないようにするためにも・・・。

<当日の発表から>

今回、スピーチ及びレシテーションの両部において各都道府県を代表する総勢94名の中で農業高校からの出場者は鈴木君だけであり、全国の農業高校生を代表して話すということになった。多くの観客が注目する中で本人はアクション(大げさでない)を交え、落ち着いた堂々たるスピーチを披露してくれた。県予選とは違いミスもなく、私がこれまで見た中で最高のパフォーマンスであると感じた。周りの引率英語教師は彼の話す内容を理解してワンセンテンスごとに頷いてくれ、最後のキリタンポのくだりの"オチ"にはどっと笑いが湧き起こり、万雷の拍手を頂いて無事予選を終えた。スピーチの出来具合やコンテンツから私と本人は予選を通過し、決勝進出を信じていた。

決勝進出者の発表において本人は1次審査において23名の中には入ったが2次審査で12名の枠の中には選出されなかった。決勝進出者や入賞者の半分以上は名前や顔からして欧米および東南アジア系の血筋の高校生達であった。(写真参照)家庭において日常に英会話がある環境で暮らしている人達である。会場の一部に"シラケムード"や非難も漂う中、審査員の一人は「スポーツの世界でもアメリカやアフリカの留学生が全国大会で活躍している。同じ様にこれが全国大会の国際化なのです」と懸命にコメントしていたが、空しさを今でも払拭し切れていない。

<今後の課題>

全国大会に生徒を引率させてもらい、スピーチの部において秋田県代表者が14年以上も予選すら突破できていない理由を容易に理解することができた。県内加盟校における"真の国際化"に対応が遅れているためと言わざるを得ない。英語を話す環境で日常生活を送る"ハーフ"や"クォーター"に負けない程のナチュラルな発音やアクセントを持つ生徒を全国に送り込む必要があると考える。そのためには、帰国子女や長期留学経験のある中学生のスカウトと入学後の指導、A I Uや秋田大学等でのプラクティカルエクササイズの実施などが現状を打破するポイントになるであろう。また、これまで10年以上も決勝進出者や入賞者を実質的に決定している審査委員長の大妻女子大学教授 Timothy Wright 氏の発音をまねることであると考え。つまり、私達が学校で先生から聞き、話す英語とは少し異なる"コテコテ米語"のような発音でスピーチすることである。"コテコテ米語"とはアメリカ人司会者がショーやステージ等でプレゼンするようなタメをつくり後を引くような粘っこい、多少オーバー思えるような発音での話し方である。実際、氏のそうしたクセを見抜き、生徒に"コテコテ米語"で全国大会に向けた発音指導していると思われる常連校もあり、今回も入賞者を輩出しているのである。例えば、「ホンダの車」は・・・ヒヤンダァーズゥ ヴィークゥ などである。

スピーチコンテストは審査員達の主観、好みによって決勝進出者や入賞者が決定される。審査基準はあるものの、全国大会の場合殆どの出場者はそれを超えたハイレベルにあるため用をなさない。



県大会でのスピーチの模様



全国大会でのスピーチの模様



全国大会での入賞者のスピーチの模様



全国大会での優勝者のスピーチの模様

県予選用のスクリプトです。

Cultivating Vegetables and Intercultural Communication

Omagari Agricultural High School

Rei Suzuki

I am learning agri-business at Omagari Agricultural High School.

This summer, I received an invitation from the teacher in charge of vegetables. He asked me, "I will lecture on the cultivation of vegetables to some foreigners at school. Will you help me?". We were to teach in English, not Japanese! I was puzzled, but I thought it was a perfect opportunity to improve my speaking ability with native speakers, so I decided to participate in it.

Six people from the United States, U.K. and Australia joined in the class. The vegetables we planted were green soybeans, pumpkin, zucchini, yacon, three kinds of okra and a kind of sweet potato called 'anno imo'. The work began with soil neutralization using organic lime. We added compost, fertilizer, mulch and made a furrow. We planted each seedling and gave them water.

For most of them, it was the first time to cultivate vegetables. Just once we taught them how to make furrows and the method for planting the seedlings, but they understood our instructions immediately and used the farming tools skillfully. They were unexpectedly good!

Although I knew it was unnecessary, I was worried about my ability to teach them well. However, whenever I saw their happy smiles, the anxiety that I felt about whether I could teach in English changed to a feeling of joy and a sense of accomplishment at the end of the project.

Communicating with the foreigners through the cultivation of vegetables gave me a new dream. I will enter university after graduating from high school and further my learning of agriculture and English. I especially want to learn about farming traditional vegetables such as the Yokosawa curved leek or the Ishibashi thick burdock which are local Daisen vegetables. I aim to be an international agriculturalist sharing the traditional vegetables of Akita to the world. Anyone for delicious kiritanpo nabe? I've got what you need.

全国大会用のスクリプトです。審査委員長からのアドバイスを活かし、内容を少し変えました。

Cultivating Vegetables and Intercultural Communication

秋田県立大曲農業高等学校
鈴木 怜

I am learning agri-business at Omagari Agricultural High School.

This summer, I received an invitation from the teacher in charge of vegetables. He asked me, "I will lecture on the cultivation of vegetables to some foreigners at school. Will you help me?". We were to teach in English, not Japanese! I was puzzled, but I thought it was a perfect opportunity to improve my speaking ability with native speakers, so I decided to participate in it.

Six people from the United States, the United Kingdom, and Australia joined in the class. The vegetables we planted were green soybeans, pumpkin, zucchini, yacon, three kinds of okra and a kind of sweet potato called *anno-imo*. The work began with soil neutralization using organic lime. We added compost, fertilizer, mulch and made a furrow. We planted each seedling and gave them water.

For most of them, it was the first time to cultivate vegetables. Just once we taught them how to make furrows and the method for planting the seedlings, but they understood our instructions immediately and used the farming tools skillfully. They were unexpectedly good!

Although I knew it was unnecessary, I was worried about my ability to teach them well. However, whenever I saw their happy smiles, the anxiety that I felt about whether I could teach in English changed to a feeling of joy and a sense of accomplishment by the end of the project.

Communicating with the foreigners through the cultivation of vegetables gave me a new dream. I will enter university and further my learning of agriculture and English. I especially want to learn about farming traditional vegetables such as the Yokosawa curved leek or the Ishibashi thick burdock, which are local Daisen vegetables. Now, they are in danger of extinction. One reason is that there are very few producers of them because of aging farmers. Another reason is that few of the younger generations are becoming farmers. I want to increase the amount of farmers producing these vegetables not only locally but also globally. So, I aim to be an international agriculturalist, sharing the traditional vegetables of Akita to the world. Anyone for delicious *kiritanpo nabe*? I've got what you need.

平成 2 7 年度
産業・情報技術等指導者養成研修
研修成果報告書

都道府県・市・国立学校名 秋田県立大曲農業高等学校

所属学校名 職 名	秋田県立大曲農業高等学校 教 諭
氏 名	照内之尋
研修教科及び 研 修 番 号	【農業：A－1】
受講者番号	4
研 修 期 間	平成 2 7 年 8 月 3 日～平成 2 7 年 8 月 7 日
研修内容・成果	平成 2 7 年度産業・情報技術等指導者養成研修日程 8 月 3 日（月）開講式・講義・研究協議 10:00～17:00 8 月 4 日（火）見学・実習・講義 8:00～17:30 8 月 5 日（水）講義・演習 9:00～17:30 8 月 6 日（木）講義・演習 9:00～18:00 8 月 7 日（金）講義・研究協議・閉講式 9:00～12:30 【講師】文部科学省初等中等教育局児童生徒課 産業教育振興室教科調査官 田畑淳一 他 【参加者】19名

I 研修日程と講座内容

8月3日(月)

開 講 式 9:30~10:00

- 1 「生物活用・グリーンライフの意義と動向」(講義) 10:00~11:00
文部科学省初等中等教育局児童生徒課産業教育室教科調査官 田畑淳一 氏
- 2 自己紹介・交流活動プログラムの紹介(研究協議) 11:00~12:00
静岡県教育委員会高校教育課指導班指導主事
しずおかユニバーサル園芸ネットワーク 久保田豊和 氏
- 3 「これからの園芸療法を考える」(講義) 13:00~15:00
公益財団法人浜松市花みどり振興財団 理事長 塚本こなみ 氏
- 4 「農産物のブランドづくり～アメーラトマトを事例に～」(講義) 15:00~17:00
静岡県立大学経営情報学部 岩崎邦彦 氏

8月4日(火)

- 1 「グリーン・ツーリズムについて」(講義) 9:00~10:30
NPO 法人スマイルベリー／農家民宿 chanoki (茶の木) ／ 代表 豊田由美 氏
- 2 観光農園の実際(見学・実習) 10:30~12:00 スマイルベリー農場
(1) 農場見学
(2) ハーブの摘み取りとハーブアロマの作成
(3) 交流活動プログラムの作成
- 3 「ユニバーサル農場『ライバルはディズニーランド 笑顔を耕す農園の挑戦!』
～誰もが参画できる農業デザイン」(講義) 13:00~15:00
京丸園株式会社 代表取締役 鈴木厚志 氏
- 4 ユニバーサル農業の実際(見学・実習) 15:00~17:00 京丸園農場
(1) ネギ・チンゲンサイの水耕栽培施設の見学 (2) チンゲンサイの移植実習

8月5日(水)

- 1 「地域資源を活用したうなぎいもの取り組み」(講義) 9:00~10:00
有限会社コスモグリーン庭好／6次産業事業部 取締役部長 伊藤拓馬 氏
- 2 「新しい農業の可能性『農業×ANY で開く未来』～日本の農業は未来にかかっている～」(講義)
10:00~12:00 株式会社エムスクウェア・ラボ 加藤 百合子 氏
- 3 「ソーシャルビジネスとしての農業」(講義) 静岡県立大学経営情報学部 国保祥子 氏
- 4 「ファシリテーション法とは～参加型学習と絡めて～」(講義・演習)
エココミュニケーションセンター理事／学びの広場 代表 小川達巳 氏

8月6日(木)

- 1 「交流活動の進め方」(講義) 9:00~11:00
静岡県教育委員会高校教育課指導班指導主事
しずおかユニバーサル園芸ネットワーク 久保田豊和 氏
- 2 「テーマの設定(プログラミング演習①)」(演習) 11:00~12:00
静岡県教育委員会高校教育課指導班指導主事
しずおかユニバーサル園芸ネットワーク 久保田豊和 氏
(1) 交流活動プログラムへの理解と確認
(2) 交流活動プログラムにおける企画書の作成
(3) 交流活動プログラム当日の流れの検討
- 3 「評価の具体例～生徒の評価・観点別評価～」(講義) 13:00~14:30
静岡県教育委員会高校教育課指導班指導主事
しずおかユニバーサル園芸ネットワーク 久保田豊和 氏

4 「評価の実際～活動と評価～（プログラミング演習②）」（演習）14:30～18:00

班別交流活動プログラムの作成と評価の作成と発表準備

静岡県教育委員会高校教育課指導班指導主事

しずおかユニバーサル園芸ネットワーク

久保田豊和 氏

8月7日（金）

1 「新たな授業の視点」（講義）9:00～10:00

静岡県教育委員会高校教育課指導班指導主事

しずおかユニバーサル園芸ネットワーク

久保田豊和 氏

2 「新しい授業展開の可能性」（講義・演習・研究協議）10:00～12:00

静岡県教育委員会高校教育課指導班指導主事

しずおかユニバーサル園芸ネットワーク

久保田豊和 氏

閉講式 12:00～12:20

Ⅱ 研修内容報告と小括

8/3（月）1 「生物活用・グリーンライフの意義と動向」（講義）10:00～11:00（1h）

文部科学省初等中等教育局児童生徒課産業教育室教科調査官 田畑淳一 氏

【内容】

今回の研修は「農業＋α」、この「α」を考え、情報を共有することにある。また、地域連携をする際は、NPO と一緒に行うと良い。平成 22 年の国の事業仕分けで廃止になったが、「地域産業の担い手育成プロジェクト」があった。今後とも NPO との連携、繋がりを大切にしながら各学校で実施されている事業を展開して欲しい。

（1）研修の目的と農業教育に関して

「生徒・地域・未来のため」という視点を大切にしたい。いまの子どもの65%は、大学卒業後に今は存在しない職業に就く可能性がある。また、IT や PC が高度に発達しても到達できない能力、すなわち人間の感性・優しさ・思いやりの心などを育てるのが「農業教育」である。石破地方創生大臣らが今年度立ち上げた国会議員で構成する「農業高校を応援する会」があり、非常に心強い。以前に文科省副大臣と農業高校の視察に出向いた際に「農業高校生はピュアである」ということ、「施設設備が古い」との認識を持たれていた。このような認識を持って頂いたことで今後うまく予算化に繋がれば良いと考えている。

（2）今後の教育のキーワード

①人口減少 ②自治体消滅 ③地方創生 ④教育再生実行会議 ⑤中央教育審議会

（3）農業教育の現状

- ① 少子化を背景に、我が国の高校全体の数が減少する中で農業高校も統廃合で減少。農業高校の生徒数は高校生全体の2.5%程度。特に、女子生徒が増加しており、生産系学科においても約半数が女子生徒となっている。
- ② 文科省では今年の3月に「専門高校パンフ」を作成、各都道府県・市町村教育委員会、中学校へ配布している。専門高校への理解が深まればよい。
- ③ 全国における科目「グリーンライフ」と「生物活用」の履修状況について、生物活用が40%、グリーンライフが30%となっている。中でも「植物バイオ」の履修（40%）が多いのが気になる（植物バイオの内容は、理科の生物において内容が記載されているので基礎科目「生物」が応用科目「植物バイオ」を追い抜いたと言える＜久保田先生談＞）。今後の植物バイオの取り扱いについては考えなければならない。
- ④ 生物活用の方向性とこれからについては、農業におけるヒューマン（対人）サービス分野としての存在の確立、存在意義は大いにある。すなわち、農業や食への理解とヒューマンサービスは連動している。今後としては、農業と「福祉」あるいは「療法（医療）」となるか、農業の担う範囲（＋α）は拡大（無限大）している。最終的には「生命・人・社会」の理解へとたどり着くことになる。ヒューマンサービスが重要な理由として、平成18年以降、生活福祉関連の進路が

多く、就職先でも活かせる科目であることが挙げられる。

⑤ 農業クラブプロジェクト区分も「文化・生活」から「ヒューマンサービス」へ変更となる見込みである。

⑥ 平成25年度以降の教科農業の目標の1つに「農業生産物や地域資源を活用した対人サービスなどを主としてヒューマンサービスに関連する分野」とあり、対人サービスの重要性を伺える。

(4) これからの農業教育の方向性

①農業教育の現状にどう立ち向かうか

ア)「教師：農業を教え、生徒：農業で学ぶ」意識と体制づくり

イ) 農業教育の専門性を高めているか

ウ) 農業教育の目的は何か（言語活動等で養う資質・能力とは何か。専門性を高め、基礎学力を高める対応とは）

②人材育成は農業科の先生方だけで行うのか

③時代の流れとして学習指導要領の確認（内容の吟味）をしっかりと行うこと

【所見】

高等学校農業教科科目である「生物活用」と「グリーンライフ」の意義について改めて考える良い契機となった。特に、これらの科目は対人サービスを主眼（目標）に置かれていること、すなわち農業科目の中で唯一「交流活動」を行える科目、「6次産業化」を实践できる科目であり、それらを学習指導要領の中で具体的に明示している科目である。フラワーアレンジメントを行ったから良い、道の駅で市場調査を行ったから良い、それらの学習で科目の目標が達成されたということにはならず、それらの活動を通じて地域の人々や異年齢集団等との交流を行うことでコミュニケーション能力や態度が育成されてはじめて目標が達成されることになる。実に奥の深い科目であると同時に、学習指導要領の読み解きが甘かったことを再認識されられる講義であった。地域連携が求められている科目であるため、事前の準備等大変な部分はあるが、今後の農業に必要な「農業+α」（生物活用とグリーンライフでは、このαを交流事業「対人サービス」としている）を实践していきたいと考えている。

8/3（月）2 自己紹介・交流活動プログラムの紹介（研究協議）11:00～12:00(1h)

静岡県教育委員会高校教育課指導班指導主事

しずおかユニバーサル園芸ネットワーク

久保田豊和 氏

【内容】

- ・本研修のフローチャートの説明
- ・自己紹介（1名1分程度）を通じて、お互いの研修の課題を共有することが目的である。
- ・グループワークの内容
 - （1）グリーンライフ、生物活用を实践するにあたっての問題点は何なのか付箋に書き出す
 - （2）課題を共有し、さらに付箋を次の分野に分類する（人・物・金・その他の問題）
- ・ドロッカーの5つの質問
 - （1）われわれのミッションは何か（われわれの組織は何を達成しようとしているのか）
 - （2）われわれの顧客は誰か（われわれはどんな人に役立つのか）
 - （3）顧客にとっての価値は何か（顧客のニーズは常に変化する）
 - （4）われわれにとっての成果は何か（成果が達成されると何が起こるのか）
 - （5）われわれの計画とは何か（目標：マーケティング、イノベーション、人、金など）

8/3（月）3 「これからの園芸療法を考える」（講義）13:00～15:00(2h)

公益財団法人浜松市花みどり振興財団 理事長 塚本こなみ 氏

【内容】

「花みどり」に関わり40年余り、この世界の奥深い魅力と花みどりの持つ自然の命と美しさを通じて、私自身が癒されそして感動を頂いた。これからのフラワーパークの運営にその力を取り入れ、今自分自身を見失うかもしれないと悩む方々に、ほんの少しのお手伝いができればと願っている。

(1) あしかがフラワーパーク（民間経営）での2事例

- ① 高校に進学しない中学校3年生を採用した事例。フジの木の手入れやフジ棚の管理を通じて人間らしい心を取り戻してゆく。採用して数ヶ月後には徐々に明るくなり、コミュニケーションを取るようになってきた。「フジの花綺麗だね」と、自分が褒められているわけではないが、自分が携わっていることへの感謝と自己有用感が醸成されていったケースである。
- ② 鬱病の24歳の青年の事例。大学卒業後1～2年は民間に勤めたが、対人スキルはゼロ。その後職を転々とし、今まで勤めた仕事の中で最も楽しかったのがプールの監視員。理由は「対人関係で苦勞する場面が無く楽だった」ということであった。彼にもフジ棚の管理作業をしてもらい、1年かけて病気が回復。その後、議員の秘書経験を経て、現在は造園会社に勤務している。→これら①～②などの経験を踏まえて、現在「園芸療法」教室を開催している。

(2) はままつフラワーパーク（国立）での取り組み

- ① 発達障害の子どもや、パーキンソン病（筋肉が落ちてゆく病気）の受け入れ。また、引きこもりの大人の受け入れも行う。そういった障害のある人々も植物とのふれ合いや、太陽の光を浴びて健康的に生活することで徐々に回復していった。また、植物は「人間性復元力」を持っていることを実感することができた。
- ② 障害者だけでなく、学校の先生方や登校拒否の児童の適応教室を目指して活動している。

(3) 花みどりボランティア活動

NPO はままつ引きこもりサポートセンターとの連携で事業を行っている。利益だけを追求する組織ではない。障害を持った子どもは寂しい、自信がない、親に認めてもらいたい、誰かに認めてもらいたいだけである。いつか、私たちの活動が日本の園芸療法のパイオニアになりたいと思っている。樹木には生きる力をもらえる、また自分自身を取り戻せる効果があると思っている。

【所見】

園芸療法の最たる事例である。「農業＋α」における「農業＋医療」の実例であった。最近では樹木から抽出される成分としてカテキンやポリフェノール、ヒノキチオールなど是有名であり各種分野で実用化され、科学的にも有用成分として認知されている。通常の高校においても、軽度の障害を持った生徒が入学してくるケースは増えつつあり、そういう意味では農業の持つ多面的役割の効果を発揮できる場面も今後出てくる可能性がある。現に、私自身の経験では場面緘黙の生徒がクラスに在籍していたことがあり、3年間の農業体験等を通じて卒業時は回復したという事例もあった。今後とも「農業＋医療」の分野は広がってゆくと思われるのでアンテナを高くして情報を取り込みたい。

8/3（月）4 「農産物のブランドづくり～アメーラトマトを事例に～」（講義）15:00～17:00(2h) 静岡県立大学経営情報学部 岩崎邦彦 氏
--

【内容】

マーケティングの方法論として、大企業と農業では全く異なっている。以前、和牛の全国品評会があり、最優秀を獲得した和牛が静岡和牛であったのに対し、最高値が付いた和牛が松阪牛であった。すなわち「モノづくり＝ブランドづくり」ではないということである。日本のモノづくり技術は間違いなく世界一である。反面ブランドづくりにおいては非常に弱い面がある。日本の消費者1,000人に都道府県のイメージ調査をしたところ、京都＝寺社仏閣・和・歴史、北海道＝自然・食が美味しい、沖縄＝青い海・南国と回答した。ところが、佐賀＝特になし(470/1,000名)、埼玉＝特になし(326/1,000名)、群馬＝306/1,000名という結果もあり、イメージが浮かばないと消費者に選ばれない、すなわちブランドづくりは売り手ではなく、買い手の心の中にあることを大前提に戦略を構築しなければならないということである。強い農家の条件として、①他にない独自の農産物を持っていること、②独自のパッケージをつくっていることが挙げられる。例えば小さい農家でもブランディングができれば大企業とコラボすることも大いに可能である。同じく消費者に「トマトの購入にいくらお金を支払うか」との問いに対し、平均価格は335円であった。「おいしさの感動にいくらまでお金を支払うか」との問いに対しては、8,939円であった。驚愕の数値である。これを強化しなければならない。農業高校としては質の良い農産物を生産することは大事だが、他の農業高校にはないオリジナルのブランディ

ングづくりが今後のキーワードになるのではないだろうか。

- (1) 農家の8割以上が「品質には自信がある」「味では負けない」→「でもうまくいかない」何で？
- (2) 経営者が語る「強いブランド」の4つの条件
①コンセプトが明確 ②感性に訴求 ③情報発生力（自他ともに） ④口コミ発生力
- (3) 消費者が語る「強いブランド」の4つの条件
①コンセプトが明確 ②感性に訴求 ③独自の Positioning（他にない） ④低価格ではない
- (4) ブランド・アイデンティティの3つのポイント
①価値性 ②独自性 ③共感性
「静岡でお茶が売れなくなってきたから紅茶に代えよう」「つくりやすいものにしよう」、これらはダメである。他地域で成功しているものの取り入れは成功しない（2番手づくりはダメ）。
- (5) 強いブランドを持つ経営者の言葉の共通点
「よその真似事はしない」「他社が手掛けていないジャンルを充実」「他にない独自のサービス」
- (6) 「引き算」のブランドづくり
スターバックス、コカコーラなどシンプルに何かに特化すること。そういう意味では総合学科は今後どうなってゆくのか？
- (7) ブランディングにおいてネーミングは重要
読みやすいか、変換しやすいか、使用シーンに適合しているかなどが挙げられる
- (8) ブランドが失敗する10の理由
①無戦略 ②品質管理がしっかりできていない ③消費者のイメージに背く ④動きがない
⑤無関係なブランド拡張 ⑥何でも屋 ⑦消費者の声を聞かない ⑧値引き競争に荷担する
⑨感性に訴求しない ⑩コミュニケーションに一貫性がない

【所見】

ここ数年でイメージキャラクターが増えてきている。千葉県船橋市のご当地キャラである「ふなっしー」は全国的にも定着している人気のキャラクターといえよう。梨のPRキャラとして登場しているが、むしろ梨のPRを飛び越えて、キャラクターとして成功している部分もあるが、そこが大事なところであり、「梨の味や品質」もさることながらキャラクターを通じてブランディングが成功している顕著な事例ではないだろうか。全国の農業高校においても各学校において独自の農産物を生産し加工、販売している。特に愛知県の渥美農業高校が開発した「カクメロ」という角型メロンは有名であり農業高校としてブランディングの成功事例と言える。秋田県で見ると、男鹿海洋高校のサバ缶はその一つかもしれない。本校で見ると残念ながら「これが大曲農業の目玉商品だ！」というものがなく、ブランディングが成功しているとは言えないのではないかな。生き残りをかけてといえど大げさかもしれないが、学校の独自性、生産物のブランディングを進めていかないと差別化は図れない。

8/4（火）1 「グリーン・ツーリズムについて」（講義）9:00～10:30(1.5h)

NPO 法人スマイルベリー／農家民宿 chanoki（茶の木）／ 代表 豊田由美 氏

【内容】

- (1) 2010年に茶畑レストランを開業（人生の楽園にて放映）、事業拡大で2013年にはスマイルベリーファームを開園し、障害者雇用を推進・実践している。GTのポイントとして、「農業」を1つのカテゴリーで見る。例えば、「イベントがあつての農業」「体験があつての農業」などが挙げられる。具体的には体験活動に注目している。体験活動に注目した場合の特徴は次のとおりである。①ターゲット層を設定しやすい、②付加価値を付けやすい、③ライバルが少ないジャンルでオリジナリティーを出せる、④お客様の反応を直接見られる、⑤異業種コラボが実現しやすい、以上の5点である。特にお客様に対しては特段の留意をしている。ターゲットを絞ること、全部を見せないで楽しみは次回に残しておくことでまた次来てくれる。また、お客さんの目線を忘れないこと。値段を最初から安く設定しないことなどが留意点である。
- (2) スマイルベリーファーム（バリアフリー観光農園）に関しても、農家どうしの連携はダメ。「農

業×福祉」で何ができるかを考えた。農業×異業種で地域連携がはじめて可になる。体験の良さとは、人は体験をすると忘れない（経験値アップ、自己肯定感の形成、雑誌やネットにない情報を発信）ことにある。GTで大事なことは、企画と運営がしっかりできるか（自分たちがプログラムを作って満足するのではなくお客様を満足できるか）ということと、外からの目線、第三者の目線を真摯に受け止め、有効に活用できるか（当たり前前でも当たり前ではない）の2つに絞られるであろう。最近ではスマホなどの SNS は情報発信という意味で大きな武器である。

【所見】

1990 年代に農山村で楽しむゆとりの滞在型余暇活動として GT がスタートして約 20 年が経過した。その GT の成功例として今回見学させて頂いたが、通常の GT に加え「農業×福祉」をテーマに障害者雇用を推進しているという点で先進的であった。中でも「お客様目線」という視点を重視しており、お客様の動向に合わせた展開をしている。これらの活動を未来につなげていくために、

- ① イベントやプログラム作りの基本を知る（企画・運営）こと
- ② 接客対応やサービス対応の人材育成（コミュニケーション能力の育成）
- ③ 地域との連携（異業種とのコラボ・ネットワークづくり）
- ④ 地域を外からの目線で見ることができる（第三者の目線）こと

その 4 つを挙げていたが非常に重要なことである。同業者では同一の価値観しか生まれない。私たち教職員の世界も同じではないか。異業種あるいは第三者の意見を真摯に受け止め、考え実行することで学校経営の改善に向かっていく。授業においても、今後の交流活動において大切なことを学んだ見学であった。

8/4（火）2 観光農園の実際（見学・実習）10:30～12:00(1.5h) スマイルベリー農場

- (1) 農場見学
- (2) ハーブの摘み取りとハーブアロマの作成
- (3) 交流活動プログラムの作成



写真1) ハーブアロマ作成について説明する代表の豊田（由）さん。



写真2) ブルーベリーの摘み取り体験作業について説明する豊田さん。

8/4（火）3 「ユニバーサル農場『ライバルはディズニーランド 笑顔を耕す農園の挑戦！』～誰もが参画できる農業デザイン～」(講義) 13:00～15:00(2h)

京丸園株式会社 代表取締役 鈴木厚志 氏

【内容】

- (1) 農業者にとって必要なのは「経営理念」である。その経営理念は心の中（内観）にある。そういう意味において会社の経営理念を「笑顔創造」にした。農産物の価値に関しても価格を下げればお客が付くわけではない。

- (2) 京丸園では障害者雇用を積極的に推進している。いわゆる「農業×福祉」の実践である。工業・商業に就職がないのなら農業しかない。障害者の真剣な就業感を他業種は知るべきである。農業の特徴は年齢に関係なく仕事ができること。年齢に関係なくその人毎に役割を与えられる。障害者を雇用することで自分たちの農業経営を変えていこうと思ったのがきっかけである。
- (3) 障害者を雇用することで自分たちの農業経営を変えていくことのメリットは、自分と違う価値観（他者のアイデア）を取り入れる事で作業の改善が起こる。今まで改善が起こらなかったのは、農業者の立場でしか物事を捉えていなかったからである。また、今の時代は福祉関係者及び障害者が頭を下げて求職をする時代ではない。「彼らと組んだらもっと農業が良くなる」という意識、これがユニバーサル農業であり、私たちはこれを実践している。実際に作業効率及び収益の増収に成功している。これが医療の現場であれば、私はドクターとしての役割に相当する。目指すユニバーサル農園とは「農業＋福祉」を組み合わせた新産業創出にある。
- (4) 私たちの活動を通して、「日本 Constructive Living 建設的な生き方学会（2011 年発足）」において、「障害者雇用、メンタルヘルスの受け入れが業績改善に繋がっている可能性がある」と示唆された。現在、企業の 50%が法定雇用である「職員のうち障害者雇用の割合が2%であること（50名以上の民間企業）」をクリアしている。残り50%は年間に違約金60万円を支払って免除している（障害者雇用制度）。これからも農業界の中で福祉を追求したい。
- (5) ユニバーサル園芸における農業と福祉と企業の連携事業
- ①農業の課題：担い手の不足、農産物価格の低迷
 - ②福祉の課題：障害者雇用企業の減少、農業分野での働きを希望
 - ③企業の課題：障害者法定雇用率達成、地域貢献・新規分野の開拓
- これら①～③を通じた「農業ジョブコーチ利用モデル」の確立を目指す
- (6) 農業のユニバーサルデザイン
- 農業から農・工・商・医（福祉）の連携を通じたビジネス（健康創造産業）の創出へ

【所見】

現在、岩手大学大学院農学研究科に在籍し研究を行っているが、昨年度「農業経営学特論」を受講し、担当教官である木下幸雄准教授と半年間、農業経営論について議論をさせて頂く機会があった。木下先生は高等学校農業の教科用図書である「農業経営」の著者である。先生曰く、「日本の農家・農業者の9割が生産者であり、1割が経営者である。この1割の経営者を今後増やしていくことが日本の農業経営の課題である」という話が心に残っており、今回の京丸園の講義及び見学を通じて先生の言わんとしていることが実際に見て取れた。また、農業は常にイノベーションの繰り返しであることも述べられていたが、今回の京丸園は「農業×福祉」をテーマとして経営改善、イノベーションを展開していた。そういう意味では木下先生の話しておられる実践の典型的な事例である。午前中の見学に続き今日一日のテーマは「農業×福祉（障害者雇用）」であった。今後、秋田県内におけるこのような事例を調査し、特殊支援学校等と連携しながら授業で活用できないか検討していきたい。

8/4 (火) 4 ユニバーサル農業の実際(見学・実習) 15:00～17:00(2h) 京丸園農場

(1) ネギ・チンゲンサイの水耕栽培施設の見学

(2) チンゲンサイの移植実習



写真3) チンゲンサイの移植について説明する代表の鈴木さん。



写真4) チンゲンサイの移植を行う今回の研修参加者の実習の様子

8/5 (水) 1 「地域資源を活用したうなぎいもの取り組み」(講義) 9:00～10:00(1h)

有限会社コスモグリーン庭好／6次産業事業部 取締役部長 伊藤拓馬 氏

【内容】

- (1) 「うなぎいも」とは、うなぎを加工する際の廃棄物を堆肥化し、その堆肥を用いて作付けした品種「べにはるか」(イモ)の総称である。もともと企業(造園業)に勤めていたが、農地法改正により一般企業が法人としてそのまま農業に参入できたのがそもそものきっかけであった。農業へ新規参入した目的は地域の活性化、地域貢献、浜松を盛り上げたいという気持ちがあったからである。農業に関して無知だったので静岡大学の農業起業人育成講座も受講した。農地拡大で借りられた農地は、新規参入者には厳しい実情で、草だらけの耕作放棄地であった。
- (2) 農業をしていくうちにターニングポイントともいえる転換期を迎えた。今までのやり方では事業継続は不可能、大規模農業にも限界を感じていた。特に問題点だと感じたのが①栽培技術が未熟、②販売価格が安い、③栽培条件が悪い、以上の3点である。それらの問題解決法として①6次産業化、②オリジナルブランド、③複数農家の組織化、の3点であった。そこで思い付いたのが、浜松でしか成立しないブランドといえば、それが「うなぎいも」へと辿り着いた。
- (3) 平成23年に農水省から6次産業家法認定される。その後、うなぎいもプロジェクトチームを発足し、今では各種加工品等を商品化、イベントや取材を受けるようになり、今では浜松においてうなぎいもは定着しつつあると感じている。平成25年には「うなぎいも協同組合」を設立し精力的に活動している。うなぎいもが目指すもの(最大の目的)は、「農業生産者の所得向上」である。

【所見】

企業を辞め、全くの畑違いである農業へ新規参入しようとしたそのバイタリティーには目を見張るものがあるが、それ以上に今までの農業のやり方に異論を感じ、問題点と解決法を明確にした上で速やかに実行するという、異業種(第三者)の目線での取り組みには脱帽する。6次産業化の実践例としてだけでなく、今までの講義等でもあったようにオリジナルブランド化の成功例としても注目されるものであった。今回講演頂いた伊藤さんのように若い起業人が農業分野で活躍することで農業の魅力だけでなく、農業を新産業へと変化させられる可能性を大いに秘めていると実感した講義であった。

【内容】

- (1) 何よりも「農業は社会基盤」である。社会基盤が整っていないと雇用面、健康面、教育面が脆弱になり、これらが弱くなると国そのものが成立しなくなる。アメリカでは農業を家族経営する中で、農業の後継者は子息の中で最も頭がいい者が継ぐべきだと言われている。今回のテーマである「農業×ANY」、このANYには何が入ってもいいが、「農業×ANY=HAPPY」でなければならない。そして、農業を通じた事業創造が今後求められていく。
- (2) 当社では、ベジプロバイダーという生産者と購買者間をつなぐ新たな物流事業を展開している。方法はシンプルで、「腕のある生産者と腕のある購買者を信頼でつなげること」にある。宅急便の値上げの他、人手不足や労働基準法の厳格化を背景に業務量物流費も上昇を続け、農業の継続性を困難にさせている。そこで共配システムを構築し、物流会社・生産者・購買者・行政・金融とともにビジネスモデルを検討、一言で言えば「野菜バス」である。ベジプロバイダーは情報と信頼で成り立っている。あくまで生産者が主役であり、生産現場の顔が見えることが重要である。IT/NET 戦略において日本はアメリカ、中国、韓国に負けている。これは政府も認めている。農業の脆弱な部分は、情報はすぐに届くが、モノはストレートに届かないので、この物流に改革を興してみようと考えた。いずれにしても、「農業×観光」(スペインの例)でも良いし、「農業×健康・医療」(ラットの例)でも良い。
- (3) これからの日本(日本経済)は2040年に人口が3割減少する(増田レポートより)。日本の企業家あるいは企業主は極めて焦っている、強い危機感を抱いている。政府の認識は次のとおりである。①今すぐジャンプスタートが必要。何らかのイノベーションを起こさないと世界の中で取り残される、②借金は我々世代以降が背負う(消費税20%も有り得る)、③ハード更新は難しい(ハコモノは不要、ハコモノの新設に予算は付かない)、の3点である。「思考停止+部分最適」=生産性の低下につながっている。いまの日本の企業は考えてもしょうがない(思考停止)という状態にある。また、部品づくり(部分最適)においては間違いなく世界一であるが、生産性が低く、サービス業では世界に遅れをとっている。そなわち「全体最適」で見えていないことが課題である。今すぐイノベーション(人材)を育成することが急務であり、常識に捕らわれることなく、突飛な思考が時代を救うことになるかもしれない。
- (4) 「Innovation」を起こすにはどうするか？
 - ①相互に接する ②相互に認めあう(農業と工業、男女、ジェネギャップなど)
 - ③脳から音がするほど考える ④失敗を素直に受け止める ⑤決定・行動を起こす
- (5) 「求む! Innovation 人材」

日頃の授業において、お手本になる事業・プロジェクトがあれば非常に良い。今は変革期であり、明治維新に似ている。今の時代において資本主義は成立せず、かといって代替の社会システムも見出せていない。バランスを少しでも崩せばギリシャの二の舞になりかねない状況である。そんな中、日本の地方あるいは農業に次の社会システムのカギが握られているのではないか。

【所見】

5日間の研修において、個人的に最も興味・関心を持って臨んだ講義であった。戦後日本の資本主義経済とグローバル化の中で経済成長を成し遂げていった反面、労働力の流出に続き、生産物の供給基地としての役割としか捉えられなかった農山村は次第に少子高齢化が進み疲弊している。そんな中で最近耳にするのが「脱経済成長」「経済成長に頼らない定常経済の～」「近代的価値観・資本主義の終焉」などがそれである。慶応義塾大学教授で経済学者の金子勝先生は、脱原発推進者で原発は不良債権だと明言している。同時に、農業+エネルギーの兼業を提唱している。私も以前から資本主義は限界にあると認識していたため、この講義には大変共感している。今後は、経済成長に依存しない定常経済が理想であり、その最たる物ものとして「農業」や「福祉」が挙げられる。先ほども述べたが、これからは間違いなく人口減少社会が待ち受けている。利益の追求よりも心の豊かさを追求する指標

が必要になってくると思われるし、そのような中で「農業×ANY」をイノベーションしながら考え行動する人材を育成したいと思っている。本校のきのこ研究グループが取り組んでいる地域資源を活用したオリジナルきのこづくりは、まさにイノベーションを駆使した地域再生・地域貢献テーマであり、このような研究を継続していくことが農業高校の果たす役割だと再度考えさせられる講義であった。

8/5 (水) 3 「ソーシャルビジネスとしての農業」 13:00～15:00(2h) (講義)

静岡県立大学経営情報学部 国保祥子 氏

【内容】

- (1) 地域振興や地域活性化の成功要因に共通点はないが、失敗例に共通点はある。いくら良い戦略があっても人(人材)の意識が変わらないと何も変わらない。そこで Learning Community を立ち上げて組織化し、人の意識・行動の変容を図っている。同時に、現在「育休プチ MBA 勉強会」を立ち上げ、組織の経営資源(マネジメント能力の開発・人材育成)について勉強している。運営チームの会議はすべてスカイプで行っている。
- (2) ソーシャルビジネスとは社会事業を意味している。社会起業家は顧客創造を超えた「社会変革」が目的である(目指したい社会変革がある)。その事例として(株)いもどりが行った上勝町での「つまもの」事業がある。この「いもどり事業」の目的は利益の追求ではなく、山村住民の①出番をつくる、②評価する(順番をつけて競争心を仰ぐ)、③空振りをしない(やればできる)という過疎高齢化の進む山村集落に住む高齢者への生き甲斐(仕事)を与えたことにある。そこに住んでいる人が良いと思わないとすべてが「ゴミ」になる。
- (3) プロジェクトを行う際の問題として「在るべき姿と現状とのギャップ」が挙げられる。あるべき姿とは何か、それに対して現状はどうかをしっかりと明確にすることが重要である。これらのプロジェクトに高校生が絡むことでこういった効果が生まれるのかをしっかりと吟味する必要があるだろう。
- (4) 問題発見ができない4つの理由
 - ①問題定義の前提となる「あるべき姿」が想像できない
 - ②「現状」の分析力が低く、性格は把握ができない
 - ③「ギャップ」の構造を解明して、問題の本質を具体化・優先順位付けすることができない
 - ④実行可能な「解決策」から逆順で短絡的に問題を捉えるために広がり进行を失う
- (5) プロジェクトの成功基準
 - ①期限内に完成すること
 - ②予算内に完成すること
 - ③チームとステークホルダー両者が合意したゴールを達成するか
- (6) 教員のリーダーシップとは
メンバーの性格・状況によって変化するものである。状況に応じて、指示型・非指示型に分類される。今求められていることは何なのかをしっかりと把握すること。また、柔軟性を持って応援できる人が教員のリーダーとしては望ましい。

【所見】

「プロジェクトを行う際の問題として『在るべき姿と現状とのギャップ』が挙げられる」という部分に共感する講義であった。私たちも日頃から農業クラブ活動におけるプロジェクト学習を実践しているが、目の前の課題をクリアする前に、取り組みのPR活動や活動の良い面ばかりを強調しすぎていることも多々見受けられる。また、どうしても教員主導型のプロジェクト研究になりやすく、プロジェクトそのものが生徒のプロジェクトになっていないケースもあるので、再度プロジェクトの在り方についてしっかりと考えていきたい。

8/5 (水) 4 「ファシリテーション法とは～参加型学習と絡めて～」 15:00～17:00 (講義・演習)

エココミュニケーションセンター理事/学びの広場 代表 小川達巳 氏

【内容】

- (1) ファシリテーション＝Education と同義である。各人の持っている価値観・想いを引き起こす事が目的で教育研修や問題解決型研修で用いられるファシリテーターは、話し合いを円滑に進めることが重要である。ワークショップにおける基本的ルールは、①どの意見も尊重すること、②お互い意見を出し合うこと、③出てきた意見を否定するのではなく尊重し活かすこと。
- (2) 実際に行ったワークショップや参加型学習の手法は以下のとおりである。
 - ①傾聴（一切質問せず、ひたすら相手の話に耳を傾ける）
 - ②ブレインストーミング（質より量の話し合い、進行・記録・発表・盛り上げの役割分担）
 - ③フォトランゲージ（明らかな事実と推測して分かることを書き出す）

【所見】

ファシリテーションは教育現場で多用されている交流活動であることは知られている。お互いの意見を出しやすくする前に、お互いの緊張感を解く上で有効な手段である。研修などの教育現場だけでなく、日頃の授業や他者との交流事業における導入時に用いることで親近感やコミュニケーションの醸成に欠かせないスキル・ツールであるため、場面場面に応じて活用していきたい。

8/6（木） 1 「交流活動の進め方」（講義） 9:00～11:00(2h)

静岡県教育委員会高校教育課指導班指導主事

しずおかユニバーサル園芸ネットワーク

久保田豊和 氏

【内容】

- (1) 科目「生物活用」と「グリーンライフ」の目標は、「～に必要な知識と技術を習得させ、～能力と態度を育てる」とある。すなわち、経営の改善を図る目的が含まれており、特に6次産業化を行うのであれば「グリーンライフ」しかないのである（目標として経営の改善を求めているので）。「目的」とは方向性である。農政としては、20世紀が農業基本法、21世紀に入り食料・農業・農村基本法、そして平成27年度より、食料・農業・農村基本計画となり、カロリーベースでの自給率換算はしないと謳っている。また、それら農政とともに学習指導要領も変遷し現在に至っている。また、農地法改正で農業に法人参入が可能となり、市民農園整備促進法において誰でも農地を借りられるようになった。日々農政は変化しているとともに、教育の現場も変化している。それに伴い新設されたヒューマンサービス領域は最も時代に即した（密接した）科目といえる。
- (2) 科目「生物活用」と「グリーンライフ」の目標と学習内容を見ると、ヒューマンサービス領域は生産や経営を主体とした「ものの豊かさ」から、「交流」・「余暇活動」や「農業生物の活用」・「セラピー」などの「心の豊かさ」へ農業の役割が広がってきている。中でも「園芸福祉活動」は主たる科目で生徒が学んだことを生徒自身が理解し、分かりやすく他者へ伝えることで農業教育が今まで行ってきた農業技術教育（テクニカル・スキル）だけでなく、自ら物事を考える発想力や企画力（コンセプチュアル・スキル）、そのための情報収集をする相互理解能力（コミュニケーション・スキル）が必要になってくる。
- (3) 各科目において注意すること
「農業と環境」は3年間のすべての基礎科目である。実習時の整列、時間の厳守、着帽などの指導も含め、ベテラン教員が行うことが望ましい。前教科調査官である添野先生は、「総合実習」は管理作業にならないで欲しいと話されていた。あくまで練習・判断が醸成される科目なので2年次以降の設定が良いのではないかと。グリーンライフや生物活用も同様だと考える。
- (4) 繰り返しになるが、「生物活用」と「グリーンライフ」は対人（ヒューマン）サービスを学ぶ科目である。教師のガイドによって企画力を高めていく。この企画力（計画立案・実行・結果）がグリーンライフの醍醐味であろう。

【所見】

本校におけるカリキュラムでは、「グリーンライフ」が農業科学科における系選択（中軸になる選択科目）と各科自由選択、「生物活用」は生活科学科の系選択と各科自由選択（ともに2年次以降）に設定されている（単位数は2～4単位）。1年次の「農業と環境」等の基礎科目を学習してからの履修になるので、カリキュラム上の問題点は無さそうであるが、授業の内容に関しては反省しなければならない点が多々あるように思っている。今まで「テクニカル・スキル」のみの習得に重点を置いて授業を行っていた点や、交流事業を行う機会が少なく、教科書中心の座学になりがちな部分は否定できない。今回の研修を通じて授業の内容、年間指導計画を見直していきたい。

8/6（木）2 「テーマの設定（プログラミング演習①）」（演習）11:00～12:00（1h）

静岡県教育委員会高校教育課指導班指導主事

しずおかユニバーサル園芸ネットワーク

久保田豊和 氏

【内容】 各 Group 及び個別の活動・プログラミング演習

- （1）交流活動プログラムへの理解と確認
- （2）交流活動プログラムにおける企画書の作成
- （3）交流活動プログラム当日の流れの検討

8/6（木）3 「評価の具体例～生徒の評価・観点別評価～」（講義）13:00～14:30(1.5h)

静岡県教育委員会高校教育課指導班指導主事

しずおかユニバーサル園芸ネットワーク

久保田豊和 氏

【内容】

- （1）現在文科省では、指導要録に「観点別評価」を組み込む検討をしている。
- （2）4観点の構造を考える中で、最も高次に構造化されるのは「態度」である。この「態度」を持っている生徒の育成が最終的な評価の目標となるだろう。
- （3）交流活動における評価方法は以下の方法が挙げられる。
質問紙法、テスト法、観察法、作品法、自己評価法、相互評価法など
- （4）見取りと点検

PDCA サイクルには長期と短期がある。ある学校行事を例にした場合、見取りの結果は1年後の計画のみに反映すればよいということではなく、現在進められている指導計画を修正するのに即時生かされなければならない。生徒たちの声は今準備が進んでいる学校行事に、来月の行事に、というようにスピード感を持って生かしていくことが需要となってくる。

【所見】

PDCA サイクルに関しては、教育分野に留まらず他業種についてもその有用性について認知されているが、今回の評価における「点検と見取り」に関して改めてその必要性を認識するとともに、日頃の業務において重要と認識しながらも忘れかけている事項である。学校行事が終わる毎に反省や感想を職員に求め次回の改善に繋げようとはしているが、その場限りの反省に終始してしまい、次年度また計画を立てる際に、「昨年度と同様に～」というパターンが多く見受けられるのが実情である。その行事が終わったら直ちに見直し評価・反省し、改善した次年度の要項を作成することで見取りと点検が行われたことになる。まさに、スピード感を持って生かすことが重要であることに気づかされた講義であった。

8/6（木）4 「評価の実例～活動と評価～（プログラミング演習②）」（演習）14:30～18:00(3.5h)

班別交流活動プログラムの作成と評価の作成と発表準備

静岡県教育委員会高校教育課指導班指導主事

しずおかユニバーサル園芸ネットワーク

久保田豊和 氏

【内容】：各 Group での交流活動プログラムと評価の作成

A Group

「みんなのリンゴ～弘前実業高校生とリンゴをもぎ取ろう～」

B Group

「もちもちコミュニケーション」

C Group

「あいちゃん活動～地域の中で藍はちゃんと生きている～」

D Group

「高校生から学ぶ農業 De 体験～つなごう地域の絆～」



写真5) 各グループでの作成の様子

8/7 (金) 1 「新たな授業の視点」(講義) 9:00～11:00(2h)

静岡県教育委員会高校教育課指導班指導主事

しずおかユニバーサル園芸ネットワーク

久保田豊和 氏

【内容】

(1) 今回の研修参加者より研修を振り返っての感想を1分間スピーチ

(2) まとめ

- ① 日本の産業の中で不足している産業はサービス業、中でも「福祉」の分野である。「農業×α」が今回の研修の目的であった。この「α」に何をいれていくのか。塩見直紀さんの「半農半Xという生き方」という本がある。農的実践をしつつも農業だけに捕らわれない生き方、趣味を取り入れた農業の実践が描かれている。この5日間の研修の中で講師の先生方が口を揃えておっしゃられていたのが、「農業高校の販売物は安すぎる」ということであった。自信があるならもっと高くても良いということである。低価格でお客さんは付いてこないということであろう。
- ② プロジェクト学習においては、「課題」を持って取り組んでいるだろうか。自己満足で終わってしまう場合も多々存在する。高校3年間だけの農業学習で農家、プロにはなれないので、将来なるために不足している部分を3年間で徐々に補っていゆくという捉え方でよい。
- ③ これからの農業は、農業だけでなく経営や商業にも目を向けていかななくてはならない。まさに6次産業化のようにトータルコーディネーションが不可欠である。
- ④ 各地方で近年、IターンやUターンが多く見られるようになってきた。実は、高卒での即就農は殆ど無く、社会経験を経てからの就農・農業帰属が多く見られている。将来就農するか否かは別としても、生徒の多様な進路に対応する科目として、対人サービスを学習できる生物活用やグリーンライフは今後とも重要視されていくし、しっかり実践して頂きたい。

【所見】

新たな授業の視点というテーマで、この5日間の研修を振り返りつつ、近年の文科省の政策的動向から、学習指導要領における「生物活用」と「グリーンライフ」の目的とねらい、実践について、そして農業を取り巻く環境と農業教育について久保田先生から懇切丁寧にご教授頂いた。「農業×α」について、参加した先生方からの1分間スピーチの中からキーワードとなる語句を摘記することで研修の広がりを持つことができたと感じている。私としては人口減少社会を「暗」ではなく「明」と捉え、希望や幸せに生きるための農業を追求すべきだと考えている。



写真6) 「農業×α」について説明する
久保田先生

【内容】：各 Group での作成資料の発表（10min 程度）

A Group

「みんなのリンゴ～弘前実業高校生とリンゴをもぎ取ろう～」

B Group

「もちもちコミュニケーション」

C Group

「あいちゃん活動～地域の中で藍はちゃんと生きている～」

D Group

「高校生から学ぶ農業 De 体験～つなごう地域の絆～」



写真7) A Group の発表の様子

Ⅲ まとめ（総括）と成果（今後の課題の整理）

最後に、今後の課題を整理し、自分なりの見解・提言をさせて頂いたうえでまとめとしたい。

1 研修のテーマとキーワード

今回の研修のテーマは「農業×（＋）α」である。この「α」をどう埋めてゆくかが最大の焦点であった。この「α」について、今回研修内で報告された事例では「医療」や「福祉」が中心であったが、京丸園の鈴木さんによると「現在の社会問題」を当てはめることでソーシャルビジネスに発展する可能性が高いということであった。そういう意味では、「農業×保育（就学未満児＋学童）」もニーズに合うかもしれない。また、千葉大学の広井良典氏著書である「人口減少社会という希望」（2013.朝日新聞出版社）では、直面するであろう人口減少問題は悲観すべき事態ではなく、むしろ希望ある転換期にある。真に豊かで幸せを感じられる社会への格好の入り口ではないのかと切り

70

込み、論述している。先述した「α」について、これだという確固たるものは未だ見つけていないが、これからの人口減社会において、利益を追求しない「幸せを追求するための農業」が一つのテーマ・キーワードになるのではないかと考え、提言したいと考えている。

2 研修における最大の反省点

その他、今回の研修のキーワードとして、「ブランドづくり」や「6次産業化」が挙げられた。これらを授業で実践するためには、対人サービスについて学習指導要領において明記してある「生物活用」と「グリーンライフ」を通じてしっかり指導計画を組むことが重要であることが認識できた。今まで生物活用やグリーンライフを担当した経験はあるが、「フラワーアレンジを学習させればよい」「農家民宿や農家レストランなどグリーン・ツーリズムを体験させればよい」等々、単発的な授業内容が多く、交流活動まで繋げる場面が少なかったように思える。これらの科目に対する認識が低く、学習指導要領の読み解きが甘かったことに対して痛切に反省している。

3 今後の日本経済の在り方について

エムスクウェア・ラボの加藤さんからは増田レポートをはじめ日本の資本主義経済下における農業という視点でお話を頂いた。私は、経済成長より社会成長を重視する定常経済を追求すべきだと思っている。それに伴い、国や地方自治体、市民社会の協力を得ながら（貧困をなくしていく）連帯経済の最たる取り組み事例を以下に紹介する。

- ①山形県高島町（米沢市）：有機農業・果樹栽培を発達させ農業の多角化・GTの推進など。全国にブランド名を浸透させており、直販の比率が極めて高い取り組みを展開している。
- ②群馬県中之条町 JA 沢田：中山間地を逆手に加工品に特化。農産物6億円、加工品5億円、直売3億円、一村一品運動が定着し、農業自由化にびくともしない構造化に成功している。

③横浜市：福祉の生活共同体が確立。現在1万5千世帯が加入し事業高37億円（2006年）と不況期・介護産業の後退期にめざましい成長。欧米社会でも話題の社会的成長の見本となっている。＊データブック「貧困」西川潤（岩波ブックレット No730.2012.6月）より抜粋
これらは、経済成長より社会成長、生活の質を重視するものであり、定常経済の時代をリードするものであると考えられる。これらが重要視されるようになると、GDP以外の「生活の豊かさを」を測る社会指数が必要になってくる（HDI、BHN、PLIなど）。加藤さんはレジュメの中で「今の時代において資本主義は成立せず、かといって代替の社会システムも見出せていない。バランスを少しでも崩せばギリシャの二の舞になりかねない状況である。そんな中、日本の地方、あるいは農業に次の社会システムのカギが握られているのではないか」と話されていたが、西川先生の事例においてもやはり「農業」や「介護・福祉」分野がイノベーションしやすいと述べられている点について両者は合致していると考ええる。一概に経済成長はダメだということではなく、社会成長や定常経済にも目を向ける必要が今後の日本経済にはあるのではないかと考えている。

4 農業教育における今後のプロジェクト研究領域・視点・キーワード

今の日本は変革期である。時代の流れが猛烈に早いといっても過言ではないと思う。それに伴い農政の変遷、農政の変遷に伴う学習指導要領の改訂は必然である。そのような中において、ここ10年近く農業クラブのプロジェクトに関わってきたが、農業教育におけるプロジェクト研究の今後の研究視点、あるいはキーワードについて私的に思っていることを以下に述べたいと思う。読んで下さる先生方は是非、賛否両論あるいはご批判を賜り今後の議論の対象にして頂ければと思っている。テーマは中央レベルで見ると「地方創生」である。それに伴い、自治体レベルでは「地域再生」に尽きると思う。それに向けた①Innovation,②6次産業化,③再生エネルギーの兼業,④SNSを活用した農業経営,⑤ビジョナリーマーケティング,⑥ブランディング,⑦コンパクトシティー、⑧山村文化と「結い」,以上の8つの視点だと考えている。今までの農業クラブにおけるプロジェクトは地域への普及活動もさることながら、過度な外部評価（〇〇賞を受賞した、〇〇コンテストで全国一になった、海外の学会で発表した等々）を得ることに重点が置かれているプロジェクトも見受けられるため、再度原点に立ち返り、地域や農山村再生の手段を地域と連携しながら地域貢献をするイノベーションを展開していくようなプロジェクトが望ましいのではないかと提言したい。

5 最後に

本研修に関しまして推薦いただいた秋田県教育委員会をはじめ校長先生、学校関係者に深く御礼申し上げます。今後は、この研修の成果を学校内のみならず、秋田県の農業教育から地域産業の振興に至るまで、何らかの形で還元したいと思います。また機会があれば、各種研究発表において情報発信と共有ができればと考えております。ありがとうございました。

今回の研修を通じて、「農業＋α」で時代に即したソーシャルビジネスを創出する生徒あるいは、創造する起業家の育成に尽力していきたいと思っております。

地方創生における農林業の成長産業化に向けた提言 「山村の現局面と森林を活用した地域振興への意向に関する研究」

～学校農業クラブへの導入と、今後の農業高校におけるプロジェクト研究領域に関する一私論として～
岩手大学大学院農学研究科 照内之尋（秋田県立大曲農業高等学校教諭）

Research on the intention to regional promotion by utilizing the current situation and forest of mountain village

Yukihiro TERUUCHI

*Grad.School of Agr.,Iwate Univ. (Omagari-Agriculture high school teacher)

Key word:森林政策,山村経済,森林・林業再生プラン,成長産業化,地域振興

1 本論文の課題と分析視角

本研究は、山村における社会経済問題に焦点を合わせ、山村における重要な資源であり資産でもある森林を活用した林業の再生、もしくは林業という生産活動を通じた地域振興策について考察することにある。高度経済成長期にも山村の過疎化という問題を抱えていたが、低成長期に突入してもなお過疎化の問題は依然として未解決のままとなっており、打開策を見出せていないのが現実である。山村経済では、公共投資が大きな比重を占めていたが、現在は国家財政が窮迫しているため、公共投資が大きく絞られている中において山村は何を基軸に地域経済を発展させ、雇用と所得の機会を創出してゆけばよいのか。やはり「豊富かつ充実している森林資源を活用した森林・林業の振興しかない」¹⁾という分析視角（論）で研究を進めている。一方で、農山村再生論を論じる場合、農山村と都市との関係も大きく変容している状況を踏まえ、農山村を根本的に規定しているのは何かという問いかけなしには、農山村は何を対抗軸に据え、どこが突破口なのかを見いだすことはできないだろうという指摘もある²⁾。

以上を踏まえ、本研究は過疎山村地域の現在直面している現状、すなわち現局面を明確に捉え、さらに森林・林業を基軸とする地域振興、山村振興についての住民意向を把握し、今後の方向展開において考察、注意すべき点について試みるものである。

2 研究調査対象及び手法

北秋田市阿仁地区における代表的な地区を4つ選定し（根子、比立内、荒瀬、打当）、調査票によるアンケート調査を行った。また、各地区における自治会長からの聞き取り調査も並行して行っている。調査項目は①回答者の属性（性別、年齢、職業等）、②生活や町づくりに関する意向、③自然環境（森林）に関する意向、④森林所有者における家産意識や山林の取り扱いに関する意向、の4領域を含む40項目から構成されている。なお、調査票の回収世帯数は124世帯、回収率は43.5%であった。

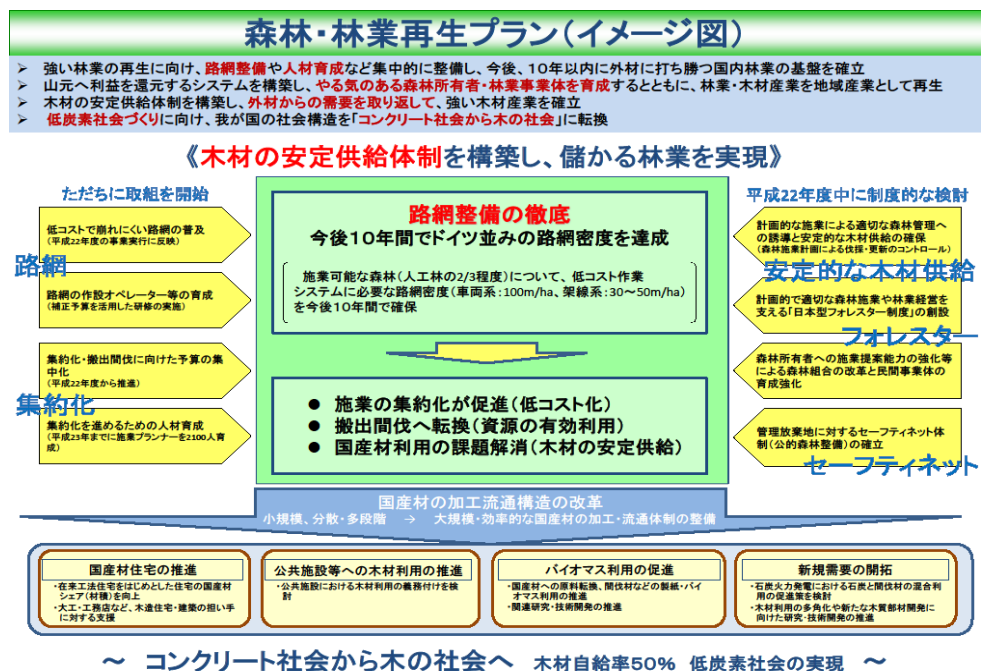
3 農山村を取り巻く今日の特徴

1990年以降は山村をめぐる諸環境が大きく変わった時代である。社会的・経済的状況の変化は1985年のプラザ合意に始まる円高が起点となり、第一次産品の輸入増大により急速なグローバル化の波に山村・農林業がさらされるようになった。さらに1987年～1990年のバブル景気、リゾート開発ブームで農山村の農地・森林も開発対象となり、大手資本や第三セクター等の新たな主体が農山村に出現する時代となる。しかし、直後のバブル崩壊と構造不況により、これらの開発事業は予期せぬ不況に陥りあるいは頓挫し、開発の爪痕だけが残されたと言える。グローバル化と構造的な不況の中で、政策的手段として採用された方針は市場原理の一層の強化であり、競争力を持ちにくい農山村の農林業によってきわめて厳しいものとなっている。

さらに、これからの全国的な人口減少にあっては、より少ない人口で美しい農山村集落を支えていく仕組みづくりが重要な地域政策として求められており、現在、農山村地域政策は大きな転換期を迎えている。

4 森林・林業政策の新展開

林政の展開過程を見ても、戦後の木材生産を中心とする政策から、2001年の森林・林業基本法において林業政策が環境・公益性をより重視する路線に転換している。そして、現在では木材自給率50%を目標としながらも、地球環境や森林生態系とのバランスを重視し、森林経営計画制度を創設した「森林・林業再生プラン」（図1）が2011年より施行、具体化している。その理念・手段として「所有



と経営の分離」を掲げている。私有林を個人の財産として捉えるのではなく、地域の財産・資産として山林を共同管理することで森林の荒廃を防ぎ、森林所有者としての社会的責任を果たすという目的が含まれている。よって、土地所有者の意志の尊重よりも公共性の観点からの土

地利用を目指したシステムであり、今の時代にフィットした画期的政策である。

図1) 森林・林業再生プランの概要(イメージ図) *出所: 林野庁林政部企画課

5 地域文化主体としての阿仁地域

昭和35年の11,339人をピークに人口は年々減少している。その原因は、基幹産業であった阿仁鉱山の閉山によるものと、主要産業である農林業の長期的低迷の2点が挙げられる。一方で、阿仁マタギ文化や郷土芸能等、地域の伝統が脈々と引き継がれてきており、北秋田市では、2009年に「北秋田市歴史文化基本構想」が打ち出され、地域の歴史や文化を保存、利活用しながら町づくりを推進している。まさに地域文化主体としての地域になっている。

森林・林業の現局面を見ると、年齢別では9歳級が面積・蓄積ともに多い構成であり、今後も増加傾向にある。特に民有林における人工林の割合が顕著に増え成熟期を迎えている。保有山林規模別では、5ha未満の林家数が多いものの、5～10haの林家数も100戸以上を維持している。

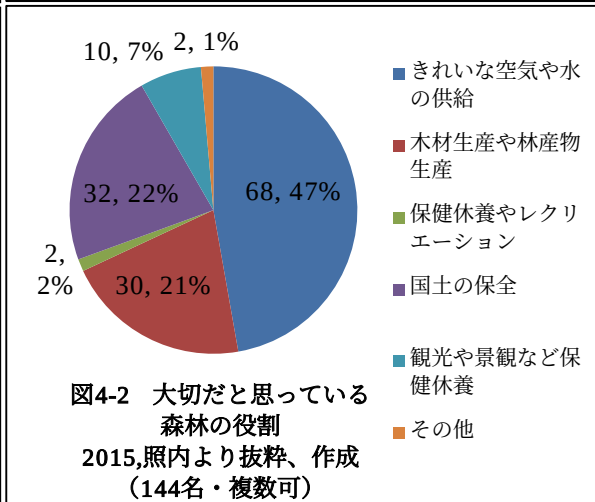
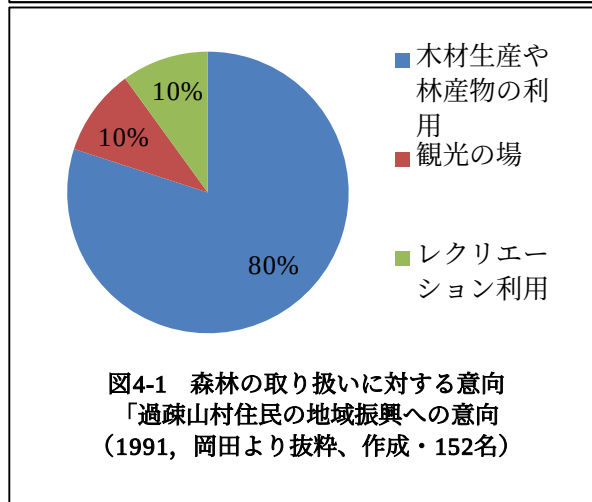
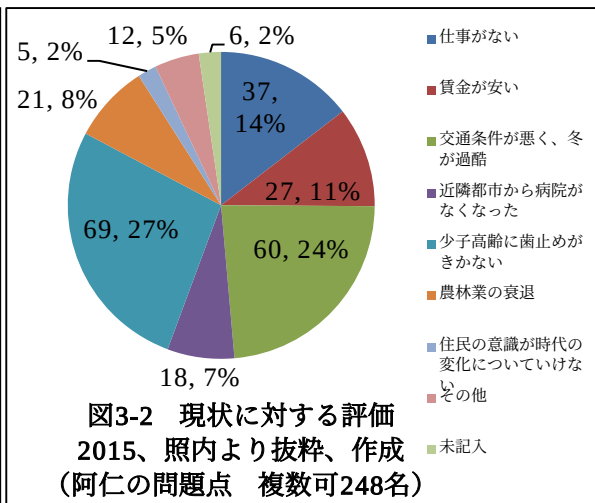
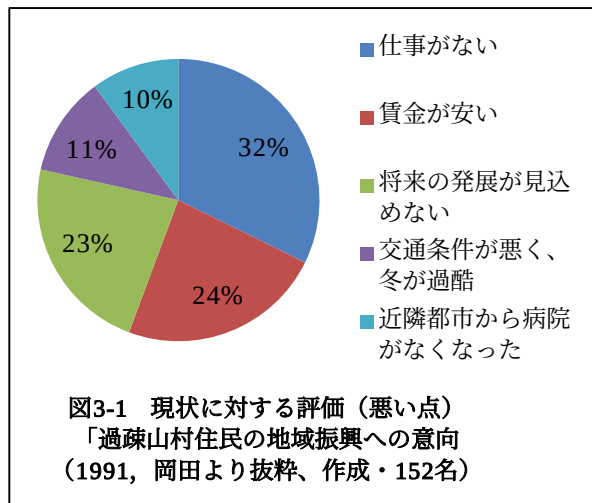
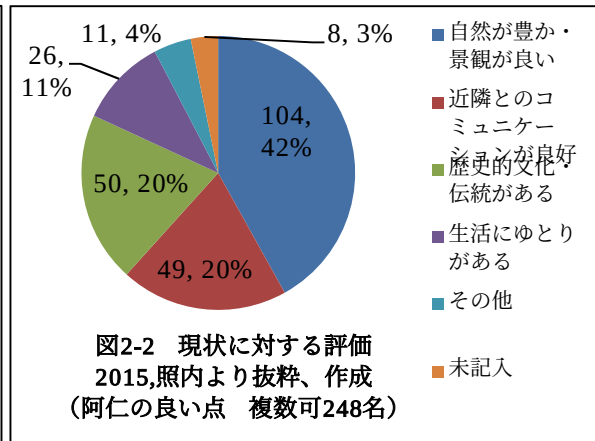
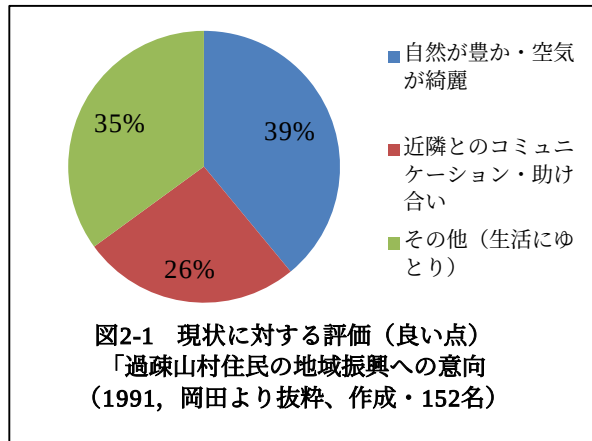
少子高齢化による町の疲弊には耐えられずリゾート開発の波に乗り、外部資本に頼ってきたが、その外資が撤退することで今後はどこに、何を拠り所にすればよいのか多くの住民が手をこまねている。今後も押し寄せてくる人口減少は避けられず、新たな過疎の新展開を迎えている。

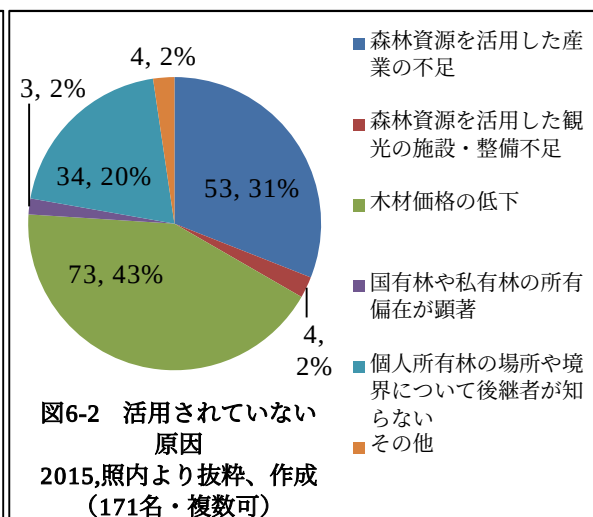
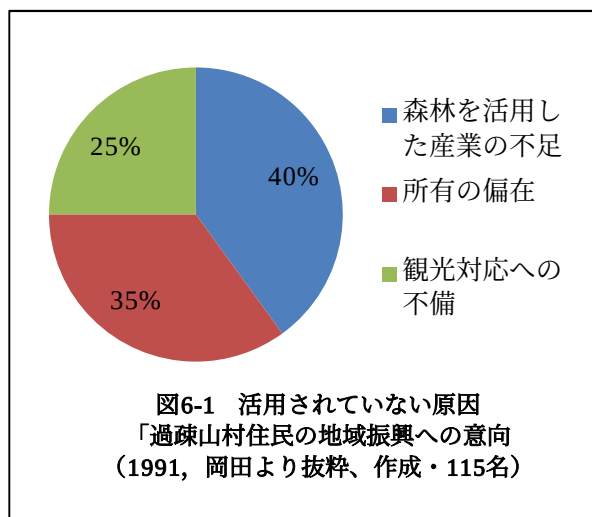
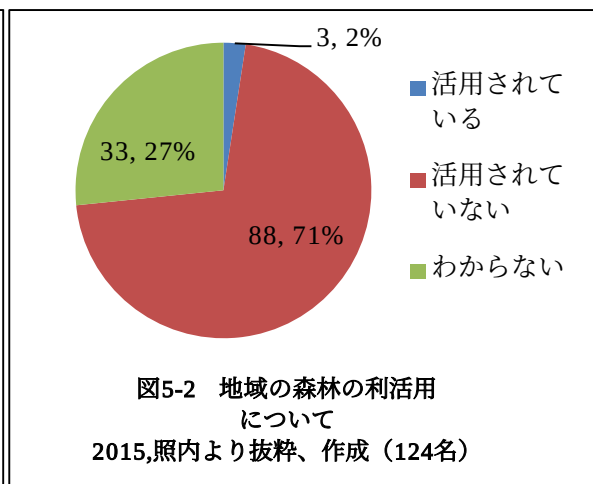
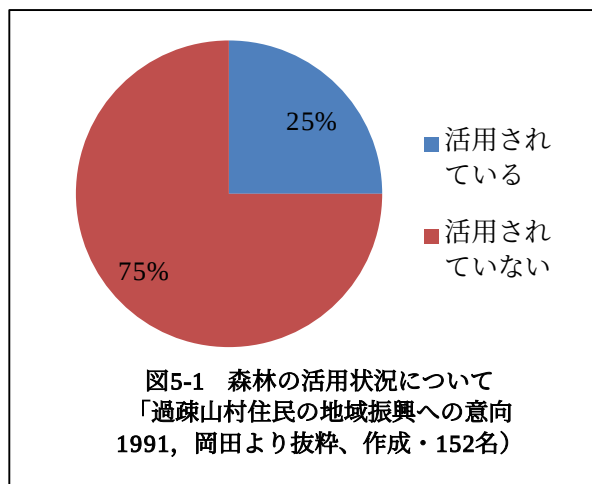
6 岡田(1991)³⁾とのレファレンス(1990年代の阿仁との相違点)

阿仁の現状に対する認識(良い点、悪い点)において、差異は殆ど認められていないが(図2-1,2-2,3-1,3-2)、森林への認識(取り扱い)について、1990年代は「木材生産や林産物生産」との認識が最も高く、「山林、山村と言えば林業」という認識かつイメージが持たれていたが、今回の調査では「きれいな空気や水の供給」という認識が最も高く、この20数年間で、森林の取り扱いについては、木材生産という山村＝林業という認識から、山村＝環境保全としての森林地域という認識にシフトしている(図4-1,4-2)。森林の活用状況についても、1990年代と2010年代で認識に変化はなく、「活用されていない」との認識が根強い(図5-1,5-2)。森林が活用されていないと回答した者を対象にその原因を聞いたところ、「木材価格の低下」が最も多く43%を占め、次いで「森林資源を活用した産業の不足」が31%、「後継者が境界線や山林の場所を知らない」が20%であった。1990年代では、「森林資源を活用した産業の不足」が40%と最も多くみられる結果であった(図6-1,6-2)。また、阿仁がリゾート開発による地域振興に傾斜した影響もあり、1991年の岡田調査では、森林が活用されていない原因に、「観光への対応不備」が25%であったのに対し、本調査では「観光への整備不足」がわずか2%であり、この20年間で森林開発などのリゾート開発による地域振興への意向は縮減されてきたと思われる調査結果が出ている。

以上より、1991年の調査結果と本研究の調査結果を比較からすると、以下の3点が示唆されるので

はないだろうか。①活用されていない根本の要因は、林業・林産業の低迷が原因であること、②木材価格の低下が活用されていない原因であるとの認識が一層強くなっていること、③観光対応に関する住民の認識が非常に減っていることである。





7 考察とまとめ

今後の理想とする阿仁の産業は「農林業を中心とする一次産業」の割合が高く、さらに、阿仁において林業活性化の必要性については「必要である」との認識が高い結果であったことに注目すべきである。また、森林への興味・関心も高く、山林は価値のある資産だという認識が5割を超えていることから、今後の阿仁は、森林・林業を軸にして地域振興を図るべきである。前述した分析視角から見ても、本研究調査において、過疎山村住民からのコンセンサスは得られたと思っている。林業の成長産業化のためにも団地化・集約化をより一層進め、森林経営計画を策定することが重要である。また、森林は個人財産あるいは個人の所有物という枠を超え、地域の財産として共有・管理し、そこで得られた収益は地域で分配することが今後の地域づくりにおいて重要な視点となるであろう。

さらに、現在の生活に対する満足度において、「満足ではない（48%）」が「満足（32%）」を上回る結果となり、今の生活に幸せを感じていない傾向であることが明らかになっている。新しい過疎の時代を迎えるあたり、人口減対策では現に住んでいる地域住民が「いかに幸せに暮らしてゆけるか」という視点が埋もれてはいけないうし、住みやすさや、生きがいなどの割合を指標とし、その向上を数値目標の一つとする点も極めて重要となってくると思われる。

8 農山村再生と「緑の産業革命」⁴⁾を目指して

世界は今、経済・社会・環境の重層する危機を同時に解決し、新しい経済社会の軌道に乗せることを共通の課題としている。「緑の産業革命」への挑戦である。すなわち、世界のコンセプトは「環境を前提とする経済発展」である。

この人類社会の危機段階に各国とも政治、社会、経済の全体システムを転換する経済的枠組みが求められているのである。こうした全体性を持つがゆえに産業革命とよばれている。今は、新たな社会経済の構造と体制構築が求められているのであり、地域の振興に関わる理論や提言も、なお既存の枠組みを前提にしたサブシステムの提案というのであれば、これからの農山村を持続あるものにするこ

とは到底できない。

農山村の振興は、複合する危機からの脱却を図るわが国の新たな社会経済体制づくりの課題と一体のものとして進める中にこそ、その方向制と展望を見なければならない。現段階そして、これからの農山村再生・振興は、農山村に視点を閉じ込めた本質的構造的再生論なき山村集落の解体論に立つのではなく、また、実体経済からかけ離れた金融資本主義の社会を前提に、都市住民の必要性に重点化した農山村論を背景にするものであってはならない。それは、「緑の産業革命」を実現すべく、農山村の持続的発展とわが国の低炭素循環型社会形成を同時に追求する政策構想と政策実現を基軸に進めなければならない。これこそが「森林化社会」にむけた政策提言である。

参考及び引用文献一覧

- 1) 岡田秀二『森林・林業再生プランを読み解く』日本林業調査会（2012.7）34 頁
- 2) 伊藤幸男(書評)岡本雅美監修 寺西、井上、山下編「自立と連携の農村再生論」林業経済 Vol68（2015.9）22 頁
- 3) 岡田秀二・佐藤千恵子「過疎山村住民の地域振興への意向（秋田県阿仁町）」日本林学会東北支部会誌 No43（1991.12）1-2 頁
- 4) 岡田秀二「農山村再生新時代」月刊地域づくり（2014.7）4-5 頁

インターハイ・国体を終えて

自転車競技部 藤井 亨

インターハイ ～2015君が創る近畿総体～



大会期間：平成27年8月6日～10日
トラックレース：大阪府岸和田競輪場
ロードレース：三重県鈴鹿市鈴鹿サーキット

今年度のインターハイはトラックが平成18年以来の岸和田競輪場、ロードが平成22年以来の鈴鹿サーキットということで、近年にインターハイが開催された会場で行われた。

3年生は春から調子が不安定であり、インターハイが近づいても調子が上がらなかった。一方2年生は思い切った走りで自分の持つ力を出し切れていた。インターハイ最初の種目であるチームスプリントは1分19秒台を目標としたが、後半で大幅に失速し残念な結果となり、チームに勢いがつかなかった。その後に行われた個人種目はチームスプリントの結果を引きずる形で厳しい戦いであった。

これまでにない厳しい練習に対して熱心に取り組んできたにもかかわらず入賞できずに終わってしまった。来年度のインターハイは美郷町自転車競技場と同じ333mで行われる。今回出場できなかった選手にもしっかり取り組んでもらい、今度こそは一人でも多くの選手が表彰台に上がって欲しい。

▽チームスプリント	14位	大曲農（熊谷、後藤、田口）1分22秒310
▽4km速度競走予選		田口優斗（2A）＝途中棄権
▽スクラッチ決勝	13位	長澤聖晴（3B）
▽スプリント予選	16位	後藤龍斗（2A）11秒399
▽1kmタイムトライアル	29位	熊谷美空（3C）1分11秒371
▽個人ロードレース	92位	照井敦也（3A）2時間35分46秒8（104.58km）

国民体育大会 ～2015紀の国わかやま国体～



大会期間：平成27年9月27日～30日
トラックレース：和歌山県和歌山競輪場
ロードレース：和歌山県黒潮フルーツライン

今年度の国体は和歌山県で行われ、少年選手として本校から5名中5名が選出され出場した。

団体種目では、チームスプリントに熊谷・田口、団体追い抜きには長澤が出場。大学生との混走であったが、大学生を上回るほどの走りであった。特にチームスプリントは高校生主体ながら目標を達成することができた。

個人種目には5名出場した。入賞の期待がかかったが、不運な面もあり、厳しい戦いに終わった。

秋田県チームとしても二年連続入賞0に終わってしまった。来年の岩手国体は、ほぼホームといえる会場で行われる。現1・2年生6名の中には、全国で十分通用すると思われる選手もあり、今後の練習次第では上位入賞も可能である。強化拠点校として指定され多大なる支援を受けて今年度から二期目に入った。強化拠点校の目標とする全国ベスト4以上に向けて、更なる強化に努めたい。

▽少年個人ロードレース		安藤爽真（3S）長澤聖晴（3B）＝途中棄権
▽男子4km団体追い抜き予選	36位	秋田（成年3名、長澤）4分50秒596
▽男子チームスプリント予選	18位	秋田（成年1名、熊谷、田口）1分19秒944
▽少年スプリント予選	24位	後藤龍斗（2A）12秒122
▽少年1kmタイムトライアル	26位	熊谷美空（3C）1分11秒658
▽少年ケイリン2回戦	6位	長澤聖晴（3B）＝落選
▽少年ポイントレース予選	13位	安藤爽真（3S）3点＝落選
▽少年4km速度競走予選	7位	田口優斗（2A）＝落選

成長の跡

柔道部監督 石戸 将太

大会名 : 平成27年度全国高等学校総合体育大会 (近畿総体)

第64回全国高等学校柔道大会

大会期間: 平成27年8月8日 (土) ~ 12 (水)

大会会場: 奈良県天理市 天理大学杣之内第一体育館

出場者 : 3年B組 山崎 瞳

今年の近畿総体に、柔道部からは女子個人で山崎瞳が出場した。昨年に続いて2度目の出場である。昨年は実力不足が明らかで何もできず敗退した。今年も全国舞台で通用するにはまだまだの実力ではあるが、全国出場にかける意欲には格段の違いが感じられた。現に、全県総体の決勝戦はプレッシャーに負けず攻めきって、良い試合内容で全国行きを決めることができた。

インターハイ決定後は、そこまでにある試合をすべてインターハイ本番に向けた経験を積む場と位置づけ、対戦相手や試合のレベルに応じて、勝利よりも「ねらい通りの試合をすること」をテーマに臨んだ。なおかつ、練習では自分より「強者」と対戦することを想定して、それでも先手をとって組んだり、攻めたりすることを、気持ちの面も含めて強化していった。そして、何大会か経て、試合ぶりは落ち着きつつある状態でインターハイを迎えた。

初戦の相手は、岡山、創志学園の選手であった。最近、全国から有力選手が集まり、系列大学とともに強化を進めている強豪校である。攻略できないほどの選手ではないと見込んだが、こちらよりは上である。練習の成果を発揮し、粘り強く戦うことが勝利のカギになると思った。しかし、結果は一本負けで初戦敗退した。狙い通りの組み手をして相手の動きを抑え、良い出だしではあったが、1分過ぎ、その組み手を突破しての攻めを繰り返されてその後は打つ手なしになってしまった。残念ではあるが、自分の動きを発揮しての敗退は悔いの残るものではなかったと思う。なにより、現地入りしてからの最終練習の態度、宿舎での過ごし方、当日のアップや試合前の様子などは、昨年と比べ確実に成長を感じた。前期入試での入学とはいえ、専門家からみれば心技体ともに素人レベルであった生徒が、全国という舞台で成長の跡をみせてくれたのはうれしかった。

秋田県の高校女子柔道は、部員数も減少の一途をたどり、全国的にみて高いレベルとはいえない。今回出場の山崎も、県内では狙い目の階級を勝ち上がっての出場であり、予選の熾烈な強豪県の選手にまざって全国舞台で活躍するのは無理と感じていた。だが、今回の成長ぶりをみるにつけ、全国に近いということをモチベーションにして、もっと全国を見据えた強化をすれば対抗しようという手応えを感じた。今後の指導に役立てたい。

平成27年度全国高等学校総合体育大会に出場して

女子ハンドボール部

顧問 山 本 力

期日：平成27年8月2日～7日

場所：大阪府堺市立初芝体育館

今年度の全国高校総体は秋田県予選を苦しみながら勝ち抜いての出場となった。対戦相手は春の選抜大会で大差で敗れた九州の大分高校との再選となった。選抜大会では大農らしいゲームが一切できずに悔しい思いをした。対戦相手が選抜大会と同じ相手となり、何を強化すれば勝てるのか模索した。

相手にも大農の情報があるために、前半から違った展開を使えば策をとられると考えた。そのため、前半はいつもと同じ展開をし極力点差を広げられないようにする試合運びを試みた。しかし、相手は試合巧者で多彩な攻撃と足を使ったディフェンスをしかけ、前半が終わってみれば12対18の6点差で折り返した。

後半は互角の展開のまま試合が流れて、10分過ぎにディフェンスを積極的に出るパターンに切り替えた。その結果、本来の持ち味である得意の速攻が出始めた。点差が徐々に詰まる中、時間も終了間際となり、同点に追いつくシュートが決まったかに見えたものの、審判の笛に戻されて得点にはならなかった。逆に相手に1点を追加され、接戦の展開に持ち込んだ所までは良かったが2点差で敗れた。

「次は大分高校に絶対勝つ」その目標だけを胸に練習してきたため、試合後の選手たちは自然と涙があふれた。僅差での負けは監督の技量の無さに過ぎないが、勝たせたかった試合だった。

春の選抜大会出場時は九州の1位チームだったが、同じ相手に対して怯むことなく立ち向かっていった選手たちを心から誇りに思う。選手14名中経験者が1人という中でよく頑張ってくれたと思う。「これが大農で戦う最後の試合」その意味を最後まで胸に刻んで戦ってくれたことに感謝したい。

近畿インターハイを振り返って

相撲部 小林和成

平成27年度全国高等学校総合体育大会相撲競技、第93回全国高等学校相撲選手権大会は7月28日から30日まで兵庫県洲本市文化体育館にて開催されました。

大会初日の28日は開会式後の個人予選に本校から千葉隆宏（3年）が出場。本校の大黒柱である千葉は東北大会で痛めた左ヒザに不安を抱えながらの予選でした。1回戦では中途半端な取り口で敗れましたが、これで吹っ切れて自分の相撲に迷いなくなり2、3回戦を連勝し2勝1敗で予選通過をきめた。個人予選終了後に行われる団体予選1回戦で本校は昨年のインターハイで苦杯を舐めた文徳高校（熊本県）との対戦であった。本校の布陣は先鋒千葉、二陣庄司、中堅鶴谷、副将高橋、大将久米、交代に後藤で挑む。今年の文徳は6月の九州大会で優勝しており格上であることは間違いないので選手たちには試合前の円陣で「勝敗は後回しで迷いなく元気に自分の相撲取れ」と伝え送り出しました。

先鋒千葉、大将久米が敗れたものの、二陣戦で庄司が川副（全国中学2位）に攻め込まれるも思い切りよく体を開いて突き落として1点、中堅鶴谷は立ち合いから自分の形を譲らずジリジリと相手を土俵際に追い詰めて寄り倒し2点、副将高橋は昨年のIHで未勝利だった雪辱を胸に上がった、しっかり踏み込み得意の右上手を引くと力強く相手を寄り倒し本校の勝利を決めた。昨年の対戦で敗れた2年生3人が予選通過に大きな勝利をもたらしてくれた。

大会2日、団体予選2回戦の相手は北部農林高校（沖縄県）。本校は昨日の勢いそのままにこの試合を5-0で勝利し予選通過を確実のものとした。続く3回戦は近大附属（大阪府）、昨年のインターハイ準優勝校。強豪相手に委縮してしまい0-5と完敗してしまったが2勝8点で決勝トーナメントに進出が決まった。

団体予選終了後の個人決勝トーナメントでは千葉が1回戦で八幡（新潟海洋）を押し出し優秀32選手、2回戦で鎌谷（埼玉栄、父が元関脇琴乃若、祖父が元横綱琴桜）を押し倒してベスト16、3回戦では榎波（福井、奥越明成）に引き落とされて敗れ入賞に一步及ばなかったが実力を存分に出してくれた。

大会最終日、団体決勝トーナメント1回戦の相手は諫早農業（長崎県）、先鋒の千葉が冷静な取り口で相手を寄り倒し1点、二陣庄司は立ち合いで自分得意の形になり土俵際に寄りたてたが相手の苦し紛れの下手投げにバランスを崩しながらも寄り倒し庄司に軍配が上がったが副審より異議申し立てがあり競技の結果、庄司の足がわずかに先に土俵を割っていたとの判定で軍配差し違いで敗れた。中堅鶴谷は二陣戦の動揺し、地に足付かずの状態になり軽量の相手に翻弄され成す術なく敗れ2点目を献上。副将高橋がここで意地を見せた。立ち合いで自身の不得手な形になったものの焦らずに対処し得意の上手を引くと土俵中央で相手をきれいに転がし2-2のタイに持ち込んでくれた。2回戦進出が懸かる大将戦、1年の久米は立ち合いから持ち前のスピードで185cm130kgの大きな相手を一気に押し込んだものの相手も俵に足をかけて必死に残し久米の上体が伸びたところを突き落とされ無念ながらインターハイを終えることとなった。

試合後の控室で泣きじゃくる1，2年生に3年千葉、後藤が自身の感情を押し殺して声を掛け、肩を叩いてくれていた。

3年生の人間的な成長を目の当たりにして胸が熱くなったのを覚えています。

期待された結果とはなりませんでした。が本校選手はここから立ちあがって努力を形にしてくれると思っています。

今年度は県内大会を平成10年以来完全優勝することができました。来年度は創部以来初の総体3連覇を第一目標に頑張ります。今後も相撲部に対して温かい応援よろしくお願い致します。

インターハイ・国体を終えて

なぎなた部顧問 古瀬利彦

2015 君が創る 近畿総体

大会期間：平成27年7月29日～31日

大会会場：大阪府立体育会館

出場者：個人 荒川映美(3年)

演技 荒川映美(3年)・鈴木有沙(3年) 組

2015 紀の国 わかやま国体(第70回国民体育大会)

大会期間：平成27年9月27日～29日

大会会場：九度山文化スポーツセンター

出場者：団体・演技 3年 荒川映美(3年)

今年のインターハイには個人1名(荒川映美)と演技1組(荒川映美・鈴木有沙組)が出場した。団体は東北選手権で優勝したものの、それ以前に全県総体で大曲高校に負けていたためインターハイには出場できなかった。

演技に出場した荒川・鈴木組は、予選リーグを1勝0敗で抜けて決勝トーナメントに進出した。決勝トーナメント1回戦は岐阜県の大垣商業高校に5-0で勝ち、2回戦は福島のザベリオ高校に3-2で勝ち、3回戦で東京都の文化学園大学杉並高等学校に0-5で負けた。結果として5位という結果だった。翌日のさきがけ新聞に顔写真と共に試合結果が掲載された。見出しは「1年からペア、息ぴたり」だった。一方、この杉並高校のペアの記事がネットに載り、「私たちは小学生からペアを組んでいるので息がぴたりです。」というような優勝ペアのコメントがついていた。勝敗の裏にはそれ相応のものがあるんだと感じた。同時に、他県では小学校や中学校からのなぎなた経験者が多い中で、高校から始めた2人が5位に入ったということは、3年間で人の何倍も努力をしてきた証しだと感じた。

東北総体(ミニ国体)では、秋田県少年女子チームが出場枠ぎりぎりの4位に入り、わかやま国体の出場権を得た。国体では、先鋒は黒澤(大曲)・次鋒は矢野(大曲)、大將は荒川(大農)というオーダーだった。1回戦は岐阜県に3-0で勝ち、2回戦も三重県に3-0で勝ったが、準々決勝で優勝した香川県に0-3で負けた。その後、5～8位決定戦で大分県に0-3で負け、7、8位決定戦も愛知県に0-3で負け、結果として8位入賞となった。また、国体の演技は団体メンバーでペアを組むことになっているため、荒川(大農)・矢野(大曲)で出場したが、1試合目で宮城県に負けた。

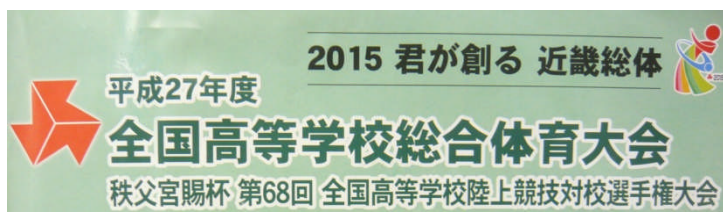
荒川と鈴木は引退後も、進路活動の合間を縫って1、2年生の指導に当たっており、自分たちが先輩から受けた恩を後輩に返している。試合結果だけでなく、練習に向かう姿勢や目上の人とのコミュニケーションの取り方など、後輩に多くのことを残してくれたと感じている。



インターハイ控え室にて
(森監督(右端)と演技5位の
賞状を持って)

全国高校総体に出場して

陸上競技部顧問 齋藤 羽純



大会期日：平成 27 年 7 月 30 日
大会会場：紀三井寺公園陸上競技場
出場種目：男子 400MH
出場選手：伊藤琢真(3B)

昨年、1つ上の先輩である千葉康平がインターハイ出場を果たし、伊藤琢真はそのサポート役として入学当初から目標としてきたインターハイの舞台を見ることができた。康平は結果を残すことができて悔しい思いをした。その時、琢真が康平と交わしたのが、“自分も必ずこの舞台で勝負する”という約束であった。

3年生になり、県南総体、全県総体ともに優勝し東北総体への出場を決めた。全県総体でのタイムは54秒63。インターハイに出場するためには53秒台に入らなければいけない。そのことを頭に入れ、東北総体までの限られた期間、調整を行った。東北総体は福島県で行われた。調子も上がっていたため、予選は余裕を持って通過した。準決勝は8台目のハードルに足を引っかけて転びそうになりひやひやしたが、プラスで決勝進出を決めた。決勝では53秒09という想像以上の記録を出し、インターハイへの出場権を得ることができた。康平との約束、そして入学当初からの夢を叶えるチャンスを得ることができた。

和歌山は気温が高いのに加えて湿度も高く、ベストな体調を維持するのが難しい環境であった。調子は悪くはなかったが、暑さ、そして大舞台での緊張からか動きが悪くなってしまった。結果は55秒08で組4位。準決勝に進むことはできなかった。晴れの舞台で力を十二分に発揮させることができなかったことが悔やまれる。心技体、そして環境への対応力など備えるべきことがたくさんあり、どれも欠けてはいけない。インターハイで勝負することの難しさを痛感した。しかし、結果は伴わなかったが、琢真は日々努力を重ね、ひたむきに競技と向き合い最後まであきらめなかった。そういった姿勢で臨むことが目標を達成するために大事なことであるということを改めて実感した。その姿を見てきた後輩達は、自分たちの目標達成に向け日々陸上競技と向き合うことができている。チームに良い影響を与えてくれ、指導者である私にも様々なことを教えてくれた琢真に感謝している。また、沢山の方々の支えがあったからこそインターハイに出場することができた。支えてくださった方々にも本当に感謝している。学んだことを今後を活かし、一人でも多くの選手を全国の舞台で勝負させることができるよう精進していきたい。

最後に、インターハイの応援ありがとうございました。これからも陸上競技部をよろしく願います。



6 學習指導案

家庭科（ 家庭基礎 ）学習指導案

日 時：平成 27 年 6 月 2 日（火）3 校時
 対 象：生物工学科 1 年 S 組 35 名
 指 導 者：風登 友美

1 題材名 家族・家庭を見つめる

2 題材の目標

- (1) 結婚、家族・家庭の形、その役割について、興味・関心を持とうとしている（関心・意欲・態度）
- (2) 自分や家族・家庭、地域の生活にかかわる課題を見つけ、課題解決のため工夫したり創造したりし、自分の考えをまとめ、判断できる。（思考・判断・表現）
- (3) 自分・家庭や地域社会の生活に関する必要な情報を収集、整理することができる。（技能）
- (4) 自分や家族・家庭、地域社会の役割を理解し、生活の充実向上にむけて必要な基礎的・基本的な知識を身につけている。（知識・理解）

3 題材と生徒

(1) 題材観

中学校段階では自分の成長と家族や家庭生活との関わりを学習しているが、生涯を見通して、家族・家庭を築いていくことに関しては深く学習していない。そこで本題材では、家族の一員としての役割を果たし男女が協力して家庭を築くことの意義や、生活課題を主体的に解決して家庭や地域の生活をつくるとともに、ともに支え合う社会の重要性について認識させたい。

(2) 生徒観

発言は少なく大人しいが、課題には真面目に取り組み、考えを深めることができる。自分を取り巻く家族・家庭についての関心は高いものの、各ライフステージにおける家族・家庭に関する課題や家庭と地域、社会とのつながりを意識して生活している生徒は少ない。

(3) 指導観

現在の家族・家庭がどのように形成され、どのように変わっていくのかを時間軸を追って考えさせていき、それに応じてどのような課題があるのかを追求させる。また、多様なライフスタイルによるいろいろな家族・家庭の在り方について、それぞれの考えや価値観を共有、吟味させていきたい。

4 単元の指導と評価の計画

次	学習内容 (時数)	評価規準			
		関心・意欲・態度 (ア)	思考・判断・表現 (イ)	技能 (ウ)	知識・理解 (エ)
1	多様なライフスタイルを考える (3)	①家族・家庭の形、家族・家庭の役割について、自分とどうかかわっているのか、興味・関心をもとうとしている。	①各ライフステージの特徴と課題について知り、自分の生活や将来について考えを表現することができる		
2	家族・家庭について知る。 (本時 2 / 3)		②社会の中の家族・家庭の役割について具体的に考え、発表している		①家族に関する法律についての知識を身につけている。
3	これからの家庭生活と社会を考える (4)		③図表を見て現在の家族・家庭のあり方や役割について考え、表現することができる。	①家庭と地域との関わりに関する事例や課題などについて、情報を収集・整理することが出来る。	②生活に関わる労働の意義、現在の労働環境などについて理解している。

5 本時の計画

(1) 本時のねらい 社会の中の家族・家庭の役割を具体的に考えることができる。

(2) 展開

段階	学習活動		指導上の留意点 (教師の支援)	評価(方法)
導入 5分	自分の世帯構成を挙げ、自分にとって、家族・家庭はどのような存在か挙げる。		・前時の学習から、自分の家の世帯構成を挙げさせる。	
展開 38分	(13分)	(1) 資料から、世帯規模が縮小した背景を知る。 [個]	・教科書(p20)のグラフ①・②を見て産業構造の変化と関連づけて説明する。	
	(5分)	(2) 家庭の機能が外部へ移されてきていること(家庭の機能の社会化)を知る。 [個]	・(1)の背景から、家庭の機能を代行するサービスが増加していることを知らせ、家庭の機能の社会化について説明する。 ・社会化された機能にはどのようなものがあるか考えさせる。	
	(20分)	(3) 社会の中の家族・家庭の役割を考える。 [個→グループ]	発問：家庭の機能の社会化が進む中で、家族・家庭の役割について考えよう。 ・家庭の機能の社会化が進む中で、家族・家庭の役割はどのようなものがあるのか、家族・家庭で受け持つべき機能を考えさせる。考えをシートと付箋に書かせる。 ・悩んでいる生徒にはヒントを与える。 ・3～4人のグループになり、自分の意見を書いた付箋を出し合い、似た意見同士をグルーピングし、表題を付けてまとめさせる。 ・グループで出た意見を発表させる。 ・家庭の機能の社会化の中で、家庭にしか出来ない機能(人間の生命を生み育てる機能)があることを知らせる。	
整理 7分	(1) 社会の中の家族・家庭の役割について要点をまとめる。 (2) 本時を振り返り、自己評価をする。		・生徒の発表からキーワードをあげ、まとめさせる。	(イ)－①社会の中の家族・家庭の役割について具体的に考え、発表している。(シート・発表)

NO.5	第1章 自分らしい人生をつくる 5 家族・家庭を見つめる (2) 社会の中の家族・家庭	家庭基礎 (東京書籍)
------	--	------------------------------

学習目標：社会の中の家族・家庭の役割を具体的に考えることができる。

◆あなたの家の世帯構成は？また、あなたにとって家族・家庭とはどのような存在ですか。

世帯構成:	家族・家庭はどのような存在？:
-------	-----------------

○世帯構成と規模の変化

・以下の問いについて、教科書p20のグラフ①・②を見て、答えましょう。

1) グラフ①「一般世帯における家族構成の割合」で年々大きく増加している世帯→「」

どのようなことが言えるか:

2) グラフ②「産業構造の変化」で減少している産業→「」、増加している産業→「」

どのようなことが言えるか:

3) 以上から () と () とが相互に関連している。

○家庭の機能の変化

産業の発展によって、物資の生産は工場に取って代われ、家庭における「生産の機能」は外部へ移行
→『』

◆昔は家庭で行われていた機能で、社会が行うようになった機能にはどのようなものがあるだろうか。キーワードを参考に挙げてみよう

[キーワード:衣食住、教育、医療、福祉、治安、娯楽]

◆家庭の機能の社会化が進む中で、家族・家庭の役割にはどのようなことがあるだろうか。考えよう [グループ活動]
[ヒント:社会が受け持つことが出来ない機能・役割＝家族・家庭の役割]

自分の考え	みんなの考え (発表から)

※社会に移行できない機能→ ()

◎社会の中の家族・家庭の役割について考えたこと、思ったことを書きましょう。

社会の中の家族・家庭の役割を具体的に考えることができた。(できた ・ まあまあ ・ まだまだ)

家庭科（ 家庭総合 ）学習指導案

日 時：平成 27 年 9 月 29 日（火）3 校時

対 象：生活科学科 1 年 35 名

指 導 者：風登 友美

1 題材名 生涯の健康を見通した食事計画

2 題材の目標

各ライフステージにおける食事の特徴を踏まえ、家族にあった献立を考えることができる。また、食品選択や調理法について、基本的知識と技術を身に付ける。

3 題材と生徒

（1）題材観

中学時の学習では中学生の食生活と栄養の特徴について学習しているが、各ライフステージにおける食生活の特徴に関しては深く学習していない。そこで本題材では、各ライフステージの食生活の特徴を理解させ、生涯を見通した食生活の管理について理解させたい。また、調理実習を通して食生活の自立に必要な知識と技術を習得し、主体的に食生活を営むことができるようにする。

（2）生徒観

課題に真面目に取り組むことができ、考えを深めていくことができる。食生活に関しては興味を持っている生徒が多いが、食生活全般を自ら管理する機会は少ない。本題材では、自分の食事や家族の食事に関心を深めさせるとともに、食生活の自立に必要な知識と技術を習得させ、生涯において自分や家族の食生活を管理し営む力を身に付けさせたい。

（3）指導観

調べ学習やグループワークを通して、自分の食事や家族の食生活に関心を持たせ、各ライフステージの食生活の特徴を踏まえて、生涯を見通した食生活の管理について理解させたい。また、調理実習を通して、食材の特徴や調理法について理解させるとともに、食生活の自立に必要な技術を身に付けさせたい。

5 単元の指導と評価の計画

次	学習内容 (時数)	評価規準			
		関心・意欲・態度 (ア)	思考・判断・表現 (イ)	技能 (ウ)	知識・理解 (エ)
1	食事計画 (本時 1 / 2)		①各ライフステージの食事の特徴を踏まえ、家族にあった献立について考えをまとめたり、発表したりできる。	①食品群別摂取量のめやすを活用し、経済・能率、家族の嗜好などを考慮した 1 日の献立の作成ができる。	
2	調理の基礎 (7)	①調理実習において、積極的に参加し、とりくもうとしている。		②食品選択や調理法について、基本的知識と技術を身に付けている。	
3	これからの食生活 (4)				①食品の生産や流通・販売の多様化、食糧自給率の低下などにより、食生活を取り巻く環境が変化している現状を理解する。

6 本時の計画

(1) 本時のねらい 高齢期の特徴に合わせた調理の工夫を考え、まとめることができる。

(思考・判断・表現)

(2) 展開

段階	学習活動	指導上の留意点 (教師の支援)	評価(方法)
導入 8分	・事前に祖父母や身近な高齢者の嗜好や食事に関する加齢による症状を調べ、発表する。[個]	・事前に祖父母や身近な高齢者に嗜好や食事に関する加齢による症状などを調査させておく。 ・調査したことを数人に発表させる。	
展開 37分	7分	・高齢期の食事に関する身体の特徴をまとめる。[個]	発問：用意された献立を高齢者向けにするためにどのような調理の工夫が考えられますか。 ・(イ)高齢期の食事の特徴に合った献立の工夫を考え、まとめたり、発表したりしている。 (シート、発表)
	20分	・高齢期の食事の特徴を踏まえ、あらかじめ用意された献立の調理法の工夫を考える。 [個→グループ] ・模造紙に献立の写真を貼り、工夫点をまとめる。 [グループ]	
	10分	・6～5人グループになるよう指示する。 ・献立の写真が入った箱と模造紙を各グループに配布する。 ・対象となる高齢者のケースを設定させる。 ・事前調査や高齢期の食事の特徴を踏まえて、献立の調理法(切り方、加熱方法、味付けなど)の工夫を個人で考え、付箋に書くよう指示する。 ・献立の写真を模造紙に貼らせ、考えた工夫点をグループ内で発表させ、まとめさせる。 ・まとめた工夫点に他者に分かりやすく伝えるようタイトルをつけ、模造紙に書かせる。	
	10分	・グループで出た工夫点を発表する。[全体] ・グループごとに前に出させ、まとめた工夫点を発表させる。	
整理 5分	・本時のまとめをする。[個]		

NO. 1 1

 第6章 豊かな食生活をつくる
 3 献立づくりと調理 (2) 食事計画

 家庭基礎
 (東京書籍)

学習目標：高齢期の特徴に合わせた献立の工夫を考え、まとめることができる。

1) 祖父母や身近な高齢者に食事における嗜好や加齢による症状について調査したことをまとめてみよう。

食事の嗜好	加齢による症状 (食事に関すること)

2) 高齢期の食事の特徴

TRY 事前調査や高齢期の食事の特徴から高齢者のケースを設定し、ある日の夕食の献立について調理法の工夫で高齢者向きにするための方法を考えてよう。

※調理法の工夫…切り方、加熱方法、味付けの仕方など



() さんのケース

※でも！できるだけ母の手を煩わせたくない！家族と同じものが食べたい！

1箇所のみ献立を変えてもOK！

	献立 (夕食)	どのように工夫するか	他グループの考え (発表から)
主菜			
副菜			
主食			
汁物			
その他の工夫			

◎高齢期の食事の特徴を踏まえた献立を考えてみて、感じたことや思ったことを書きましょう。

高齢期の食事の特徴にあった献立を考え、まとめることができたか。(できた・まあまあ・もう少し)

	献立	使用食品	1群		2群		3群			4群		
			乳製品	乳・卵	魚介・肉	豆製品	豆・野菜	いも類	果物	穀類	砂糖	油脂
朝食	・ごはん	精白米								80		
	・塩鮭	鮭			60							
	・納豆	納豆				40						
	・もやしとニラの和え物	もやし にら					30 20					
	・なすとしめじの味噌汁	豆腐 なす しめじ				10	10 5					
	朝食の合計		0	0	60	50	65	0	0	80	0	0
昼食	・ごはん	精白米								80		
	・目玉焼き	卵		50								
	・野菜炒め	きゃべつ ピーマン にんじん 油					40 30 20					4
	・わかめスープ	わかめ(乾燥) ねぎ					2 8					
	昼食の合計		0	50	0	0	100	0	0	80	0	4
	間食	・牛乳	牛乳	200								
・リンゴの甘煮		リンゴ 砂糖							150		10	
間食の合計		200	0	0	0	0	0	150	0	10	0	
夕食	・栗ごはん（主食）	精白米 栗								80 20		
	・肉じゃが（主菜）	豚肩肉 じゃがいも 人参 いんげん			50			100				
	・水菜と大根のサラダ（副菜）	水菜 大根					25 30					
	・長ネギと油揚げの味噌汁（汁物）	長ネギ 油揚げ 豆腐				10 10	25					
	（献立の変更があれば書く）											
	夕食の合計		0	0	50	20	110	100	0	100	0	0
	※献立を変更した場合の夕食の合計									260		
1日の合計			200	50	110	70	285	100	150	260	10	4

*参考

70歳以上の1人1日の摂取量の目安 （身体活動レベルⅡ）	男	250	50	120	80	350	100	200	320	20	10
	女	250	50	100	80	350	100	200	220	15	10

1年 組 番 氏名

事前調査：祖父母や身近な高齢者の食事における嗜好や加齢による症状について調査しよう。

食事の嗜好	加齢による症状（食事に関すること）
例）濃いめ（薄め）の味付けが好みだ、〇〇なメニューは苦手だ など	例）昔と比べて〇〇が悪くなった など

1年 組 番 氏名

事前調査：祖父母や身近な高齢者の食事における嗜好や加齢による症状について調査しよう。

食事の嗜好	加齢による症状（食事に関すること）
例）濃いめ（薄め）の味付けが好みだ、〇〇なメニューは苦手だ など	例）昔と比べて〇〇が悪くなった など

家庭科（ 家庭総合 ）学習指導案

日 時：平成27年11月16日（月）2校時
 対 象：生活科学科2年 35名
 指 導 者：風登 友美

1 題材名 親として共に育つ

2 題材の目標

子どもの発達と生活、子育て支援、子どもの権利と福祉などについて理解させ、子どもを生み育てることの意義や子どもとかわるくわりの重要性について考えさせる。

3 題材と生徒

（1）題材観

中学時の学習では子どもの心身の発達や幼児とのかかわり方などについて学習しているが、子どもを生み育てることの意義や親の役割に関しては詳しく取り扱っていない。そこで本題材では、子どもの発達と生活、子育て支援、子どもの権利と福祉などについて理解させ、子どもの健やかな発達を支える親の役割と保育の重要性や社会の果たす役割について認識させる。

（2）生徒観

女性35名で発言が多く元気なクラスである。保育に興味を持っている生徒が多いものの、子どもと接する機会が少ないのが現状である。本題材では、親や保育者になる上で、親の役割と保育の重要性を理解させ、子育て世代を支える社会の役割について認識させたい。

（3）指導観

調べ学習やグループワークを通して乳幼児期の親や家族のかかわり方、また家庭環境が果たす役割の重要性について理解させたい。また、少子社会における子どもを取り巻く環境を整備し、子育てを支援していくことが必要であることを認識させたい。

4 題材の指導と評価の計画

次	学習内容 (時数)	評価規準			
		関心・意欲・態度 (ア)	思考・判断・表現 (イ)	技能 (ウ)	知識・理解 (エ)
1	子どもの育つ力を知る（4）	①生命の尊さについて、自分の将来と結びつけながら、学習しようとしている。			①子どもの心身の発達や子どもの生活についての知識を身につけている。
2	親として育つ（本時3／4）		①子どもの心身の発達、子どもを取り巻く状況や子育て環境について、課題を見つけ、解決への考えをまとめることができる。	①子どもとの接し方、子どもの衣食住にかかわる物づくりなどの技術を身につけている。	
3	これからの保育環境（2）	②子どもをとりまく状況について、現状を知り、その課題を見つけ、解決に向けて考えようとしている。			

5 本時の計画

(1) 本時のねらい 乳幼児に起きやすい事故とその安全対策について考える。(思考・判断・表現)

(2) 展開

段階	学習活動	指導上の留意点 (教師の支援)	評価(方法)
導入 5分	自分自身や兄弟などが幼い頃に経験したケガや危険だったことについて思い出す。[全体]	- 乳幼児の頃に自分が経験したケガや、兄弟などが経験したケガや危険だったことについて質問し、乳幼児の事故について関心を持たせる。 - 本時の目標を提示する。	
本時の目標：乳幼児に起きやすい事故とその安全策について考える。			
展開	20分	発問：家庭内では乳幼児にとってどこに危険な箇所あると考えられますか。 - 教室に掲げたイラストを見て、子どもにとって危険な箇所を探し出す。[個] - 各グループに戻り、割り当てられたイラストの中の自分が見付けた危険な箇所にシールを貼っていく。[グループ]	(イ)子どもに起きやすい事故とその安全策について考えている。(シート、発表)
	38分	発問：乳幼児の事故を防ぐためにどのような安全対策が考えられますか。 イラストの中の危険箇所から子どもの事故を防ぐための安全対策を考える。[グループ]	
	8分	- 発表する危険箇所とその安全対策を一つ選定させておく。 - 発表しやすいようにワークシートの記入例にそってまとめさせる。	
	10分	グループで出た意見を発表する。[全体]	
整理 7分	- 本時のまとめをする。[全体] - 自己評価を行う。[個]	乳幼児に多い不慮の事故についてグラフを用いて確認させ、子どもの安全を守るために保育者の環境整備が必要なことに気付かせる。	

2章 子どもと共に育つ

3 親として共に育つ (2) 子どもの生活と保育

家庭総合
(東京書籍)

学習目標：乳幼児に起きやすい事故とその安全対策について考える。

1) -1 イラストから、家庭内において乳幼児にとって危険な箇所を探してみよう。

番号	危険な箇所 例) ストープ	発達段階との関係 例) はいはいができる	番号	危険な箇所	発達段階との関係
①			④		
②			⑤		
③			※発達段階との関係…教科書 p 57 TRY 「乳幼児の発達と起こりやすい事故」の「発達の様子」などを参考に書き出してみましょう。		

1) -2 割り当てられたイラストの中の危険箇所から、乳幼児の事故を防ぐ安全対策を考えましょう。

危険な箇所	安全対策
(例) ○○○	(記入例) ○○○で～～ないように、△△する。(←ここが大事)
他のグループの発表をメモしよう。	

2) 乳幼児に多い死亡事故と保育者の役割



3) 学習を通して、子どもの安全を守るために、保育者はどのようなことに気を付けて行くべきか。

子どもに起きやすい事故と安全対策を考え、まとめることができたか。(できた・まあまあ・もう少し)

家庭科（ 家庭基礎 ）学習指導案

日 時：平成 28 年 2 月 23 日（火）3 校時

対 象：生物工学科 1 年 S 組 35 名

指 導 者：風登 友美

1 題材名 豊かな住生活を創造する

2 題材の目標

- (1) 住まいの文化や機能、住環境について関心をもち、よりよい住生活の創造にむけて意欲的に取り組もうとする。（意欲・関心・態度）
- (2) 暮らしやすい住まいについて、周りの環境とどのように関係しているのか考えることができる。（思考・判断・表現）
- (3) 住まいの安全対策、住まいにおける健康管理について実生活に役立てることができる。（技能）
- (4) 住生活を取り巻く環境についての知識を身につけ、現在の住生活の課題についても認識できる。（知識・理解）

3 題材と生徒

(1) 題材観

中学時の学習では、住まいのはたらきや安全で快適な住まいについて学習しているが、住生活の現状や生涯を見通して住居を計画することの重要性などについては詳しく学習していない。本題材では、ライフステージに合った住まいの在り方について考えを深めさせ、住居の持続的な活用をするために必要な維持管理・計画の仕方などについて取り扱っていきたい。

(2) 生徒観

男性 25 名、女性 10 名で発言は少ないが、課題には真面目に取り組むことができるクラスである。住生活については、興味関心のある生徒は少なく、将来の進路に合わせた住生活の選択についてしっかりと考えられていない生徒が多い。そこで本題材では、生涯を見通した住生活の計画の重要性を認識させるとともに、環境に配慮した持続可能な住生活の在り方について考えを深めさせていきたい。

(3) 指導観

調べ学習やグループワークを通して、自分の生涯を見通した住生活について、地域の特性などを踏まえて考えさせるようにしたい。またライフステージと住空間の設計の関係、住環境について考えを深めさせ、安全で快適な住まいや、社会環境・地域環境についての知識を身につけさせたい。

4 単元の指導と評価の計画

次	学習内容 (時数)	評価規準			
		関心・意欲・態度 (ア)	思考・判断・表現 (イ)	技能 (ウ)	知識・理解 (エ)
1	住生活について考える。 (3)	①住まいの文化や機能、住空間の計画や住環境について関心を持っている。			①住まいの文化や機能・役割などについて理解している。
2	住生活の計画と選択(2)		①ライフステージと住空間の設計の関係について考えを深めている。		
3	これからの住生活(2)			①住まいの安全対策、住まいにおける健康管理について実生活に役立てることができる。	

5 本時の計画

(1) 本時のねらい 気候風土と住居の関係について理解する。

(2) 展開

段階	学習活動		指導上の留意点 (教師の支援)	評価 (方法)
導入 5分	徒然草の一節から、日本の気候風土と住居の関係性について気付かせる。		・なぜ兼好法師はこのような考えたのか、日本の気候風土と関連付けて考えさせる。	
展開 40分	(15分)	本時の目標：気候風土と住居の関係について理解する。		(エ) 気候風土や文化と住居の関係について理解している。(シート)
		発問：地域に根差した住居にはどのような特徴がありますか。		
	(1) 北海道と沖縄県の住居の特徴を探し、その理由を考えて、発表する。[個→グループ]	・北海道と沖縄県の住居の画像を見て特徴をまとめさせ、なぜその特徴を持つのか理由をグループで考えさせる。 ・出た意見を発表させる。		
	(10分)	(2) その土地の気候だけではなく、風土や文化に合った工夫を持つ住居について知る。 [個]	・他の地域や世界の風土や文化に合わせた工夫を持つ住居を紹介し、そこに住む人々が自分の生活に合わせて伝統的な住居を作り上げてきたことを説明する。	
	(15分)	(3) 現代の住居の特徴を知り、気候風土に応じた住居と比較する。 [グループ]	・現代の住居の特徴を知らせる。 ・現代の住居の特徴から、環境についても考えさせ、気候風土に応じた住居はエネルギーをあまり使わない伝統的な省エネルギーの住宅であることに気付かせる。	
整理 5分	本時を振り返り、自己評価をする。			

NO.1

第8章 住生活をつくる

③住生活の文化

家庭基礎
(東京書籍)

学習目標：気候風土と住居の関係を理解する。

1. 気候風土に応じた住居

○一般的な日本の気候風土

- ・ (①) → (②) が豊富
- ・ (③) がはっきりしている → 夏は暑く、冬は寒い
- ・ (④) → (⑤) の家は倒壊しやすく危険

○北海道と沖縄県の住居の違い

	北海道	沖縄県
特 徴		
理 由		

気候風土に応じた住居（まとめ）：

人々の暮らしにとって住居は生活の大きな基盤

- ・それぞれの地域に住む人々は、自分たちの (①) に合わせて伝統的な住居をつくり上げてきた。
- ・住居の特徴からその地域の (②) の特徴が見えてくる。

2. 伝統的な日本の住居の工夫。

○現代の住居のメリット・デメリット

メリット	デメリット

- ・現代の住居は断熱性・気密性が高く、快適であるが、(①) を引き起こしたり (②) に頼るところが大きいなどの問題点もある。
- ・気候風土に応じた住居は自分たちの暮らしに合わせて伝統的な住居をつくり上げてきた。不用意にエネルギーに頼ることが少ない、伝統的な“(③)”といえる。→【④】

3. 振り返り：①学習を通して、気候風土と住居の関係について分かったこと、考えたことなどを書きましょう。

②気候風土と住居の関係について理解できましたか。(A ・ B ・ C ・ D)

教科〔 農業 〕 科目〔 動物バイオテクノロジー 〕 学習指導案

日 時： 平成 27 年 10 月 13 日 3 校時

クラス： 生物工学科 3 年 S 組 (18 名)

場 所： 生物工学第二実験室

指導者： 大沼克彦

1. 単元名 第 3 章 動物バイオテクノロジーの基礎 第 2 節 受精卵の操作

2. 単元の目標 家畜の繁殖の基本である生殖器の構造や生殖腺のはたらきと、生殖細胞の構造などの基礎知識を理解して、生殖細胞の取り扱いを学び、人工授精、体外受精、及びその技術について理解を深める。

3. 単元と生徒 生物工学科男子 12 名、女子 6 名 (計 18 名) の選択授業のクラスである。積極的に発言する反面、飽きやすい生徒と、ほとんど発言することなく黙々と取り組む生徒という両極端な集団である。また、習熟度等における個人差も大きいので、論理的な思考を苦手とする生徒への配慮が必要と思われる。動物バイオテクノロジーは、これまで学んできた植物バイオテクノロジーとは細胞の扱いや注意点も異なるため、実践が必要な単元である。

4. 指導と評価の計画

・指導計画 第 2 節 受精卵の操作 (計 12 時間)

第 1 卵胞卵子の体外成熟	…… 2 時間
第 2 体外受精	…… 4 時間
第 3 受精卵の体外培養	…… 2 時間 (本時 2/2)
第 4 受精卵移植	…… 2 時間
第 5 受精卵の凍結保存	…… 2 時間

使用教科書：「高等学校用 動物バイオテクノロジー」(文部科学省)

本単元の評価規準

関心・意欲・態度(A)	思考・判断・表現(B)	技能 (C)	知識・理解(D)
卵の操作を体験することで学び取ろうとする。	卵の操作の際の手順を理解して、最適な受精卵を作出するための方法を説明できる。	卵の操作ができる。	受精卵の操作に必要な手順の意味を理解している。

5. 本時の計画

(1) 目標 卵の操作法について学ぶ

(2) 展開

	学 習 活 動 内 容	指導上の留意点	評価の観点
導 入 5 分	・卵の直径について確認する。 ・キャピラリーの使用上の注意を考える。	・使用するキャピラリーや卵について、材料から注意点を考えさせる。 (発問：卵の操作にはどのような注意が必要か)	・一般的な動物の受精卵の大きさを理解している。(D：知識・理解)
展 開 40 分	・自作したキャピラリーで卵を操作する。 ・キャピラリーが十分な大きさを確保できていなければ対処法を考える。	・マウスピース、チューブ、キャピラリーのつなぎ方と、持ち方を説明する。 ・卵の操作法について演示する。 ・卵の操作法を体験させる。	・卵の操作ができる。(C：技能)
ま と め 5 分	・本時の内容を整理して感想をまとめる。 ・次時の内容を確認する。	・卵の操作を通して動物バイオテクノロジーの一端の体験から、知識の定着を図る。	

7 研修部報

10年研 報 告

本校には2名の初任研対象者のほかに、10年経験者が3名おられます。

10年研では選択研修といって、民間企業や公的機関等で3日間研修を行う、いわば“インターンシップ”的なものが実施されます。この研修は、自分で研修場所を選び、交渉するところから始まります。この夏休みを利用して実施した選択研修について報告をいただきました。

研修内容および感想

2学期以降の研修に対する抱負

大坂淳先生

7月29日(水)から31日(金)までの3日間、秋田市河辺にある秋田県林業研究研修センターにおいて研修を実施した。研修内容は、今後の授業や実験・実習に活かすことのできる基礎実験と講義が中心で、2日目には施設見学などもさせていただいた。とても計画的なプログラムを組んでいただいただけでなく、きめ細かな指導とアドバイスをいただき、充実した研修を行うことができた。また、研究員の方々から貴重なアドバイスなどもいただき、知識の幅を広げることができたと感じている。

この3日間の研修内容を生徒に還元できるように、自分自身がさらに教材研究に力を入れ、取り組んでいかなければならないと強く感じた。

この3日間の研修内容を活かし、授業内容と実験内容とをリンクさせながら、継続的な実験・観察ができるように工夫をしていきたい。また、研究員の方々と連携を図りながら、2年生の課題研究でテーマを決めて研究を進めていきたいと考えている。

高階市太郎先生

7月18、19日に加藤先生と株式会社安藤醸造が運営する「麴くらぶ」で研修を実施した。7月18日がオープンということで、開店準備や企画の1つである流しそうめんの運営が中心となった。両日とも雨で、なかなか思うようにいかない面もあったが、たくさんの方々の支えもあり、充実した研修にすることができた。

株式会社安藤醸造は本店以外にもいくつか店舗を運営しており、当日は各店舗からも応援スタッフを呼んで開店に備えていた。通常の業務や組織とは異なるため、多くのスタッフは不慣れな点が多々あるように見えたが、互いに声をかけ合い1つ1つ課題を解決していた。教員もマニュアル通りいくことはなく、臨機応変に対応していくことが多い仕事である。今回の研修では組織として動くことの重要性和、問題が生じたときに落ち着いた対応ができる柔軟性を再確認することができた。その感覚を失わずに通常の仕事に励んでいきたいと考えている。

教科研修に力を入れていきたい。今回センター研修で指導案を提出する講座があり、教材と向き合い指導案を作成していく中で知識不足や自分自身に対する甘えを痛感した。今までの経験で教えられる単元もちろんあるが、時代の変化に対応した単元がほとんどであると考えている。また、授業構成を考える上で生徒の積極的な発言を促す指導にも力を入れていきたい。

加藤雅隆先生

7月18、19日の2日間、安藤醸造本店横の「麴くらぶ」の新規オープンのスタッフとして研修を実施した。「麴くらぶ」とは甘酒や寒こうじなど麴関連商品をより多角的に販売するお店であり、今回はオープン記念として企画された流しそうめんや焼き鳥などのイベントのサポートや商品の補充や包装を担当することとなった。両日ともに雨の影響で様々な工夫をしながらの開催となったが、多くの方々のご協力によって、この研修の目的である「異なる業種の体験を通じて視野を広げること」というテーマについて「つながり」という観点で「人とのつながり」をはじめ多くのことを学ぶことができた。その中でも「時間的なつながり」という点では「流行と不易」という言葉があるように教育現場でも重要なことなので様々な場面を通じて理解を深めていきたい。

「つながり」という点で「教育」は、ありとあらゆるもの(こと)と関連している。このことを踏まえて今後の研修では「授業改善」をしていきたい。具体的には「教科の目標」「単元の目標」「本時の目標」がしっかりと生徒のためにつながっていることを意識した授業ができるように研修に努めたい。

おしらせ

- ・各高校からいただいた研究紀要は職員室行事予定黒板前に置いてありますのでご活用ください。冊子やCD-ROMで来ている学校とウェブサイトからダウンロードする学校など、発行形式は学校によって異なります。
- ・教育専門監養成派遣事業：全県で27名の教育専門監がおられます。この事業を活用したい方は詳細を石垣にお問い合わせください。
- ・大曲養護学校公開研究会 10月9日(金) 参加希望または詳細については石垣までどうぞ。



磨斧作針

第2号

2015/08/31

担当: 研修部 石垣



自分の潜在能力 ～始業式のスピーチより～

「潜在能力」

自分の潜在能力を見つけてほしい。

→そのためには

- ・興味関心のある分野を突き詰める。
- ・いろんな場面で自分が発見したり、他人にも発見してもらう。
- ・望ましい習慣を続ける。習慣は第2の個性。
- ・いきなり大きなことにではなく、小さなことからコツコツと取り組む。
- ・よく遊ぶ。メリハリをつける。
- ・よく眠る。

「自分の限界」

自分の限界を自分で簡単に決めてしまわない。自分の限界は自分ではわからないもの。

始業式での校長先生のお話を興味深く拝聴しました。お話をうかがっていてふと考えました。“大人の自分とはや潜在能力を探る必要はないのか”と。いい大人が今更探っても・・・と考える方もおられるかもしれません。生徒たちが潜在能力を探ることは進路目標達成や社会貢献に直接つながるので探る意義は大いにありますが、手に職を持ち、日々の生活の中で充実し(疲れて?)、しかも人生経験も豊富な大人がこれから新たな能力を発掘してどうするのか、と考えるのは当然かもしれません。しかしここで敢えて、人生経験豊富な大人がまだ眠っているかもしれない自分の能力を探るメリットを考えてみます。

とある能力が自分にあるとわかれば、それができることが楽しいに違いありません。そして、何度もそれに挑戦し、それに多くの時間を割くことでしょう。そして、その過程において、それに取り組む自分が日々生き生きして、充実した生活を送っていることに気付くのでは

ないでしょうか。あわよくば、それで退職後の生計を立てられるかもしれませんし、ボランティアとして社会貢献ができるかもしれません。芸は身を助ける、ではありませんが、まだ埋もれているかもしれない自分の能力が今後の人生を豊かにするとすれば、いい大人にも潜在能力を探る価値はあると思います。

「潜在能力を見つけるには、興味関心のある分野を突き詰めるとよい」という話をうかがっている時、私は幼い頃絵を描くことが楽しくて、暇があれば画用紙やノートに絵を描いていたことを思い出しました。私には絵の才能が潜んでいることを期待しつつ、大人が潜在能力を探るには、感覚的に活動していた幼少時代に関心があったものを手がかりにすればいいかも・・・とも思いました。おそらく本来の意図とは全く別のところに話が及んでしまったと思いますが、この機会に幼い頃を思い出しつつ潜在能力を探ってみるのもいいかもしれません。

Question: 覚えてますか? (5月14日職員研修より)

本校のAED設置場所は何か所?それはどこ?

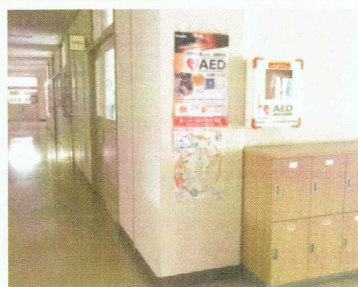
↓答えは裏面↓



Answer: AED は3箇所にあります。場所によっては取って戻るまでに時間がかかります。



事務室前



実習棟職員室前



大嶋農場(育すう管理鶏舎内) 撮影協力:黒田先生

「初任者研修を受講して」 風登 友美 先生

4月1日、辞令交付式において、新規採用者として氏名点呼を受け、改めて秋田県のエ教公務員として採用されたのだという実感が湧き上がった。それとともに、この職業の責任を感じ、身の引き締まる思いがした。教育委員長や高校教育課の先生方の話を通して、教職員として学び続けていく姿勢や教職員の心構えを学んだ。自分の立場をきちんと自覚し、生徒に信頼される教師になるために、生徒に対していつも真摯に向き合い、必要なときには手を差し伸べ方向を示していける教師になりたいと思った。そして、この先始まる初任者研修では主体的に励み、そこで得たものをこれからの教員生活に役立てていきたい。そして自らを高めていくことを怠らず日々の仕事を大事にしたいと心に誓った。

以下、これまで受講した校外研修について、内容を簡単ながらも報告したい。

総合教育センター主催の研修では、「教育公務員の服務」から始まり、進路指導や生徒指導に関すること、そして教科に関することなどを様々な側面から、日々の教師生活で役立つことを学ばせて頂いている。特に、教員の基本である授業づくりに関する研修は、非常に興味深いものであった。声かけによって生徒の声を引き出し、対話によって生徒の考える力を引き出せるということを知り、それが生徒の学習意欲にもつながることを学んだ。また、授業の仕方においては、生徒の実態を踏まえた教材研究が必要であり、教材研究の深さは授業の良さにつながると話されていた。生徒の学び、そして自分自身の学びのためにもよい授業をつくっていきたいと感じることのできた研修であった。その他の研修も講義だけではなく、同期との協議や演習も多く、他教科の先生方の考えや他校での実践などを共有することができ、大変勉強になっている。研修を受けるたびに自分の教師としての未熟さを感じることが多いが、自覚と責任を持ちながら、明るく前向きに職務に励んでいきたいと強く思う。

高校教育課主催の研修では、授業研修Aを受講し、模擬授業として1時間分の授業を考えた。ねらいと評価が一体化しているか、ねらいを達成するための発問や教材は的確かというところに焦点を当てて授業を構成したが、まだまだ力不足だと言うことを痛感した。浅沼指導主事や他の初任者研修者からも、様々な助言をいただくことができ、自分の授業を客観的な視点から評価していただく貴重な機会となった。浅沼指導主事からは「なぜこのことを学習するのか」という学習する意味を持たせることが大切だと教わった。家庭科の特性を活かして、より生徒の身近な生活に密着して、実生活で活用することができるような授業を目指していきたい。この研修で頂いたたくさんの助言をもう一度確認し、研修の反省も踏まえて今後の授業がさらにパワーアップしたものになるようにしていきたい。

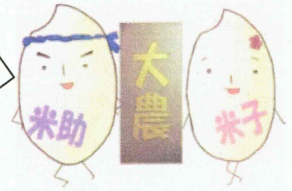
初任者研修をようやく半分を終えようとしている。今までの講師という立場では経験できなかった仕事内容を知ることができ、大変勉強になっている。自分自身の未熟さに気付かされる場面も多いが、研修で得た成果を今後に活かしていけるよう、日々高い志を持って研修に励んでいきたい。

磨 斧 作 針

第3号

2015/9/10

担当：研修部 石垣



中高学習指導研究協議会

9月1日(月)

角館中学校・角館高校

テーマ「言語活動の充実と学び合いを通した

生きる力を育む授業」

～聴く、伝え合うことによって理解を深める指導の研究～



中学校 国語の公開授業

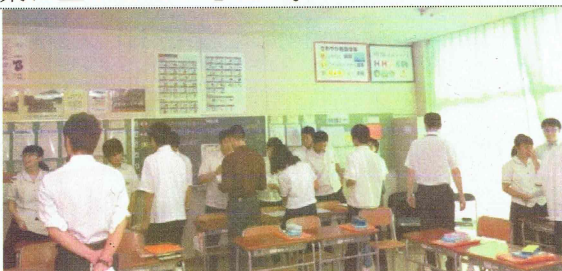
毎年、県教委主催で全県3地区で行われているこの協議会ですが、今年の県南地区は角館を会場に開催されました。本校からは国・社・数・理・英の5教科5名が参加しました。それぞれの先生方から感想をいただきましたのでここに掲載します。

国語(高橋華子先生)

角館中学校では佐々木先生が3年生を対象に「奥の細道」の「平泉」、角館高校では千葉先生が1年生を対象に「漁夫之利」を教材として研究授業を行った。両者ともにグループ学習の形態で授業が行われ、生徒は活発に意見を交わしていた。

毎回、中学校の授業を参観するたびに生徒の発表態度や発表内容に感心させられるのだが、今回も自分の考えを自分の言葉でまとめ、しかも自分以外の発表内容をしっかり受けとめて発言できていた。教師の発問が的確であり、また発表者に対してうまい具合に合いの手を入れるなど、生徒が安心して発言できる雰囲気が作られていた。

中学段階で自分の考えをまとめ発表するという基本的なことができています。高校ではそれを継続させるだけでなく、本文で述べられていることを根拠にして自分の考えをまとめさせるところまで引き上げなければならないと思った。また、秋田大学の阿部教授からは生徒のレベルからすれば目標設定が低いのではないかというお話があった。「新しい発見をさせる」＝「学び」であり、そのための課題設定やグループ学習であるという指導助言を今後の授業に生かしていきたい。



中学校 英語のペア活動

地歴(佐々木俊友先生)

今回の協議会には、初めて参加した。はじめに角館中学校で赤上先生の授業を参観した。資料提示から、比較し気づいたことを問う形で授業が始まった。教師側が指名する間もなく半数くらいの生徒が挙手をした光景は圧巻であった。改めて、地歴科での資料活用とは、生徒が主体的な学習活動を促すことを確認できた。意見発表では、「誰が、どのようにして」という視点を大切にしていた。意見発表や交流時には、キッチンタイマーで制限時間を設けたり、ホワイトボードを活用するなど補助教材の活用も目を引く点であった。終盤の意見交流では、生徒が学び合う姿勢もあり、主役は生徒ということを再認識させられた。

角館高校では千葉先生の授業を参観した。生徒を国に見立て、緯度経度を意識した座席配置には参観者から驚きの声が漏れていた。事前に担当する国を調べており、自分の発する情報への責任感という観点からも復習内容や入試を見据えた発問、説明を求められる発問に対しても、教科書資料集等をフル活用し答えを導き出そうする姿や隣国(隣人)での協働の授業の積み重ねの重要さを感じた。

分科会では、問題解決能力や問いを発するには「予想をたてる」ことの重要性があがった。予想を立て話し合うことが言語活動につながり、それが学び合う姿勢や協働的作業へと繋がっていくはずということ。そのためには、解へと導く裏付け資料や明確な発問、教師の支援が必要であることを再認識させられた。協議会では、他教科の協議内容も授業に取り入れることができる点があったので参考にしたいと思う。



数学(菅原久美子先生)

今回のテーマは「言語活動の充実と学び合いを通して生きる力をはぐくむ授業～聴く、伝え合うことによって理解を深める指導の研究～」でした。中学校では「一次関数を用いて具体的事象を捉え説明させる指導の工夫」高校では「2次不等式の解法として、グラフを活用することのよさを認識させる授業の実践」というサブテーマのもとに授業が行われました。

中学校では修学旅行の話をきっかけにして新幹線の速度と距離から、角館と東京間の距離を求める題材で授業が行われました。生徒が前に出て自分の考えを述べたり、グループで話し合ったりしながら解決していく授業でした。高校では2次不等式を代数的に解く方法とグラフを用いた方法とを比較し、どちらが考えやすいかを考えていく授業でした。

分科会では授業に関する意見交換等が行われました。ある先生からの「中学校ではいつもグループで活動しているのか」という問いに対して、中学校の校長先生から、「グループ活動は小中だけでなく、大学でもやっている。高校がやらないだけではないのか」という指摘もありました。しかし、今回の授業で一つのグループに注目して見ていましたが、活発な話し合いが行われていたとはいえなかった状況でしたし、グループ内の他の生徒が解くのをずっと待っていて全く参加していない生徒もいました。このような会では、つねに中学校ではグループ活動をしているのに高校ではやらない、という議論が持ち上がるのですが、いづどんな場面でグループ活動を行うと効果的なのかということを考えてみるべきではないのかなと思っています。今回も残念ながらそこまでの話には至りませんでした。

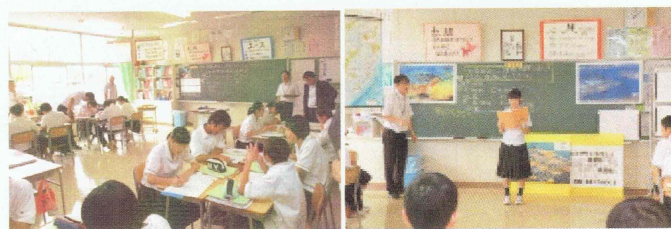
言語活動の充実という面から考えてみると、数学で自分の考えをしっかりと話せる生徒は少ないなと感じています。数学の用語をしっかりと覚えていないということも問題点の一つだなと感じました。生徒にわかりやすいように言い方を変えることもあるのですが、用語は用語としてそこはきちんと使っていかなければならないと反省しました。

今回も中学校と高校の間のギャップを感じた研究会でした。特に数学の専門性のところのギャップ、例えば1次関数や2次関数は連続しているのですが、中学校では整数値についての飛び飛びの値を使って考えていくことが多い。すると、生徒は関数・グラフがつながっているという概念があまりないのではないだろうか。しかし、高校では表の値から点を取ってグラフを書くことはありません。私はそういうギャップを埋めていくのは高校の先生だけの仕事ではなく、中高協力していかなければならないのではないかと思います。

できれば、このような研究会ではそういうところの協議をたくさんしたいと思いました。

理科(鈴木絢平先生)

今回改めて、中高が連携した協議会の必要性を実感した。中学校1年生の授業に対する反応は大変素直であり、自分の考えを伝えようとする努力が随所にみられた。教師による生徒の考えの引き出し方も、生徒自らが疑問を持ち、課題に向けて解決する手立てを考えさせるような工夫が施されており、大変参考になった。一方、高校ではより専門的な実験から、生徒の科学的な思考力を高めようとする取り組みが見受けられた。双方で、今回のテーマである言語活動の充実に向けて、生徒対教師ではなく生徒同士の学び合いを重視している姿が見られ、アクティブ・ラーニングの有用性を実感した。



中学校 数学と社会の授業にて

英語(石垣ルリ子)

恒例のこの協議会は、普段見ることのない中学校の授業を参観できる絶好の機会である。自分が担当している生徒達が中学校でどのように教わってきたかを知ることが、普段の授業を行う上で非常に重要かつ有益である。角館中学校の出町先生の授業では、冒頭で生徒による短いスピーチが行われ、聞き手は同意などの表現を用いて反応しながら聞いていた。この他にも普段からやっていないとできないような場面が随所で見られ、普段から授業のルールや表現のパターンを明示し、生徒に徹底させていることがうかがえた。このようなパターン化された小さな積み重ねが後々自由に表現する力に発展するのではないだろうか。また、楽しく活動できる工夫としてタブレットやリズムマシーンを用いており、私もぜひ試してみようと思った。

また、中学・高校の授業を通して見て、活動形態、各活動で与える時間、全体にフィードバックする方法について改めて考えさせられた。私は活動によってペアやグループなどの単位を用いるが、どの形態がその活動に最も効果的なのかを授業準備の段階で深く考えていないと感じた。活動のために与える時間も、例えば3分だったらなぜ3分なのか根拠に基づいて時間設定しなければならないし、作文や意見などを全体にどのような形でフィードバックすれば効果的なのか等、ともすれば普段何となく設定してしまうような細かいことも丁寧に考えていかなければならないと感じた。

※要項や当日配布資料等、詳細をご覧になりたい方は参加された方に直接お問い合わせください。

※掲載写真は太田分校 高橋輝享先生が撮影したものをいただきました。

磨 斧 作 針

ま ふ さく しん

第4号

2015/9/28

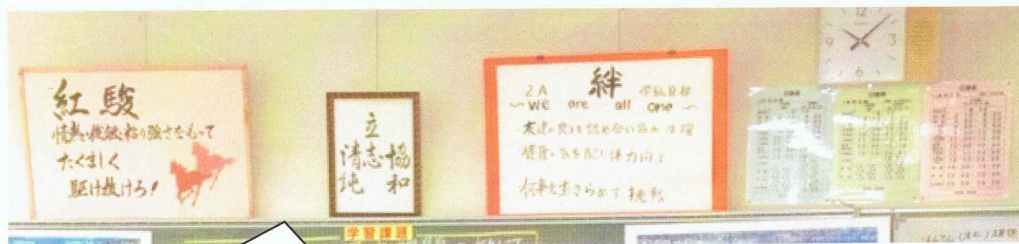
担当: 研修部 石垣



感性豊かに 自由に

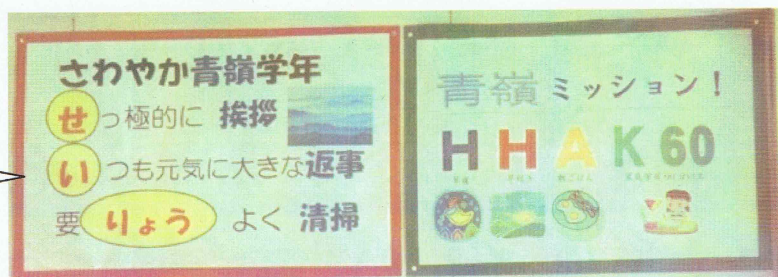


小中学校を訪問すると、掲示物が豊かなことにいつも感銘を受けます。掲示物の種類だけでなく、色や形も様々に工夫されています。見ていて最も楽しいのが教室内の掲示です。生徒を引き付ける工夫の宝庫です。先日、中高学習指導研究協議会で訪問した角館中学校の掲示物を紹介します。



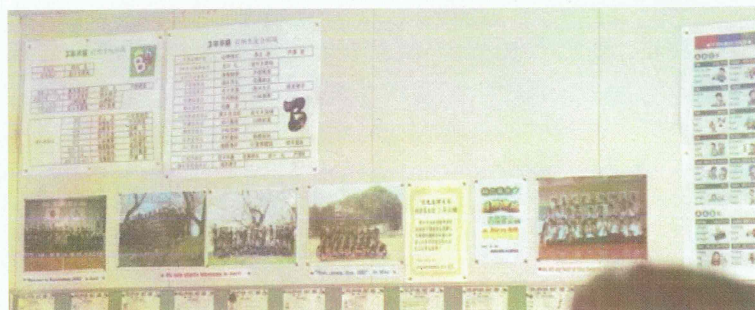
教室掲示は担任の特色が色濃く出るところでもあります。

学年目標は同一学年全教室に共通して掲げられています。



教室横(廊下側)の掲示。見出しが英語で書かれ、英語担当の担任らしさが表れています。

本校の教室を覗いてみると、クラスのスローガンやクラスマッチの写真が掲示されている教室がありました。教室に行った際は掲示物に目を向けてみると楽しいと思います。



上の写真と同教室後方の掲示。動作を表す英単語の表が貼られています。行事ごとのクラス集合写真も見えます。

新聞のプロから 教わりました

9月10日 PTA連合会主催

広報紙編集研修会

講師:秋田魁新報社編集局制作センター 佐藤誠吾氏

- ・新聞は「幕の内弁当」。担当者は調理師。幕の内弁当にはいろんなおかずが入っている。メインディッシュがおいしそうでないと食いつかない。
- ・学校の広報紙はどんな弁当にするかを自分たちで決められる。何をPR、アピールしたいのか、で決まる。
- ・特集を一つ設ける。行事における準備などをドキュメンタリータッチで画像をふんだんに使うとおもしろい。
- ・変則的な見出しは読者の好奇心をくすぐる。縦書きの記事の中にポツンと横書きがあると目立つ。
- ・画像の使い方を考える。写真は非常に物語るものが多い。単なる“場所ふさぎ”ではない。
- ・生徒の顔を出すことに對して抵抗がある学校もある。これについては難しいところ。
- ・学校の雰囲気がかかるものを作れば、学校のPRにもなる。
- ・写真は新聞の上の方に置くのが普通。
- ・新聞を作る前に「このスペースは何字分なのか」を数える。原稿を準備（依頼）する時はそれに基づいた字数で。
- ・囲み記事は効果的に使う。多すぎるとどこから“食べて”いいのかわからなくなる。シリーズものの囲み記事は見出しにナンバリングをすると、切り抜きする人が多くなる。
- ・全部横書きだと読みにくいかも。

講師は魁新聞の制作センターに所属し、魁新聞の編集一切を取り仕切っている方でした。「今日のこの新聞のレイアウトが決まったのは夕べの〇時頃で…」と、この日の新聞を片手に、制作秘話的なエピソードなども交えながら話してくださいました。

参加者は30名ほどで、各校の最新のPTA会報を持参しました。広報紙はその学校の前号を参考に作られることが多いので、他校の広報紙を見ることは、自校の広報紙に新しい風を吹かせられる良い機会になると思いました。

実際に持ち寄られた会報を見てみると、オーソドックスなものから斬新に感じられるものまでさまざまでした。

興味深く拝見したのは横手清陵の会報で、A3サイズ一面に職員室の座席と同じレイアウトで職員の顔写真が入っていました。また、講師の佐藤さんは横手高校定時制の会報を「お金がかかっていないそうだが、良くできている」と褒めておられました。

上のメモは講習内容の一部抜粋です。学級通信など各種通信にも活用できる内容かと思ひ、掲載しました。

なお横手高定時制の会報のコピーをいただいていた方石垣までどうぞ。

教員免許更新

※この件について別紙をお配りしております

↓
「更新講習受講、修了確認・有効期間更新のイメージ」と「教員免許更新制とは？」のA4判両面刷り2枚

文科省から9月14日付けで「教員免許更新制における免許状更新講習の受講及び円滑な手続等について」という事務連絡が入っております。先生方には別添で送付された文書を2枚、この部報とともに別紙でお配りします。そのうち1枚は、旧免許状と新免許状それぞれの更新について、もう1枚には更新時期を確認できる表が記載されています。すでにご自分の更新時期を御存知だとは思いますが、この機会に再度御確認ください。

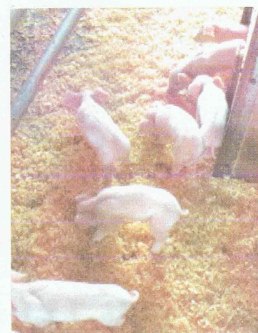
特に一度更新を終えた方は、次回の修了確認期限は何年も先になりますので、必ず御確認ください。

お知らせ

秋田大学高大接続教育フォーラム 10月23日(金)
アクティブラーニングや新テスト関連の内容です。
詳細を知りたい方は石垣までどうぞ。

研修会等のお知らせが入った場合、内容によっては朝会や部報でお知らせしますが、その他のものは随時、中央のホワイトボードに掲示しておきます。御覧ください。

あたらしいのち



太嶋農場で誕生しました。農業ってすばらしい！

磨 斧 作 針

第5号

2015/12/11

担当: 研修部 石垣



第30回秋田県教育研究発表会

I 第30回 秋田県教育研究発表会の御案内 (第2次案内) ～「郷土あきたの教育への提案」～

- 1 主 催 秋田県教育委員会、秋田県総合教育センター
2 期 日 平成28年2月4日(木)～5日(金)
3 会 場 秋田県総合教育センター
4 日程(概要)

2月4日(木)	9:30	9:50	10:00	11:50	12:40	13:30	15:30
	受付	開会式	準備	パネルディスカッション ふるさと教育推進プロジェクト 「郷土あきたに学ぶ」	昼食・休憩	研究発表(ポスター)	研究発表
2月5日(金)	9:20	11:00	11:10	12:00	12:50	14:50	
	受付	講演	移動	研究発表(ポスター)	昼食・休憩	研究発表	

＜パネルディスカッション＞

日時 平成28年2月4日(木) 10:00～11:50
テーマ ふるさと教育推進プロジェクト 「郷土あきたに学ぶ」

コーディネーター	秋田大学教育文化学部	阿部 昇	教授
パネリスト	県立角館高等学校	福原 幸子	教諭
	湯上市立羽城中学校	近藤 秀一	教頭
	能代市立湊城南小学校	佐藤 敦子	教諭
	総合教育センター	八木澤 徹	指導主事

＜講演＞

日時 平成28年2月5日(金) 9:20～11:00

講師 (株)佐々木常夫マネージメントリサーチ代表 元東レ経営研究所社長

佐々木 常夫 氏

演題 「郷土あきたの教育への提言～自らの体験を基に～」

プロフィール

1944年秋田市生まれ。6歳で父を亡くし、4人兄弟の次男として母の手ひとつで育つ。
1969年東京大学経済学部卒業、同年東レ入社。自閉症の長男の世話など多難な家庭生活。一方、破綻会社の再建やさまざまな事業改革など多忙を極め、そうした仕事にも全力で取り組む。
2001年、東レ同期トップで取締役となり、2003年より東レ経営研究所社長となる。
内閣府の男女共同参画会議議員、大阪大学客員教授などの公職を歴任。
著書「それでもなお生きる」(河出書房新社) 「ビッグ・ツリー」(WAVE出版) など多数

今年度の秋田県教育研究発表会の詳細が発表になりました。研修部で一括して参加を申し込みますので、参加を希望される方は石垣までお申し出ください。
一月十四日(木)を校内締切とします。なお、参加は両日でもどちらか一日だけでも構いません。

追伸

2月4日(木)の午後には、照内之尋先生による研究発表があります。岩手大学院での研修から、地方創生における農林業の成長産業化に向けた提言「山村の現局面と森林を活用した地域振興への意向に関する研究」～研究手法を駆使した学校農業クラブ活動への導入と、今後の農業高校におけるプロジェクト研究領域に関する一私論～というテーマでの発表です。

多くの研究発表が予定されています。一覧を中央ホワイトボードに掲示しておきますので御覧ください。参加を申し込まれる方は、どの発表に参加するかも記入しなければなりませんので、あらかじめ一覧から選んでおいてください。

初任研、5年研、10年研の先生方は、お忙しいとは思いますが、この研究発表会に奮って御参加ください。(以前お知らせしましたが、高校教育課からそのように通知が来ています。)

教員免許状更新講習の選択必修領域の導入について

次のような文書が入っています。別紙も合わせて御覧ください。

教員免許状更新講習の選択必修領域の導入 について（依頼）

このことについては、平成26年10月17日付け教義-1770「教育職員免許法施行規則等の一部を改正する省令等の公布について」及び平成27年9月14日付け事務連絡「教員免許更新制における免許状更新講習の受講及び円滑な手続等について」において通知しているところですが、別紙のとおり、平成28年4月から、免許状更新講習の「必修領域」の内容及び時間数が見直され、新たに「選択必修領域」が導入されます。

ついては、上記通知も参考の上、改めて別紙の内容を貴所属の職員に周知してくださるようお願いいたします。

また、今回の改正には経過措置が設けられています。平成27年度から平成28年度にかけて引き続き受講する職員（第7グループ及び栄養第2グループに属する職員）がいる場合には、特に留意してくださるようお願いいたします。

更新講習受講対象者 （平成28年4月以降）

1 旧免許状（平成21年3月31日以前に授与された免許状）を所持する者のうち、次のいずれかに該当する者

○第7グループ

最初の修了確認期限	対象者の生年月日	受講期間
平成29年3月31日	・昭和36年4月2日～昭和37年4月1日 ・昭和46年4月2日～昭和47年4月1日 ・昭和56年4月2日～昭和57年4月1日	平成27年2月1日～平成29年1月31日

※栄養教諭免許状を所持する者を除く。

○第8グループ

最初の修了確認期限	対象者の生年月日	受講期間
平成30年3月31日	・昭和37年4月2日～昭和38年4月1日 ・昭和47年4月2日～昭和48年4月1日 ・昭和57年4月2日～昭和58年4月1日	平成28年2月1日～平成30年1月31日

※栄養教諭免許状を所持する者を除く。

○栄養教諭免許状所持者の第2グループ

最初の修了確認期限	栄養教諭免許状の授与時期	受講期間
平成29年3月31日	・平成18年4月1日から平成19年3月31日までに栄養教諭の普通免許状を授与された旧免許状所持者	平成27年2月1日～平成29年1月31日

○栄養教諭免許状所持者の第3グループ

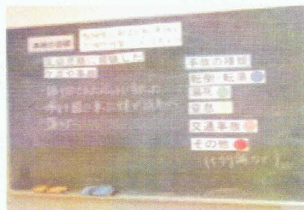
最初の修了確認期限	栄養教諭免許状の授与時期	受講期間
平成30年3月31日	・平成19年4月1日から平成20年3月31日までに栄養教諭の普通免許状を授与された旧免許状所持者	平成28年2月1日～平成30年1月31日

2 新免許状（平成21年4月1日以降に授与され、「有効期間の満了の日」の記載がある免許状）を所持する者のうち、次に該当する者

- 「有効期間の満了の日」が次のいずれかに該当する免許状を所持している者
- ・平成29年3月31日
 - ・平成30年3月31日

※複数の新免許状を所持する方の「有効期間の満了の日」は、お持ちの免許状の「有効期間の満了の日」のうち、もっとも遅い日に統一されます。

第1回 互見授業



【参観シートより抜粋】 ※いただいた感想・意見は研究集録に載せる予定です。

- ・普段、教室での授業で落ち着いて話を聞けない生徒は、体育館に行っても同じだと思った。
- ・生徒が、自分が次に何をすべきかわかっていて自主的に行動している。
- ・生徒同士で話し合う場を設定し、発表ではいろいろな考えが出ていた。
- ・話し合いに積極的でない生徒や、発表時に声が小さい生徒への指導の工夫が必要。
- ・生徒の発言の活かし方が上手い。板書がとても分かりやすかった。（よく準備されていた。）
- ・授業規律がしっかりと身についている。
- ・意見発表した後に先生が話している内容にも、生徒に考えさせる教材がいくつかあったと思った。
- ・生徒と一緒に考えながら授業を進めている。
- ・動きのある授業で、個で考える時間とグループで協議する時間があり、考えを深めるにはとても良い授業だった。
- ・黒板を見る指示、プリントへ記入する指示など、指示が徹底されていた。

・自分では当たり前のように
なっていることを、改めて
振り返ってみましょう。
例) 声量、板書、目線、
口癖、指示の仕方…等
・第2回互見授業は
1月22日～28日 です。

— 編集後記 —

多くの方々から寄稿いただき、おかげさまで研究集録が完成いたしました。お忙しいところ本当にありがとうございました。

私たちの生活は毎日が研修です。自分では当たり前のように実践していることでも、他の人から見れば新鮮で斬新な取り組みかもしれません。特に異なる教科や分掌の取り組みは、一見関係のないように思えますが、自分の分野を深めるためのアイデアを提供してくれていることが多々あります。そういう意味でも、この研究集録は他の方が実践していることを共有できる有意義な場であると思います。今後の取り組みに向け、何かよいヒントが本集録から見つかることを願っています。

研修部